来たる艱難期--黙示録の歴史

第１部：艱難期を研究するための聖書資料
黙示録１章 1-20 節

ロバート・D・ルギンビル博士　著

来たる艱難期--黙示録の歴史

このシリーズは、
ヨハネの黙示録を一節ずつ釈義し、
来たる艱難期の全側面について
考察するものです:

➡第 1 部:　はじめに 艱難期の聖書的根拠
第 2 部　A:　七つの教会: 教会時代の七つの時代
　　B:　天の前奏曲: 天国における艱難前夜
第 3 部　A:　艱難の始まり: 艱難期前半
　　B: 反キリストとその王国:獣:反キリストの全て
第 4 部: 大艱難期: 艱難期後半
第 5 部: 再臨とハルマゲドン: キリストの再臨
第 6 部: 最後の出来事:千年王国と新しいエルサレム
第 7 部: 艱難に備える: 艱難期における行動規範

来たる艱難期　黙示録の歴史：

第１部：艱難期を研究するための聖書資料
黙示録１章 1-20 節

ロバート・D・ルギンビル博士　著

内容

Ⅰ. 艱難期の定義と概要 1
1. 適用範囲と方法論 4
2.定義と用語 10
3. 終末の時代と動機 27
Ⅱ. 艱難期の全体的の背景：サタンの反乱と神の御計画 33
Ⅲ. 艱難期の一般的特徴 40
Ⅳ. 艱難期の歴史に関する聖書の情報源 60
1. 解釈学的な課題 60
a. 預言の短縮遠近法 62
b.「主の日」パラダイム 68
c. 裁き・回復・置き換えのサイクル 80
d. 旧約聖書の預言における類型と順序 96
2. 終末の時代に関する聖書の情報源 100
a. 旧約聖書 100
b. 新約聖書の書（黙示録以外） 130
3. 黙示録 132
Ⅴ. イエス・キリストの黙示 黙示録 1 章 1-20 節 135
Ⅵ. 結論：私たちの希望の真の焦点 187

Ⅰ. 艱難期の定義と概要

世俗の歴史は、言うまでもなく、一般的に過去について書かれています。しかし、イエス・キリストを信じる者である私たちは、聖なる書に記されている神の預言者たちを通して、地球最後の年、つまり未来の歴史を知ることができます。この 7 部構成の研究の目的は、人類史の最終章について聖書が述べていることを説明することです。この目的は、私たちが黙示録的な時代の入り口に生きていること、そして間近に迫ったイエス・キリストの再臨と、それに先立つ厳しい試練の期間に備えることが、イエス・キリストを主であり師と呼ぶすべての人の責務であることから、重要な意味を持っています。

> すると、前に天から聞えてきた声が、またわたしに語って言った、「さあ行って、海と地との上に立っている御使の手に開かれている巻物を、受け取りなさい」。そこで、わたしはその御使のもとに行って、「その小さな巻物を下さい」と言った。すると、彼は言った、「取って、それを食べてしまいなさい。あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い」。わたしは御使の手からその小さな巻物を受け取って食べてしまった。すると、わたしの口には蜜のように甘かったが、それを食べたら、腹が苦くなった[許容しきれない]。(黙示録 10 章 8-10 節)

Ⅰ. 艱難期の定義と概要

この巻物は、この研究を進めていくにつれ、やがてわかるように、差し迫る時代の未来の歴史であり、使徒ヨハネの身に起こった体験に暗示されている警告は、私たちが心に刻み、しっかりと覚えておくべきことです。終末の出来事を研究することは楽しく有益なことですが、その出来事を個人的に生き抜くことになる人にとっては、その体験は非常に苦いものとなります。この点は、強調し過ぎることがありません。人類史の他の時代について読むとき、その経験は有益で楽しいものとなり得ますが、それはすべて起こってしまった事に関するものです。終わりの時に関する神の歴史も、ここで学ぶ私達にとっては、楽しくまた霊的にも有益なものですが、しかし、他の歴史とは異なり、特にその最後の日が近づくにつれ、私たちが研究していること、すなわち、地球がこれまでに経験したことのないような恐ろしい時代である大艱難を直接通過する可能性が見えてきます。そして、これらのことを心に留めているすべての分別あるクリスチャンにとって、これらのことが現実であること、痛みや苦難、恐ろしい黙示録的な出来事、窮乏、迫害、殉教は、時間の経過によって隔てられた過去の出来事ではなく、差し迫った未来の出来事であること、そしてそれは、苦い経験という厳しい現実の中で、私たちに降りかかってくる可能性があることを覚えておくことは非常に重要です。もしこれが私たちの運命であるなら、すべてが終わったとき、ヨハネが言われたことを、私たちが直接確かめることができるようになります。人類史の最終章は、学ぶには甘美ですが、生身の体を持つ者として経験するにはひどく苦いものとなるのです。

これに先行して出された 5 部作の「サタンの反乱　艱難期の序章」シリーズは、その名の通り、私たちが今回取り組む終末の時代についての研究の重要な前提条件となるものです。読者はすでにその中の情報を理解していることが前提であり、そうでなければ、ここで（そして次の 6 つのパートで）取り上げようとしている内容の多くが、辻褄の合わないものになってしまいます。というのも、艱難期が引き起こす出来事はすべては、人類の歴史の頂点と永遠の始まりを含めて、敵である悪魔に対処し、宇宙を完全に神聖な正しい状態に回復させ、被造物の反逆によって失われたものを、人の心の期待と想像も及ばないものに置き換えるという、神の壮大な御計画であるからです。しかし、サタンの反乱（第1部）、その結果として宇宙に対する神の裁き（第 2 部）、人間の腐敗と堕落、悪魔とその天使に対する神による驚くべき置き換え（第 3 部）、人の治める地球を奪って支配するためにサタンが導入した世界規模のシステム（第 4 部）、完全な裁き、回復、置き換えをもたらすために設けられた神の七千年の＜七日という＞計画−神によって考案され実施される歴史−（第 5 部）という幅広い背景を掴んでいないと、終末論（すなわち終わりの事柄に関する聖書研究）は、簡単に誤解されてしまうことでしょう。

1. 適用範囲と方法論

この7部構成のシリーズの目的は、人類史の最終章を聖書に記録されているとおりに説明することです。歴史の最終結末における重要な出来事であり、地球の未来の歴史における重要な分岐点は、神の視点から見るなら、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストが戻ってこられること(すなわち、主の再臨)です。イエス・キリスト**こそ**歴史の真の中心であり、その再臨の時点から、歴史の流れは神の直接的かつ明白な支配下に置かれ、神の御子自らが地を治め、歴史と共に死もついに永遠に飲み込まれることになります(イザヤ 25 章 7-8 節; 第一コリント 15 章 26 節, 15 章 54-55 節)。そして私たちの神は、新天新地の創造をもって永遠の始まりを告げるのです。このように、キリストの再臨は、キリストを信じ、待ち望む私たちが、子供の誕生を待ち望むように(第二ペテロ 3 章 11-12 節)、目を常に留めておくべき(テトス 2 章 13 節)「祝福された希望」(ヨハネ 16 章 21-24 節)、あるいは新しい日の夜明け(聖書では真の「世の光」の再来としてしばしば語られています: イザヤ 60 章 1 節; マラキ 4 章 2 節; ルカ 1 章 78 節; ローマ 13 章 11-14 節; 第一テサロニケ 5 章 1-10 節; 第二ペテロ 1 章 19-20 節; 第一ヨハネ 2 章 8 節 など)のようなものに例えられます。

そして、新しい子供の誕生には激しい痛みが伴うように、今の時代の終わりには、私たちの勝利の主が帰って来られ、私たちの悲しみを喜びに変えてくださいます(イザヤ 25 章 8 節; 黙

示録 7 章 16-17 節, 21 章 4 節 を参照)。

> 女が子を産む場合には、その時がきたというので、不安を感じる。しかし、子を産んでしまえば、もはやその**苦しみ**(ギリシャ語: スリプシス θλῖψις)をおぼえてはいない。ひとりの[新しい]人がこの世に生れた、という喜びがあるためである。(ヨハネ16章21節)

> これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世では**なやみ**(ギリシャ語: スリプシス θλῖψις)がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。(ヨハネ16章33節)

そして、最も深い夜の闇が夜明けの直前にあるように、今の時代の終わりには、勝利の主が帰って来られ、私たちの闇を光に変えられるのです(民数記 24 章 17 節; イザヤ 9 章 2 節, 60 章 1 節, 60 章 19 節; マタイ 2 章 2 節, 2 章 9-10 節; ヨハネ 1 章 4-5 節, 8 章 12 節; 第二ペテロ 1 章 19 節; 黙示録 2 章 28 節, 21 章 23 節, 22 章 16 節 を参照下さい)。

> 主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は**暗く**(ヘブル語:חשך、チョセクchoshekh)、月は血に変る。(ヨエル2章31節)

> 見よ、**暗き**（ヘブル語：חשך、チョセクchoshekh）は地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上にあらわれる。もろもろの国は、あなたの光に来、もろもろの王は、のぼるあなたの輝きに来る。（イザヤ 60章2-3節）

その真に新しくなられたお方、私たちの復活された主の再臨のすばらしさは、それに先立つ艱難期の苦しみとの対比で、いっそうすばらしいものに感じられることでしょう。また、御父の長子が、そのふさわしい御座に就かれる壮大で輝かしい日の直前に、世界は歴史の中で最も悲惨で激変した時期を経験するため、主の再臨の栄光の輝きは、それに先立つ夜の闇と対照的に、いっそう輝いて見えることでしょう。それは、聖書で通常よく「艱難期」（ギリシャ語：θ λῖψ ι ς, スリプシス thlipsis; 上記の最初の聖句を参照）と呼ばれる恐ろしい時代であり、また聖書で通常よく「暗闇」（ヘブル語：חשך, チョセク choshekh; 上記の二つの聖句を参照）と呼ばれるほど神の真理の光が失われる時代となるのです。艱難期は地球上で最も暗く、最も大きな試練の時であり、神の厳しい裁きで終わると聖書が告げている事に疑いの余地はありません。

> あなたがたはシオンでラッパを吹け。わが聖なる山で警報を吹きならせ。国の民はみな、ふるいわな

なけ。主の日が来るからである。それは近い。これは暗く、薄暗い日、雲の群がるまっくらな日である。多くの強い民が暗やみのようにもろもろの山をおおう。(ヨエル2章1-2節)

その日は怒りの日、なやみと苦しみの日、荒れ、また滅びる日、暗く、薄暗い日、雲と黒雲の日、(ゼパニヤ1章15節)

地に住む者よ、恐れと、落し穴と、わなとはあなたの上にある。恐れの声をのがれる者は落し穴に陥り、落し穴から出る者はわなに捕えられる。天の窓は開け、地の基が震い動くからである。地は全く砕け、地は裂け、地は激しく震い、地は酔いどれのようによろめき、仮小屋のようにゆり動く。そのとがはその上に重く、ついに倒れて再び起きあがることはない。(イザヤ24章17-20節)

艱難期として知られるこの辛い7年間は、キリストの千年王国支配の前段階であり、神が人類の歴史にやがて下される結論であり、その初期段階でもあるのです。私たちの周りの被造物と同じく(ローマ 8 章 19-22 節)、私たちは人の子が到来されて、この罪深い肉を脱ぎ捨て復活の完成に至ることになる人の子の到来と、そして永遠にこの方と共にいれるようになるのを待ち望んでいます。しかし、肉体のこの幸せな再生の前、主の輝か

しい夜明けの光の前には、大きな痛みと試練の時、深い暗黒の時が来なければならないのです。神に従うことを選んだ者にとっては常にそうであったように、個々の人生においても、現世の個人的な試練と苦難が、神よりの解放と慰めという最終的な勝利に先行します。そのように、人類の歴史の最終的な経過においても、新しい時代の誕生と人の子の夜明けの光の直前に、最も暗く恐ろしい悪魔の世界支配が、来たるその祝福された時に先行しなければならないのです。どちらの場合も（すなわち、個人的な苦難と歴史的な苦難の両方においても）、最後の祝福に到達する前に、厳しい試練に耐えなければならないということです。ですから、すべてのクリスチャンにとって、特に世界の歴史のこの終わりの迫る時に、キリストの再臨において全員が無事に港に到着できるように、来たる試練に備えることは最も重要なことなのです。そして、この世界史最後の暗黒の章について聖書が語っていることに、私たちが個人的に「その日」を迎えるか迎えないかにかかわらず、十分かつ細心の注意を払うことが必要です。大艱難期を個人的に経験するかどうかにかかわらず、クリスチャンとして個人的な艱難の経験を避けることはできないからです。[1]

---

[1] 個人的な苦難という重要な主題は、ペテロの手紙シリーズ（信仰者の苦難に焦点を当てたシリーズ）、特に第 25、26、27 課で取り上げられています。艱難期について正しく理解するためには、個人的な艱難について聖書が述べていることをよく知ることが必要です。

Ⅰ. 艱難期の定義と概要

このシリーズの本質的な目的である、来たる艱難期を理解し、それに備えるためには、多くの書物や聖句を詳細に検討する必要があります。聖書には、艱難期を筆頭とする「終わりの時」への言及とその広範な説明が、いたるところに見られます（理由は後述）。ですから、聖書が提供するこの広範な主題に関する重要な情報をすべて統合することは、神がこの潜在的で組織的な問題を解決する手段を用意してくださらなければ、容易に手に負えなくなり、不可能にさえなったことでしょう。この種の研究では、大背教、反キリスト、バビロン、主の再臨など、主要なテーマや出来事がトピック的に扱われることが多いですが、歴史は年代順に整理するのが一番良いというのが著者の考えです。私たちは黙示録という形で、まさにそのような年代順の艱難のアウトライン（その前後に起こる出来事とともに）を持っているので、この研究の主要なアウトラインとして黙示録を活用することが断然良いと思われます。[2]

したがって、このシリーズでは、黙示録を組織的な「青写真」として使用しますが（これは明らかに、終末を理解するための信者の中心的テキストであるため）、これから研究する出来事を扱っている他の聖書の部分を排除しないように努めます。このように「来たる艱難期」シリーズは、（教義的で特定な主題を扱い、

---

[2] この方法論は、この 7 回シリーズの全体概要からも読み取ることができます。

その過程で聖書の他の書物から資料を引き出すという）主題に焦点を当てるものであると同時に、聖書的な（黙示録の一節一節に従い、そこに含まれる主題を適切な場所と順序で扱い、必要なだけ枝葉末端的なものも取り上げ、全体を適切に完成するための聖句や時事を含む）ものとします。

2.定義と用語

艱難期とは、私たちの主イエス・キリストの再臨に先立つ、激変する七年間のことであり、それは教会時代の最後の七年間であり、[3] その名のとおり、不信仰な世界に対する神の裁きと、敵である悪魔とその地上の代表者である反キリストの手による信者の迫害という、激しい裁きと厳しい試練の期間となります。このように、艱難期を恐ろしい時代にしてしまう原因が重なっているのですが、一般的に誤解されています。確かに、艱難期は世界の歴史の中で悪魔の活動が最も激しくなる時ですが、神はその七年間の出来事に全く関与していないわけではありません。実際のところ、艱難期は何よりもまず、地球とその住民に対する神の裁きの最終段階の始まりなのです。六千年にわたる人類の歴史の中で、人類は神の側を選ばなかっただけでなく、

[3] それはまた、ユダヤの時代「ダニエルの 70 週」の終結でもあります。教会時代の年表の詳細については、悪魔の反乱シリーズの第 5 部「裁き、回復、置き換え」を参照してください。

ほとんどの場合、サタンの側を選んできました。そしてこの傾向は、艱難期に頂点に達するでしょう。一方、この流れに反して、この世とその支配者に反対して、神とその油注がれた方に従った人々の集まり（すなわち教会）は、艱難の間、地球の歴史の中で最も激しい迫害にさらされることになるのです。[4] これこそが、艱難のいくつもの出来事が神の報復である主な理由なのです。

> それから、水をつかさどる御使がこう言うのを、聞いた、「今いまし、昔いませる聖なる者よ。このように（七つの鉢を）お定めになったあなたは、正しいかたであります。［あなたの］聖徒と預言者との血を流した者たち［地の民］に、血をお飲ませになりましたが、それは**当然のことであります**」。（黙示録16章5-6節）

歴史において、人類は多くの場合、神を拒否し、悪魔に仕えることを選択してきました。この傾向は、現在ますます強まっており、艱難期には異常なピークに達することでしょう。出エジプト記でパロという人間の心を神が通常の状態を超えて頑なにな

---

[4] 教会の本質とその構成（すなわち、アダムからイエス・キリストの再臨までのすべての信者）を正しく理解することは、ここで教えられている概念を把握するために不可欠です。悪魔の反乱シリーズの第 5 部「裁き、回復、置き替え」を参照してください。

ることを許され、　特別なことが起こったように（出エジプト 11 章 9-10 節）、[5] 悪の制限に対する神の抑制は、教会時代の最後の七年の間に大幅に減少することになります(第二テサロニケ 2 章 2 節)。[6] これらのことを考える際、艱難期に対する恐れの多くは確かにサタンとその手先である不法の者(反キリスト)によって引き起こされますが、それらの出来事も、主が最初に許可さなければ起こり得ないものであるという事をよく覚えておくべきです。すべての歴史は主の御手の中にあり、結局のところ、(パロの場合のような：出エジプト記 9 章 16 節）被造物による行き過ぎた悪行も、それに対照する形で主の栄光を示すのに役立つだけだからです。サタンの地上支配の最終章に、神は悪の門を大きく開かれます。それは、創造主ではなく被造物に熱心に仕えることを選んだ地上の民が、その冒涜的な選択の結果を十分に受けるようになるためです（イザヤ 6 章 10 節; ヨハネ 12 章 40 節; 使徒行伝 28 章 26-27 節; ローマ 1 章 18-32 節):

彼らは神の真理を変えて（悪魔の）虚偽とし、創造

---

[5]この説明については、「出エジプト記 14 章：パロの心を頑なにされた神」を参照のこと。艱難時代の聖書のパラダイムとしての出エジプト記全般については、本シリーズの第 7 部で取り上げます。

[6] 黙示録 6 章における「封印」の解除。この点については、本シリーズの第二部 B、Ⅳ 項で扱われます。

> 者の代りに被造物（サタン）を拝み、これに仕えたのである。創造者こそ永遠にほむべきものである、アァメン。（ローマ1章25節）

結局のところ、神は被造物に対して、神に仕えるかどうかの選択を与えています。神の代わりにサタンに仕えることに固執する人々に対して神は最終的に、彼らがそうすることを阻止していた神の制約を完全に取り払われます。

> そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。（ローマ1章28節）

艱難期間は、悪を行うことに対するこれらの神の抑制がかつてないほど取り除かれ、人類は前例のないほど悪魔に仕え、前例のない神の裁きを自ら受けることになります。その結果、艱難期はまさに「最悪の時代」となり、歴史上最も悪質な人間の行為に対して、最も激しい神の裁きが下されるのです（エレミヤ 25 章 31-32 節; ミカ 7 章 13 節を参照）。

> 見よ、主はこの地をむなしくし、これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、その民を散らされる。そして、その民も祭司もひとしく、しもべも主人もひとしく、はしためも主婦もひとしく、買う者も売る者も

ひとしく、貸す者も借りる者もひとしく、債権者も債務者もひとしく、この事にあう。地は全くむなしくされ、全くかすめられる。主がこの言葉を告げられたからである。地は悲しみ、衰え、世はしおれ、衰え、天も地と共にしおれはてる。地はその住む民の下に汚された。**これは彼らが[神の][もろもろの]律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ。**それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住む者はその罪に苦しみ、また地の民は焼かれて、わずかの者が残される。(イザヤ24章1-6節)

さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで(つまり、艱難期が終わるまで)、しばらく隠れよ。見よ、主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやおおうことがない(つまり、信者への迫害が罰せられる)。(イザヤ26章20-21節　第二ペテロ3章10節後半参照のこと)

見よ、主の暴風がくる。憤りと、つむじ風が出て、悪人のこうべをうつ。主の怒りは、み心に思い定められたことをなし遂げられるまで退くことはない。末の日にあなたがたはそれを明らかに悟る。(エレミ

ヤ 23 章 19-20 節）（エレミヤ 30 章 23-24 節参照）

見よ、わたしは（神の）憤りの終りの時（すなわち、艱難期）に起るべきことを、あなたに知らせよう。（ダニエル8章19節前半）

［その期間中］この王（反キリスト）は、その心のままに事をおこない、すべての神を越えて、自分を高くし、自分を大いにし、神々の神たる者にむかって、驚くべき事を語り、憤りのやむ時まで栄えるでしょう。これは定められた事が成就するからです。（ダニエル11章36節）

今までに挙げた聖句と解説は、読者に艱難期の一般的な性格を理解させるのに十分です（下記の第Ⅲ項参照）。ここで、この期間を説明するために聖書で使われている最も一般的な用語を簡単に説明します。

a. 艱難期：「圧力をかける」という意味のスリブ thlib（θλιβ）を語源とするギリシャ語スリプシス thlipsis（θλῖψις）は、世俗のギリシャ語で、不快感、極度の困難、一般的にあらゆる種類の肉体的・精神的圧力を表す言葉としてよく使われています。聖書においても、この語は教会時代の最後の七年間を指す専門用語にとどまらず、しば

しば人の苦難をも指しています(ヨハネ 16 章 21 節, 16 章 33 節参照)。しかし、スリプシスは最後の激しい試練を表す最も一般的な言葉であり、その主な意味(極度の圧力)は、私たちが艱難期と呼ぶようになったその期間を最も適切に描写する言葉です。

> その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような**大きな患難**が起るからである。(マタイ24章21節)

> しかし、その時に起る**患難**の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。(マタイ24章29節)

> その日には、神が万物を造られた創造の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような**患難**が起るからである。(マルコ13章19節)

> その日には、この**患難**の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。(マルコ13章24,25節)

上記の四つの箇所において、主が来るべき黙示録のために

用いた言葉は、確かにギリシャ語のスリプシス（θ λῖψ ι ς）であり、さらにこれらの節の他の言い回しとともに、12 章 1 節のダニエルの予言を意図的に反響させています。というのも、ヘブル語旧約聖書のギリシャ語版（すなわち主の時代に広く使われていた七十人訳）でも、ヘブル語の「苦難の時」の訳にスリプシス（thlipsis）を用いているからです。

> **…国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時**［ヘブル語：’eth tsarah (עת רה); ギリシャ語：hemera thlipseos (ἡμέρα θλίψεως)］**が来る…**（ダニエル 12 章 1 節　新改訳Ⅳ）

もちろん、聖書において「艱難」が視野に入るとき、スリプシスという言葉が常に存在する必要はありません（例えば、黙示録 3 章 10 節）。しかし、「艱難」という言葉が明らかに描写的であること、そして、この将来の時期に関する最も重要な言及であり、主から直接与えられた上記の聖句に、まさにこの言葉が用いられていることから、教会時代の最後の七年間を表現する専門用語として伝統的に正しいと見なされてきた「艱難期」という言葉をこの研究においても選ぶことにしました。「艱難期」には、来たる黙示録の時代を表現するキーワードとして、もう一つの重要な利点があります。それは、主や師に従っているすべてのクリスチャンが現世で時々受ける個人的な苦難の圧力や不快感

を連想させるもので、[7] 来たる艱難期を生きるように召されたすべての人が耐えなければならない増し加わる圧力や不快感を表す的を得た表現であるということです（参照：マタイ 13 章 21 節; ローマ 5 章 3 節; 第二コリント 4 章 8 節, 4 章 17 節; コロサイ 1 章 24 節; 第一テサロニケ 3 章 3 節; 第二テサロニケ 1 章 6 節; ヘブル 11 章 37-38 節 参照）。

> [永遠の]**命にいたる門は狭く**（＝神への道はキリストを通して一つしかなく）、**その道は**（＝キリストの道は苦難に満ちている）**細い**（「苦難」とも訳せる θ λ ί β ω）。**そして、それを見いだす者が少ない。**（マタイ7章14節）

> [彼らは]**弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し、「わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならない」と語った。**（使徒行伝14章22節）

> **わたしたちの兄弟で、キリストの福音における神の同労者テモテをつかわした。それは、あなたがたの信仰を強め、このような患難の中にあって、動揺する者がひとりもないように励ますためであった。**

---

[7] ペテロの手紙シリーズを参照のこと。

> あなたがたの[よく]知っているとおり、わたしたちは患難に会うように（すなわち、この人生の苦悩を耐え忍ぶように）定められているのである。そして、あなたがたの所にいたとき、わたしたち[すべてのクリスチャン]がやがて**患難**に会うことをあらかじめ言っておいたが、あなたがたの知っているように、今そのとおりになったのである。（第一テサロニケ3章2-4節）

艱難期を学ぶことによって、すべてのクリスチャンがこの世で耐えなければならない個人的な苦難を見通すことができるようになります。そして、神様の御計画において私たちの個人的な苦難がどういう役割を占めているのかを理解し、その苦難を通して霊的に成長することによって（ローマ 5 章 3-4 節）、私たちは、その大いなる試練の日に備えることもしているのです。

b. 大艱難期: これに関してよく使われることになる区別は、艱難期全体（終末の七年間全体）と大艱難期（この期間の後半、つまり主イエス・キリストの再臨までの最後の三年半）です。大艱難期は人類史上最大の圧力と迫害の時代であり、背教が迫害に変わるのは、艱難期の後半＜すなわちこの大艱難期＞です。

> わたしは彼に答えた、「わたしの主よ、それはあなたがご存じです」。すると、彼はわたしに言った、「彼

らは**大きな患難**をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。（黙示録7章14節）

その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような**大きな患難**が起るからである。（マタイ24章21節）

c. 黙示録: 黙示録＜英語ではアポカリプスApocalypse＞は、ギリシャ語で「啓示」を意味するアポカリプシスapokalypsis（ἀπ ο κάλ υ φ ι ς）の音訳であることから、「アポカリプス」と呼ばれることがあります（下記V項 黙示録1章1節参照）。本書のタイトルは「イエス・キリストの啓示（現れ）」であり、名詞が単数形であることに留意するのがよいでしょう。キリストはただお一人であり、再臨の際に世にあらわされるのもただお一人です（注釈：「revelation***s***＜複数形＞」といった書物は存在しません。）＜英語では複数の「revelation***s***」ではなく、単数の「revelation」であり、ギリシャ語のアポカリプスは、書物のことを指しているのではなく、イエスの現れ（再臨）のことを指しているのだと説明しています＞。ギリシャ語の「アポカリプス」は、文字通り、それまで見えなかったものが明らかにされることを意味します。ですから、私たちの主が栄光のうちに地上に戻ってくるのは、艱難の終わりの時です。このシリーズのガイド・ブックである黙示録には、艱難期全体が含まれており、預言的には、艱難

期は、主が戻ってこられること、幕が開かれること、主の「現れ（顕現）」（それに伴う裁き）の重要な前段階であることが非常に明らかです。ですから、黙示録を終末の時代と同義語として理解するのは良いのですが、その意味において最も重要な要素である「黙示録」という言葉の理解から、主イエス・キリストの再臨の栄光が、その日には、花嫁である教会と共に全世界に明らかにされるということを除外しないように注意しなければなりません。そして、キリストが再臨の時に完全に世界に現される時（ルカ17章30節; 第一コリント1章7節; 第二テサロニケ1章7節; 第一ペテロ1章7節, 1章13節, 4章13節; 黙示録1章1節）、私たち、キリストの花嫁は主と共に現されます（ローマ8章19節: 以下も参照: ローマ16章25-26節; ガラテヤ3章23節; エペソ3章5-6節 ）。したがって、黙示録の艱難は導入部（イントロ）に過ぎないのです。その最も深い意味では、それは私たちが切望する希望そのものなのです。

> こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの**現れる**(原文では「アポカリプシス」)のを待ち望んでいる。主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない者にして下さるであろう。(第一コリント1章7,8節)

> …悩まされている(原文では「艱難＜スリプシス＞を受けている」)あなたがたには、わたしたちと共に、休息をもって報いて下さるのが、神にとって正しいことだからである。それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から**現れる**(原文では「アポカリプシス」)時に実現する。(第二テサロニケ1章7節)

> こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れる(原語では「アポカリプシス」)とき、さんびと栄光とほまれとに変るであろう。(第一ペテロ1章7節)

> イエス・キリストの黙示(原語では「アポカリプシス」)。この黙示は、神が、すぐにも起るべきことをその僕たちに示すためキリストに与え、そして、キリストが、御使をつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである。(黙示録1章1節)

d. ヤコブの悩みの時: エレミヤ 30 章 7 節にあるこの言葉は、文脈が示すように、明らかに艱難のことを指しています。それは、他とは異なる時(7 節)、解放(8 節)、メシヤの支配(9 節)、民族の再集結(10 節)が続く時なのです。

e. ダニエルの第 70 週目: ダニエルに与えられた 70 の七つの年(週)の幻の最後の「七＜一週＞」は、実は艱難期です(ダニエル 9 章 20-27 節)。例えば、最後の七年の真ん中に、反キリスト(「来るべき君」26 節; マタイ 24 章 15 節; マルコ 13 章 14 節参照)によって神殿の中に「荒らす憎むべきもの」が立ちます[8]。

f. 苦難の海: ゼカリヤ 10 章は、この言葉を使って、イスラエルが紅海でパロから解放されたように、艱難期を経て解放されること、またそれに先立つ艱難期における背教について述べています(2 節)。また艱難時代のイスラエルの不従順な指導者層(3 節)、ハルマゲドンにおける主の再臨前のユダヤ人の抵抗(4-7 節)、再臨後のイスラエルの再集結について述べており、これらのことから、この言葉が艱難期を意味することが明らかです。

> 彼らは(8-9 節で再集合されるイスラエル)、**苦難の海**(すなわち、艱難期)**を渡る。**(ゼカリヤ 10 章 11 節前半)

g. 試練の時: ヒラデルヒヤ教会の世代は、その忠実な奉仕の

---

[8] ダニエル書の概要については、以下のセクション Ⅳ.2.a を参照してください。患難に関するダニエルの預言の詳細については、本シリーズの第 3 部 A、3 部 B、第 4 部で詳しく取り上げています。

ゆえに、艱難期を通過することはありませんでした。[9]

> 忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている**試錬の時**に、あなたを防ぎ守ろう。(黙示録3章10節)

h. その他の箇所 ： 聖書には、特定の用語を使わずに艱難期に言及している箇所が他にもたくさんあります。例えば、創世記49章18節では、ヤコブがイスラエルの将来について預言して、ダンを蛇に例えて、「主よ、あなたの救いを待ち望みます」と言っていますが、これは艱難と反キリストが、ダン族から出ることについて預言的に語っているものです。[10] このような文章や文脈は、神の歴史の計画の終結を(その終結は、見てきたように、まず艱難から始まる)予見しているという一般的に共通した特徴を持っています。

> しかし、彼[天使]はわたしに言った、「人の子よ、悟りなさい。この幻は**終りの時**にかかわるものです」...

---

[9] 黙示録の7つの教会(2-3章)については、このシリーズのパート第2部Aで取り上げています。

[10] 詳しくは本シリーズのパート3Bを参照してください。

言った、「見よ、わたしは[**神の**]**憤りの終りの時**(すなわち艱難期)に起るべきことを、あなたに知らせよう。それは**定められた終りの時**にかかわるものであるから。(ダニエル8章17節後半、8章19節)

終りの日に(あるいは、「最後の時代に」)次のことが起る。主の家の山は、[他の]もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべて国はこれに流れてき、(イザヤ2章2節；エゼキエル38章16節も参照ください)

『神がこう仰せになる。**終りの時には…**(ヨエル2章28-32節の引用を紹介)(使徒行伝2章17節)

しかし、御霊は明らかに告げて言う。**後の時に**なると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう。(第一テモテ4章1節)

しかし、このことは知っておかねばならない。**終りの時には**、苦難の時代が来る。(第二テモテ3章1節)

金銀はさびている。そして、そのさびの毒は、あな

たがたの罪を責め、あなたがたの肉を火のように食いつくすであろう。あなたがたは、**終りの時にいる**のに、なお宝をたくわえている。(ヤコブ5章3節)

(3)まず次のことを知るべきである。終りの時にあざける者たちが、[真理を]あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、(4)「主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない」と言うであろう。(5)すなわち、彼らはこのことを認めようとはしない。古い昔に天が存在し、地は神の言によって、水がもとになり[その中から]、また、水によって(すなわち「水の上に」)[再び]成ったのであるが、(6)その時の世界は、御言により[上と下からの]水でおおわれて(すなわち、水の下になって)(すなわち、ノアの時代に)[再び]滅んでしまった。(7)しかし、今の天と地とは、同じ(神の)御言によって保存され、不信仰な人々がさばかれ、滅ぼさるべき日に火で焼かれる時まで、そのまま保たれているのである。(第二ペテロ3章3ー-7節)

愛する者たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの使徒たちが予告した言葉を思い出しなさい。彼らはあなたがたにこう言った、「**終りの時に**、あざける

> 者たちがあらわれて、自分の不信心な欲のままに生活するであろう」。(ユダ1章17節18節)

3. 終末の時代と動機

今までのリストで明らかなように、聖書は頻繁に終わりの時の到来に言及しながら、信者の警戒心を駆り立て、神を第一に考える動機を与え、今ここにあるものから、より重要な未来の現実に焦点を合わさせようとしているのです。艱難期の現実とそれを経験する可能性を受け入れ、信じ、完全に自分のものとすれば(すなわち、正しく適用すれば)、霊的に成長するために神が与えてくださる資源を今最大限に活用し、他の人々も同じように成長できるよう、より動機づけられずにはいられなくなります(エペソ5章16節; コロサイ4章5節を参照)。そのような成長こそ、来たる恐ろしい日々に備える唯一の真の手段です。地下室に缶詰を備蓄することの多くのことが的外れになっても、神の御言葉を心に備蓄することは、艱難期を直接経験するよう求められているかどうかに関わらず、最大限の価値を持つものなのです。

> 兄弟たちよ。わたしの言うことを聞いてほしい。**時は縮まっている**(字義的には、帆が「巻き上げられて短くされるように」時間も縮められている)。今からは妻のある者はないもののように、泣く者は泣かないも

ののように、喜ぶ者は喜ばないもののように、買う者は持たないもののように、世と交渉のある者は、それに深入りしないようにすべきである。なぜなら、この世の有様は過ぎ去るからである。わたしはあなたがたが、思い煩わないようにしていてほしい。（第一コリント7章29-32節前半）

また、（出エジプト世代の）ある者たちがしたように、わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺された。また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、**世の終りに臨んでいるわたしたち**に対する訓戒のためである。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。あなたがたの会った試錬で、世の常[の経験]でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試錬に会わせることはないばかりか、試錬と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。（第一コリント10章9-13節）

あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。**主は近い。**（ピリピ4章5節）

しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだから、**その日（主の日）が**、盗人のように**あなたがたを不意に襲う**ことはないであろう。あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない。だから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう。（第一テサロニケ5章4-6節）

愛と善行とを励むように互に努め、ある人たちがいつもしているように、集会をやめることはしないで互に励まし、**かの［主の］日が近づいている**のを見て、ますます、そうしようではないか。（ヘブル10章24-25節）

あなたがたも、**主の来臨が近づいている**から、（7節の農夫のように）耐え忍びなさい。心を強くしていなさい。（ヤコブ5章8節）

万物の終りが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい。（第一ペテロ4章7節）

子供たちよ。今は**終りの時**である。あなたがたが

> かねて反キリストが来ると聞いていたように、今や多くの反キリストが現れてきた。それによって今が**終りの時**であることを知る。（第一ヨハネ2章18節）

> またわたしに言った、「この書の預言の言葉を封じてはならない。**時が近づいている**からである。（黙示録22章10節）

次に進む前に、注意しておくことがあります。この重要で正当な聖書の動機づけしてくれる要素が、残念ながら、現代の多くのキリスト教界では、艱難期前携挙という誤った教義によって、ひどく妨げられていることです。[11] もし、（その間違った教義が主張しているように）現代のクリスチャンが艱難を経験する可能性がないとしたら、聖書に書かれている膨大な資料は直ちに単なる「机上の空論」に過ぎないものになり、非常に多くの動機づけとなる資料が、ほとんど抽象的なものになってしまいます（したがって、現実的にはほとんど意味がないものになります）。

実際、信仰の最も深刻な試練が実際に訪れる可能性があるという知識から得られる動機は、艱難期を経験するかどうかにかかわらず、私たちが直面しなければならない試練に対する備えに役立ちます。ですから、艱難期前携挙の教えは、いつの日

---

[11] このテーマについては、ペテロ・シリーズ#27 で広く取り上げています。

か艱難期の中に身を置くことになる信者にとって危険なものであるだけでなく、試練やテストに備えるために聖書が提供する、重要で正当な動機を多くの人から奪っている(そして、奪ってきた)のです。

間違わないでください。私たちの主イエス・キリストは再臨まで戻りません。この聖書の明確な教えから導かれる正しい結論は、信者はその祝福された出来事に先立つ七年間の艱難について、聖書が語っていることを本当に真剣に受け止める必要があるということです(マタイ 25 章 1～30 節; ルカ 21 章 25～28 節; 第一コリント 1 章 7 節, 15 章 20～28 節; ピリピ 1 章 6 節; 第一テサロニケ 4 章 5～18 節, 5 章 1～11 節; 第二テサロニケ 1 章 3～12 節; テトス 2 章 13 節; 第二ペテロ 1 章 19 節)。

> さて兄弟たちよ。[1章3-12節で話した]わたしたちの主イエス・キリストの来臨と、わたしたちがみもとに集められることとについて(第一コリント15章51-54節参照)、あなたがたにお願いすることがある。[耳よりの「新しい情報」として]霊により、あるいは[霊感を受けた]言葉により、あるいはわたしたちから出たという[これらのことについての]手紙によって、主の日はすでにきたとふれまわる者があっても、[自分が真実であると知っていたことについて疑って]すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。だれがどんな事をしても、それにだまされてはならない。**[再臨の前には]**まず[艱難期の前半に信者達の

大いなる]背教のことが起り、不法の者[アンチキリスト]、すなわち、(滅ぼすことがその性格で、滅びをもたらし、また滅びが運命づけられている)滅びの子が現れるにちがいない[艱難期に起こる出来事の一つ]。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。わたしがまだあなたがたの所にいた時、これらの事をくり返して言ったのを思い出さないのか。(第二テサロニケ2章1～5節)

Ⅱ．艱難期の全体的の背景：サタンの反乱と神の御計画

神は常に存在し、今後も常に存在し続けます。神ご自身が完全で無限であり、いかなる変化や発展も必要としないので、（すべてが神の創造物であり、そこに住む被造物である）一時的で物質的な宇宙においてのみ、「神の計画」を議論する必要があるのです。天使の住む宇宙が最初に創造されたときも同様に（有限ではあったものの）完璧な状態でした。神はもともと、エデンの園のような環境に、何一つ欠けることのない完璧なシステムを創造されたのです。しかし、サタンの謀反によって、それが一変してしまいました。宇宙の最高位である天使とその仲間の三分の一が反逆したことによって、被造物の歴史が始まったのですが、その歴史は最初から神の計画によって形造られ、導かれてきたのです。

もちろん、悪魔の裏切り行為は、全知全能で無限なる神にとって「驚き」ではありませんでした。神は、アダムとエバの堕落と同じように、悪魔の反逆に驚かれませんでした。当初（宇宙と天使の創造）とその後（宇宙と人類の再創造）の宇宙の構造には、常にこの神の全体的な計画が組み込まれており、起きる物事を形作り、導き、指示しているのです。これは無限の知恵、無限の力、無限の知識を持つ神だけが計画できることです。その計画は細部にわたって、確かで変わることのないものなので、天使と人間の歴史のすべての出来事は、神によって予知され、

予言されてきました(ローマ 8 章 29-30 節参照)。[12] そしてこの計画の中心、土台、礎石、その仲介者は、常に私たちの主イエス・キリストなのです(ヨハネ 1 章 1-5 節; ヘブル 1 章 1-3 節)。

> 万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子（イエス・キリスト）によって造られ、御子のために造られたのである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。(コロサイ 1 章 16-17 節)

この「神の計画」という主題は、他の場所でも詳しく取り上げられ（前注）、サタンの反乱への具体的な対応という点では、最近（前シリーズの第五部で）詳細にわたって扱われましたが、ここで重要なのは、私たちの現在の主題である艱難期とそれに続く出来事は、世界レベルでのその御計画の**終結**を表しているということです。ですから、艱難期は、神が定めた歴史全体のスケジュールの中で小さな出来事ではなく、人類史全体における神の地上への裁きの主要な時期を示す、極めて重要な展開

---

[12] 神のご計画についてのより詳細な議論は、ペテロの手紙シリーズの＃3、＃8、＃9、＃13、悪魔の反逆シリーズの第五部の第 II 項、特に聖書の基本 4B「救いの神学：Soteriology」を参照してください

なのです。

＜今私たちが遭遇しようとしている第二段階の裁きと＞同様に、悪魔の反乱に続く元の天地に対して下された神の裁き＜第一段階＞も、現存の天地が焼却される最後の裁き＜第三段階＞も、大きく重要な裁きです（この三つは、それぞれ神の計画の裁きの段階である第二部、第一部、第三部を構成しています）。[13]

しかし、（創世記のギャップ＜創世記1章2節＞を生み出し、その後の七日間の地球の再創造を必要とした）[14]裁きの第一段階は、私たち人類は誰も体験することはありませんでした。また承知のとおり、裁きの最終段階（第三段階）は、歴史の終結まで起こらないので、艱難期は人類の集合的経験において突出した裁きの出来事としてさらに大きな意味を持ちます（比較対象となるのは世界規模の洪水だけです：マタイ 24 章 37-38 節）。過去にも現在にも、人間が神の怒りがこれほどまでに大きくなるのを目撃することはありません。神と悪魔の間の選択の問題が、人類にとってこれほど明白にされることは、過去にもそれ以後にもないでしょう。

それにもかかわらず、人類がこれほどまでにサタンを信奉す

---

[13] これらは、前回のシリーズ「サタンの反乱」のパート 5 に詳述されています：艱難時代の背景、「裁き、回復、置き換え」。

[14]「サタンの反乱」第二部艱難の背景、「創世記のギャップ」を参照してください。

ることは、過去にもそれ以後にもないことでしょう。唯一の真の神に忠誠を誓う人々が、これほど激しい圧力と迫害にさらされることは、過去にもそれ以後にもないことでしょう。また、悪魔が地球上の出来事を、これほど直接的に支配するようになることは、過去にもそれ以後にもないことです。艱難期は、神が人間と悪魔に与えられた最大の自由をもって自分の意思を行使する時代であり、まさにこの理由から、人類がこれまでに経験したことのない恐ろしい時代となります。

艱難期は、地球、不信仰な人類、そして堕天使たちをも含む被造物に対する神の最大の裁きの期間となるのも、まさにこのためです。悪は自由を利用して悪を強化するだけであり、極悪は常に、必然的に神の厳しい（完全な正義の神にふさわしい）裁きによって応えられるからです。艱難期は、人類が（名目上）、悪魔が（実質上）、人類史の方向性に対して大きな役割を持つ最後の時代なのです（もちろん、創造の瞬間から最終目標に向かって厳然と前進してきた神の包括的計画の支配下のもとにあってのことです）。[15]

堕落した被造物が自発的に悪を行えるという、これまでで最も大きな裁量権を認めながら、神はこの七年の間に前例のない裁きという形で、悪に対する最も衝撃的な対応を艱難期に定められたのは、何と適切なことでしょう！ そして、この人類の歴史の

---

[15] （歴史の終結の直前に起こる）「ゴグ・マゴグの反乱」は、唯一の重要な例外です（黙示録 20 章 7-10 節）。

最も恐ろしい時期は、まさに被造物によって支配されるために非常に恐ろしいのですが、人類の歴史の最も素晴らしく崇高な時期、つまり私たちの主イエス・キリストの千年王国がそのすぐ後に続くのは、何と適切なことでしょう。ここでは、神が神-人となって、アダムの堕落以来（悪魔とその手下が一千年の間安全に収監されて黙示録 20 章 1-3 節）かつてなかった、人々に対する直接的な統治をされることになるのです!

一方では、神の抑制が緩むにつれてますます悪化し（そして神の正義による必然的な裁きを自らに招くことになる）被造物の支配による不可避な退廃があり、他方では、御子を通しての神の支配の恩恵的性質、すなわち人間の悪の性質が適切に抑制され、あらゆる方向から祝福が流れ込む完全な正義の支配があるという並置される二つの実例から、私たちは沢山のことを学ぶことになります。

これは、被造物の歴史の夜明けから繰り返されてきた（「私たちの」道と神の道との）対比の原理であり、千年王国が終わってまもなく歴史が閉じるまで、何らかの形で継続されることになります。人（または天使）が自分の意志に従うと、恐ろしいことが起こり、神の裁きが必然的に発動されるので、終わりは初めより悪くなります。しかし、神の御心によって、結果は祝福となり、裁きにおいて（破損したものは）回復され（失なわれたものは）置き換えられるので、終わりは初めより良くなるのです。

> 打ち場は穀物で満ち、石がめは新しい酒と油とであふれる。わたしがあなたがたに送った大軍、すなわち群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食った年をわたしはあなたがたに償う。(ヨエル 2 章 24-25 節)[16]

この＜被造物の＞意志対＜神の御＞意志の結果のサイクルは、それが一人の個人、家族、集団、国、文明、あるいは歴史全体の中で起こったとしても本質的に同じであり、どのような場合でも、(自己)意志対(神の)御意志の選択における分岐点は、イエス・キリストへの従順なのです。なぜなら、イエス・キリストは、真理であり(ヨハネ 14 章 6 節)、すべての被造物の長子であり相続人であり(コロサイ 1 章 15-21 節; ヘブル 1 章 2-3 節; 黙示録 3 章 14 節)、すべてのものがこの方のために、この方によって、この方を通して存在し、初めから父の御計画を主導してこられた方、まもなく栄光に輝いて地上に戻って正当な支配を始められる方、その身代わりの死なくしては私たちの救いも回復もなかった方であるからです。イエス・キリストを拒否することは神の御意志を拒否することであり、逆に神の御意志を選択することはイエス・キリストに従うことです。

---

[16] この聖句の適用はカーメン・ハーディン博士 Dr.Carmen Hardin に負うところが大きいです。ゼカリヤ 9 章 12 節と比較してください。

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。（ヨハネ 14 章 6 節）

地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、（あつれきの）つるぎを投げ込むためにきたのである。わたしがきたのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。そして家の者が、その人の敵となるであろう。（ミカ7章6節） わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。（マタイ10章34-39節）

Ⅲ. 艱難期の一般的特徴

人は神に似せて造られ(創世記 1 章 26-27 節)、神の栄光のために造られました(イザヤ 43 章 7 節)。[17] したがって、人間の存在のあらゆる側面が、神に対する私たちの態度、あるいは私たちのするどんな選択においても、本当に神のために選んでいるのかあるいは神に反して選んでいるかを中心にして、動いていると見ることは奇妙なことではありません(特に信者の場合はそうです:第一コリント 6 章 19-20 節; ガラテヤ 5 章 17 節)。レハベアム王が「主を求めることに心を傾けないで、悪を行った」(歴代誌下 12 章 14 節)ように、主に応じないすべてのことは必然的に悪に応じることにつながります(あるいは悪に応じることと同じことです)。私たちの人生における唯一の真の選択は、神のしもべとなるか、悪魔の手先となるかを選ぶことです。このことは、大小すべての物事に当てはまります。だからこそ、人類の(選択の積み重ねである)歴史は、決して何もない中で起こっているのではなく、サタンの反乱の状況に対抗して繰り広げられているのです。この原則は、これまでのどの時代よりも、艱難期に顕著に現れるでしょう。というのは、肯定的な動機によ

---

[17] 「サタンの反乱」第三部:人間の目的、創造、堕落の第 1 項(人間の目的)と第 2 項 1(神の像と似姿)を参照してください。

って選択するということが、（イエス・キリストの直接の義の支配下の）千年王国ほど明らかとはならないように、否定的な動機によって、人間の自由意志を持っていることの結果が、（世界が反キリストというサタンの最も直接的な支配下に置かれる）艱難期ほど明確にはならないだろうからです。七部からなるこのシリーズで、これから起こる、その大きな試練の期間の出来事と試練について多くを語ることになりますが、ここで強調しておきたいのは、艱難期の一般的な特徴は、偶然でもどこか片隅で起こる小さな事でもなく、むしろその七年間に、一方では神と御子、他方では悪魔とその代理人のどちらを選択するのかという問題が激化することの直接的結果であるということです。歴史の中で、「あなたはどっちに付くのか？」という質問の結果が、これほど顕著で即座に現れる時代は他にないでしょう。艱難期は、まさに人類が善と悪の両極端の選択を迫られ、これまで当然とされてきたプライバシーの保護や熟考の余裕もない、大きな試練のときとなるのです。法律やナショナリズムを通じて、神が目に見えない形で悪を抑制することで可能になっていた、静かな不可知論（およびそれに相当するもの）の中間領域が、非常に大きな度合いで取り除かれるからです。[18] このため、読者の皆さん、私たちのテーマは差し迫った重要性を持っているのです。来たる大災難に耐えることが私たちに課せられた使命であるな

---

[18]「サタンの反乱」第四部「サタンの世界システム」のⅡ項 7「悪魔の影響を抑制するものとしての法とナショナリズム」を参照してください。

らば、私たちの信仰はかつてないほど試されることになることでしょう。なぜなら、艱難期の間悪魔は、世界がまだ経験したことのないほど、自分の意志に従わせようとして全人類に圧力をかけてくるからです。

> それゆえに、天とその中に住む者たちよ、大いに喜べ。しかし、地と海よ、おまえたちはわざわいである。悪魔が、自分の時が短い[時間しか残っていない]のを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」。（黙示録12章12節）

悪魔が地上とその住民を直接支配すればするほど、神と御子を拒絶させようとする圧力が大きくなります。そして、地上で悪が行われれば行われるほど、その悪に対する神の裁きは大きくなります。前代未聞の激しさという点で、他に類を見ないこの艱難期の本質的な二つの特徴（悪魔の支配と神の報復）から、この激変の時期に関連する他のほとんどの特徴が生まれました。この二つの特徴が生み出す分裂（キリストか反キリストかの選択の必要性）と共に、その結果、艱難期は信者が経験したことのない最も厳しい試練の時代となります。それは私たちの信仰の大きな厳しい試練となります。

> …しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」。（ルカ18章8節後半）

艱難期は、その名前からして前代未聞の苦難であり、人類を「テストにかける」(黙示録 3 章 10 節) 大きな「テストの時」となるのです。それは、1)銀とあくたを分ける大きな溶鉱炉、2)麦と籾殻を分ける大きな脱穀場、3)耐えるために最大限の忍耐を要する長い「暗夜」です(イザヤ 21 章 11-12 節; アモス 5 章 18-20 節; ヨハネ 11 章 9-10 節)。

> 多くの者は、自分を清め、自分を白くし、[るつぼの中で溶かされて]かつ練られるでしょう。しかし、悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者[これらの事柄に]＜注意を払う者-英文訳＞は悟るでしょう。(ダニエル12章10節)

> また、箕を手に持って、**打ち場**の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう」。(ルカ3章17節)

> わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならない。**夜が来る**。すると、だれも働けなくなる。(ヨハネ9章4節)

信仰者である私たちは、何があっても信仰を保つというこの課題にこそ、最も注意深く視線を向け続けなければなりません。

なぜなら、全世界的な戦争、飢饉、疫病、世界的な災害、そして地球の不信仰な住民に対する途方もない天罰の中で、信仰を維持すること（希望をしっかりと持ち、愛のうちに歩むこと：ガラテヤ 5 章 5-6 節; コロサイ 1 章 4-5 節も参照）は、艱難期と呼ばれる最も集中的に練り清められる過程において、すべての信者の中心的な課題となることでしょう。これから起こるすべての困難の中で、主は忠実な者に忠実であり続けられるからです．．．

大背教が起こっても(第二テサロニケ 2 章 3 節; 第一テモテ 4 章 1 節; マタイ 24 章 9-14 節)：

> こうして、彼ら（出エジプト世代）が（安息の）＜場所に＞はいることのできなかったのは、不信仰のゆえであることがわかる。それだから、神の安息にはいるべき［神の］約束が、まだ存続しているにかかわらず、万一にも、はいりそこなう者が、あなたがたの中から出ることがないように、注意しようではないか。というのは、彼らと同じく、わたしたちにも福音が伝えられているのである。しかし、その聞いた御言は、彼らには無益であった。それが、聞いた者たちに、信仰によって結びつけられなかったからである。ところが、わたしたち〔信仰を捨てる者ではなく〕信じている者は、安息にはいることができる。それは、「わたしが怒って、彼らをわたしの安息に、はいらせること

> はしないと、誓ったように」と言われているとおりである。…(ヘブル3章19節-4章3節前半)

厳しい経済的混乱の最中でも(黙示録 6 章 6 節)：

> きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。(マタイ6章30節)

戦乱、疫病、大災害になっても(イザヤ 13 章 12 節; エゼキエル 38 章 1 節～, 39 章 1 節～; ダニエル 7 章 1 節～, 9 章 1 節～, 11 章 1 節～; 黙示録 6 章 2-8 節, 13 章 1 節～)：

> あなたは夜の恐ろしい物をも、昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。
>
> また暗やみに歩きまわる疫病をも、真昼に荒す滅びをも恐れることはない。
>
> たとい千人はあなたのかたわらに倒れ、万人はあなたの右に倒れても、その災はあなたに近づくことはない。(詩篇91篇5-7節)

地上の状況を一変させるような極端な神の裁きにあっても(黙示録 6 章 12 節～, 9 章 1 節～, 16 章 1 節～)：

> あなたはこう彼[バルク]に言いなさい、主はこう言われる、見よ、わたしは自分で建てたものをこわし、自分で植えたものを抜いている[19]——それは、この全地である。あなたは自分のために大いなる事（すなわち、周りが呪いを受けている時代にそれとはかけ離れた祝福）を求めるのか、これを求めてはならない。見よ、わたしはすべての人に災を下そうとしている。しかしあなたの命はあなたの行くすべての所で、ぶんどり物としてあなたに与えると主は言われる」。（エレミヤ45章4-5節）

世界的な一枚岩の異教徒の敵対にあっても（黙示録 13 章）：

> 愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試錬を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、[本当に]キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである。キリスト

---

[19] あるいはイスラエルの「地」。ヘブライ語の「アレツ」（ארץ）がどちらの意味にも取れるのは偶然ではなく、この預言は、イスラエルに関わる多くの預言と同様に、より広い意味にも適用されるからです。以下の Ⅳ.1 節「解釈上の問題」を参照してください。

の名のためにそしられるなら、あなたがたはさいわいである。その時には、栄光の霊、神の霊が、あなたがたに宿るからである。あなたがたのうち、だれも、人殺し、盗人、悪を行う者、あるいは、他人に干渉する者として苦しみに会うことのないようにしなさい。しかし、[誰でも]クリスチャンとして(すなわち、「キリストにある者」として)苦しみを受けるのであれば、恥じることはない。かえって、この名によって神をあがめなさい。さばきが神の家から始められる時がきた。それが、わたしたちからまず始められるとしたら、神の福音に従わない人々の行く末は、どんなであろうか。また義人でさえ、かろうじて救われる[と言われている]のだとすれば、不信なる者や罪人は、どうなるであろうか。だから、神の御旨に従って苦しみを受ける人々は、善をおこない、そして、真実であられる創造者に、自分のたましいをゆだねるがよい。(第一ペテロ4章12-19節)

キリストを信じる真の信者が広く殉教しても(黙示録 6 章 9-11節):

あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあうであろう。死に至るまで忠実

> であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。（黙示録2章10節）

以上のような艱難期の一般的な特徴から、この激動の七年間は、神と悪魔の大いなる最後の対決であり、信者はその渦中にあると考えたくなります。しかし、このような見方は、現在多くある見解を改善したものではあるものの、主を全く登場させないもので、二つの重要な点で間違っています。

1）主とサタンを同じレベルに置くのは誤りです。実際、サタンが「最後の攻撃」をすることができるのは、神がそれを許されるからです（第二テサロニケ 2 章 6-8 節; 黙示録 5 章 1-5 節）。さらに、（上記 I で見たように）神の完全な勝利の問題は疑う余地は少しもなく、艱難期の全過程はただ神の正しい目的のためにあります。

2）信者を単なる「犠牲者」として描いていますが、実際には、この人類史上最も困難な時代の中で、神の義と誠実さを示すために、私たちは重要な役割を担っているのです。艱難期前半に広がる背教に直面して、つまずかない者は忠実な残りの者たち（レムナント）を構成し、その三年半の期間の奇跡的な伝道の基点となるのです。艱難期の後半、つまり大艱難期において、世界的な迫害の中で、死に至るまで信仰を貫く者は、サタンの普遍的な嘘を覆す神の真理と憐れみの前例のない証人となる

のです。

しかし、先に述べたように、天における戦争とそれに伴う悪魔とその天使達の地上への追放（黙示録 12 章 7-9 節）により、人類が神の側につくか、あるいは神に逆らうかの選択をするように、これまでなかったほどの集中的かつ直接的な圧力を人類が受けることは確かです。そして、神の側につくことを選ぶことは、人類史上、特に大艱難期の迫害の中で、より重い代償を世界全体に強いることになるでしょう。艱難期の前半の神の憐れみ深い世界規模の伝道と、後半の不信仰な地上の住民（偶像崇拝と信者への迫害）への裁きは、この問題をさらに明確にし、艱難期は善と悪の中間がほとんどない時代となるのです。他のどの時代よりも、この時代はすべての人が、イエス・キリストの熱心な信者か反キリストの熱心な党派のどちらかになる可能性が高く、艱難期の特徴である激しい圧力（一方では悪魔の活動、他方では神の正しい対応）は、この両極を説明するのに大いに役立ちます。信者として、このような情報を心に留め、生ぬるな状態に陥らずに、（将来、中間地帯が大きく崩れ去るような圧力の下で冷たくなってしまうことのないように）今、信仰を奮起させることをあらかじめ決意すべきです。（最終的にはどの人生でもそうですが、多くの場合、熟考する時間がありますが）艱難期には、人類は神の道を歩むか悪魔の道を歩むかの即座の選択を迫られます。艱難期の最中に「二つの意見の間で立ち止まっている」ことは、自分の信仰に害をもたらすだけです（列王記上 18 章 21 節; 参照：黙示録 3 章 15-16 節）。

「サタンの反乱」の最後の部分（第五部）で見たように、エデンの園からアダムが追放されて以来、人類史の四つの時代すべてにおいて、信者の数が比例的に拡大し、異邦人の時代には細々と始まったものが、イエス・キリストの千年王国には満ちあふれる状態になるというのが神の御計画の傾向なのです。[20] 似たような関連した形で、この自己意志対神の御意志の問題（イエス・キリストの人物に焦点を当てたもの）の知識も明らかに高まり、この事実はモーセの律法の影からイエス・キリストの人物の現れの現実への移行において最も明確に見られます（コロサイ 2 章 17 節; ヘブル 8 章 5 節, 10 章 1 節）。この傾向は、キリストが栄光のうちに世に現れることから始まる千年王国において一時的に頂点に達し、キリストの御顔を通して神が人類史上かつてないほどしっかりと、明らかに知られるようになる至福の千年間をもたらします（イザヤ 2 章 1-5 節; 使徒行伝 1 章 11 節; 第一コリント 13 章 12 節; 黙示録 1 章 7 節）。

> 彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである。（イザヤ11章9節）

---

[20] 「サタンの反乱」シリーズ第 5 部「裁き、回復、置き換え」の II.8.c 項「ユダヤ教の儀式暦」（特に図表 3 とその考察）を参照してください。

> しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。人はもはや、おのおのその隣とその兄弟に教えて、『あなたは主を知りなさい』とは言わない。それは、彼らが小より大に至るまで皆、わたしを知るようになるからであると主は言われる。わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」。（エレミヤ31章33-34節）

この＜今の＞千年期のピーク＜主の来臨と主の統治の始まり＞の直前には、キリストにある神の真理が、「二人の証人」、14万 4 千人の働き、そして直接的な神の告知によって、以前のどの千年期の時期よりも広く、はっきりと提示される一方で、人類の歴史的経験においてかつてないほど激しく、事実上反対される期間となります（例えば、黙示録 13 章 5-17 節）。教会時代は、すでにこの二重の傾向の始まりを見ています。一方では、世界が徐々に「小さく」なるにつれて、キリストと悪魔の＜どちらをとるかという＞選択に対して人間は無頓着でいることができなくなってきており、一方では、福音のメッセージがより広く伝えられるようになり、以前の主の恵みの時代から大きな変化をもたらしています。

> 言った、「皆さん、なぜこんな事をするのか。わたしたちとても、あなたがたと同じような人間である。そして、あなたがたがこのような愚にもつかぬものを捨てて、天と地と海と、その中のすべてのものをお造りになった生ける神に立ち帰るようにと、**福音を説いている**ものである。神は過ぎ去った時代には、**すべての国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれた**が、それでも、ご自分のことをあかししないでおられたわけではない。すなわち、あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっているのである」。(使徒行伝14章15-17節)

一方、この二千年の間に、悪魔憑きや偶像崇拝そのものではなくても、道徳的、政治的、社会的、さらにはこの世(コスモス)の現在の支配者が築いた「世界システム」のあらゆる側面で、次の「バベルの塔」のための土台作りが着実に行われていることは事実です。[21] そのシステムは、単に現在の世界支配のための静的な装置ではなく、反キリストを通しての悪魔の究極の攻撃、事実上の世界支配のための悪魔の組織的基盤でもあるの

---

[21] 「サタンの反乱」シリーズ第 4 部「サタンの世界システム」を参照。

です。つまり、その日のために、悪魔が全力を尽くして具体的な準備を進めている基盤なのです。これが、艱難期に本格的に展開される最終的な策略を目指す、加速する「不法の秘密」（現代ではあからさまになってきました）なのです。

> そして、あなたがたが知っているとおり、彼[アンチ・キリスト]が自分に定められた時になってから現れるように、いま彼を阻止しているものがある。不法（アノミア *anomia*）の秘密の力が、すでに働いているのである。ただそれは、いま[も、将来も物事を抑制する]阻止している者が取り除かれる時までのことである。その時になると、不法の者（*アノモス anomos*）が現れる。（第二テサロニケ 2 章 6-8 節前半）

＜口語訳「阻止しているもの」κ α τ έ χ ω（カテチョー）：新改訳「引き止めているもの」，新共同訳「抑えているもの」，フランシスコ訳「引き留めている者」，ABP訳「constraining しっかりと持つ/抑えつける」，ESV訳「restraining 押さえる/抑制する＞

上記の文脈で「不法状態」をアンチキリストの現れることと結びつけ、ほぼ同じ同義語を使って両者を表現することにより（アンチキリストは「不法の者」- anomos-ἄ ν o μ o ς、不法状態は anomia-ἀ ν o μ ί α ）、この不法状態が不法の者（すなわちア

ンチキリスト）の到来に先立つ準備であることを明確に示しているのです。その準備（悪魔があらゆるレベル、あらゆる場所で人間社会に徐々に侵入すること）は「すでに働いている」のですが、艱難期が始まって御霊の抑制が弱まるまでは完全に完了することはできません（サタンの真意と究極の無力さを示す神の計画の一部です）。[22] 私たちは、使徒ヨハネの「反キリストの霊」についてのコメントにも同じような意味を見い出すことができます（第一ヨハネ 4 章 3 節）。さらに、現代に多くの「反キリスト」が活動していることは、私たちが艱難の入り口にいることの証拠でもあります。

> 子供たちよ。今は終りの時である。あなたがたがかねて反キリストが来ると聞いていたように、今や多くの反キリストが現れてきた。それによって今が終りの時であることを知る。（第一ヨハネ2章18節）

したがって、教会時代において、悪魔は最終的かつ最高の攻勢をかけることを抑制されていますが、（黙示録の封印が解かれ、神の抑制が取り除かれて：黙示録 5 章 1-5 節; 第二テサロニケ 2 章 6-8 節）その機会が与えられた際には、すぐに自分の計画を迅速に実行しようと完全な準備態勢にあります。神の

---

[22] 「サタンの反乱」シリーズ第 4 部「サタンの世界システム」の II.7 節「悪魔の影響を抑制するものとしての法とナショナリズム」を参照してください。

抑制がなくなること、それなしにはサタンの艱難期の活動は不可能であることは、このシリーズの次のパートで詳しく説明します。この事実（すなわち、神の許可なしに艱難期は起こらない）だけで、艱難期は「偶然」起こるというようなものではなく、逆に神の時代の構築における不可欠な期間であり、その間に悪魔の邪悪さと真の意図が完全に露呈される（ローマ 7 章 13 節参照）ことが証明されている、ということだけで今は十分でしょう。一方、神は御子の栄光の支配に備えて被造物を従わせることによって、この上ない栄光を受けることになります（詩篇 110 篇 1 節; ヘブル 10 章 13 節; 出エジプト 14 章 4 節; イザヤ 63 章 12-14 節参照）。ここで言いたいのは、この抑制が解かれる（この特別な機会を悪魔が利用する）ことが、艱難期に起こる前代未聞のとんでもない出来事を説明することになるということです。人類の歴史の中で、神が人間（あるいは天使）の行動に対して設定した「規制を破る」ことは、防止手段としての神の裁きを予測させることになりました（詩篇 2 篇 3 節; エレミヤ 5 章 5 節を参照）。これは、神の抑制の究極的な境界を踏み越えた犯罪者が天使であっても（創世記 6 章で人間の女性と同棲していた悪魔の投獄を参照）[23]、人間であっても当てはまります（神に逆らったセナケリブとその軍隊に下された迅速かつ完全な滅びも参照：イザヤ 36 章-37 章）。上記の例は、神の真理に背き、神

---

[23] サタンの反乱シリーズ第 5 部「裁き、回復、置き換え」の III.1 節「人間の純血対する洪水前のサタンの攻撃（ネフィリム）」を参照してください。

が課した明確な制限を踏み越えた者すべてに公正な裁きが下されるという一般原則の極端な実例です。

> 神の怒りは、不義をもって（神についての）真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。（ローマ1章18節）

しかし、艱難期には、それまで抑えられていた不法が前代未聞の高さに達するでしょう。すでに機能していた「不法の秘密」が、艱難期には最大限になるよう運命づけられているのです。出エジプト記に記されているパロの経験は、このような過程を理解するのに助けとなる類似点を提供してくれます。パロが神の奇跡的な力を目の当たりにしながらも「心を固くして」神に対して横暴に反対するためには、人間の通常の限界を神が緩和する必要がありました。[24] しかし、パロの頑なな抵抗の結果として、尋常ではない迫害がもたらされ、尋常ではない裁きが続き、奇跡的な解放がもたらされたので、神の栄光が大きく表されることになりました（出エジプト 14 章 4 節；イザヤ 63 章 12～14 節）。

> しかし、わたしがあなた[パロ]をながらえさせたのは、あなたにわたしの力を見させるため、そして、わたしの名が全地に宣べ伝えられるためにほかならな

[24]「出エジプト記 14 章：パロの心を堅くする」シリーズを見てください。

い。(出エジプト9章16節)

(パロに対する抑制が取り除けられた個々の場合と、艱難期において全般的に抑制が取り除けられることの間にある)この類似性は、偶然のものではありません： 出エジプトの歴史全体は、(このシリーズの第 7 部で見るように)艱難期の体験に重要な教えのパラダイム(実例)、あるいは類似モデルを提供しているのです。艱難期には、強烈な盲目的心の硬化が蔓延し、人類の大多数がかつてないほど悪魔に仕えるようになります。この傾向の危険性を大いに加速させるのは、法律とナショナリズムの防波堤もかつてないほど侵食され、神を選択することに関心がなく、通常の状況下では悪に加担しようとしない人々の中立という安全地帯がほとんどなくなってしまうことです。これらの要因(神の抑制が取り除けられ、「不法の秘密」の成就、サタンの最終攻撃の遂行、それに対する神の裁き)を総合すると、艱難期の七年間は、まさに「腹には苦い」(黙示録 10 章 9-10 節;エゼキエル 2 章 8 節-3 章 3 節参照)恐ろしい体験となることでしょう。

艱難期は未信者にとっては恐怖の時代かもしれませんが、信者には、正確に言うならテストの時です。このように艱難期の最も本質的な特徴(上記で説明したことの本質)を考えると、信者が艱難期について考えるとき(勿論、その準備も)、その焦点は恐れではなく、神の最終的な解放に対する信仰と確信に満ちた希望であることは、この時点で明らかでしょう。聖書が提供

する艱難期の出来事に関する情報は、クリスチャンを恐怖に陥れて、何もしないようにさせるためのものではありません。むしろ、その目的は、クリスチャンが前もって霊的に最大限の準備をし、また、これらの出来事に耐えるよう求められたときに、これらの出来事を正しい信仰の観点で考えられるようにするために、公正な警告を与えることです。

艱難期は、サタンが人類に対する真の悪意をかつてないほどはっきりと示し（黙示録 12 章 12 節; 13 章 5-10 節）、神は正しい応答として、地上の悪を正しく裁いて栄光を被（こうむら）せられます（イザヤ 24 章 1-23 節; ミカ 7 章 13 節 ）。このような大渦巻きの中で、人間が中立でいることは容易ではありません。「あなたはどちら側ですか」という問いは、今もよく聞かれますが、答えられずにおかれがちです。しかし、艱難期においては、全人類が答えを出し、その答えに従うことを余儀なくされることでしょう。

> またわたしに言った、「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」。（黙示録22章10-11節）

イエス・キリストに忠実な者は、地下牢や火や剣に遭っても、勝利が約束され、来るべき王国で栄光を得ることになります。

> その日、人は言う、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しもう」と。（イザヤ25章9節）

Ⅳ. 艱難期の歴史に関する聖書の情報源

聖書の他のどのテーマよりも、終末論（すなわち「最後のこと」）、特に艱難期の研究には、方法と出典に関するいくつかのあらかじめ必要な作業があります。後者の出典については、旧約聖書でも新約聖書でも、聖書全体にこれほど広く分布している主題はないため、そうする必要があります。また、前者の問題（方法）についても、預言（特に旧約聖書の預言）がどのように構成されているかを理解しなければ、そこから教理的な情報を正しく引き出すことはできません。さらに、後者（つまり、どのように資料を集めるか）を理解することは、前者に対する私たちのアプローチ（つまり、どこで資料を集めるか）を説明することにもつながるのです。そこで、艱難期に関する重要な情報が載っている書物を概観する前に、まず、聖書の預言のプロセス、方法、手法の基本を考える必要があります（預言とは、結局のところ、将来の出来事について神から与えられた情報です）。

1. 解釈学的な課題

聖書の預言は、特に旧約聖書の預言に見られるように、しばしば理解するのが難しい（困難でさえある）と言えるでしょう。なぜなら、旧約聖書の預言の多くは、その内容を聞こうとしない人々に向けられていたからです。したがって、イエスが、奇跡は喜んで受け入れるがメッセージは受け入れない、という聴衆に

たとえ話をされたように、神はイザヤ、エレミヤ、エゼキエル、小預言者たちに対する不承諾者に、「両耳を鳴らす」預言を与えましたが、その意味は最初から明白であるとは限りませんでした。つまり、反抗的な民衆への警告というユニークな機能を持つ預言であるがゆえに、そのあからさまな意味を理解するためには、解釈を必要とすることが多く、メッセージに興味を示さなければ、それにアクセスすることはできません。したがって、預言の分析は、外国語の翻訳に例えるのが妥当でしょう。預言は外国語と同じように、理解されるためには、まず適切に「翻訳」（解釈）されなければならないからです。外国語の文章を効果的に「解読」するためには、その言語に関する経験が必要であり、理想的には、正式な訓練が必要です。言葉の通じない外国を訪れた人なら、辞書や言語補助ソフトが必要であることは容易に想像がつくでしょう。そのような場合、基本的な文法やフレーズ、重要な語彙をいくつか知っているだけでも、旅行をより楽しいものにすることができます。聖書の予言もそうです。残念ながら、正しい解釈のためのルールが明示され、説明されることはあまりありません。ですから、ここで予言の解釈の重要な部分を少し紹介することは、これから紹介する苦難に関する聖書の資料調査の準備に大いに役立ちます。これらの問題は一般的には取り上げられることがなく、「終わりの時」を主題とする研究に期待されるよりも、面倒で、面白みに欠けると思われる方もおられることを筆者は痛感しています。しかし、これらの原則を理解することは、私たちの研究を適切に発展させていくために不

可欠な基礎となる証拠であり、基礎的なものでさえあります。したがって、これらの重要な問題を検討する間、読者の忍耐が必要とされます。

a. 預言の短縮遠近法

遠くから広大な山脈を眺めるとき、遠距離から見た事象が視点を変えることで大きく変化することがよくあります。近づいてみると、それまで一様な稜線に見えていたものが、より深く、より多様で、より区別されたものであることが明らかになります。横に移動すると、よりはっきりとした立体像が浮かび上がってきます。上から見れば、山や谷、あるいは峰の一つ一つの集まりが浮かび上がってきます。これは決して、最初の認識が誤っていたわけではなく、ある特定の視点でのみ、その視点が有効であり、他の視点と組み合わせて、この山塊が「どのようなものか」を「＜感覚的に＞捉える」ために不可欠であることを意味しているのです。

預言で起こる同様の現象は、しばしば「預言の短縮法」と呼ばれます。旧約聖書における予言の短縮の典型的で有名な例は、メシアのケースに見られます。メシアは栄光の王としてだけでなく、苦難のしもべとして来られるように定められていました（イザヤ 52 章 13 節-53 章 12 節参照）。預言者たちでさえ、「キリストの苦しみとそれに続く栄光を預言するとき、彼らの中にい

るキリストの霊が意味する正確な時を発見することに熱心でした」(すなわち、再臨と千年王国:第一ペテロ 1 章 10-11 節;ルカ 10 章 24 節;ヨハネ 8 章 56 節参照)。[25] 当時はまだ完全に理解されていなかったこの素晴らしい預言的資料をすべて昔の預言者たちが作成したのは、「自分のためというより、あなたがたのため」(すなわち、初降臨後の、現代の信徒: 第一ペテロ 1 章 12 節) であったのです。今日、キリスト教信仰を始めたばかりの人たちでさえ、一般的にキリストの初降臨と再降臨の違いをよく知っています。この違いはイエスの初降臨(千年王国支配の開始を含まなかった)によって示され、新約聖書の書簡(再降臨が説明、予期されている)の中で詳細に説明されているのですから、私たちは今ではキリスト論の「＜神学＞用語を話」しています。(旧約の視点からは、一つの大きな預言の「山」としてしか見分けがつかず)いわば横一線の視点だったのに対して、キリストの受難が歴史的現実となり、パウロ、ペテロ、ヨハネによって完全に視野に入れられ、二つの降臨のそれぞれの特性が明確に表現されています。しかし、過去の預言者や信者は、これらの個別の出来事を預言のみを通してはるかに見るだけで、実際の出来事を見ることはなかったため、二つの「山」は見分けがつかないほど近くに重なっているように見えたので

[25] 旧約聖書における三位一体の教義の場合にも、同じような予言的短縮が起こります。聖書の基本教理概説第 1 部、「神学:神の研究」の II 項 C を参照してください

す。実際、イエスの時代には、メシアが全人類のために苦難を受ける必要性が全く見い出せず、イエスの同時代の人々は、硬直した不信仰の中で、再臨の栄光だけを受け入れ、それが初臨の屈辱と犠牲に基づいていなければならないことを理解できなかったのです。

このような預言の短縮表現は、終末論（終末に関する予言）の分野全体にも多く見られます。例えば、イザヤ書第六十六章は次のように終わっています：

> 「わたしが造ろうとする新しい天と、新しい地がわたしの前にながくとどまるように、あなたの子孫と、あなたの名はながくとどまる」と主は言われる。「新月ごとに、安息日ごとに、すべての人はわが前に来て礼拝する」と主は言われる。「彼らは出て、わたしにそむいた人々のしかばねを見る。そのうじは死なず、その火は消えることがない。彼らはすべての人に忌みきらわれる」。（イザヤ66章22-44節）

この箇所は、新約聖書の新しい天と地に関する記述（第二ペテロ3章13節; 黙示録21章1節）からも、断罪された不信仰者の記述（マルコ9章48節 参照）からもはっきりと分かるように、永遠の状態（人類の歴史の終結後）の記述に違いなく、新しく建てあげられるキリストの千年王国での出来事に関する記述がすぐ

後に続いています（イザヤ66章18-21節）。新約聖書の終末論的な教えの枠組みによって、これらの箇所は未来の出来事の図式に正確に当てはめることができます。しかし、旧約聖書の観点から見ると、メシアの千年統治の始まりと終わりを示す部分は、区別がつかないまでも、初降臨と再降臨の類似した描写が一緒に重なっています（例えば、イザヤ9章6節前半「**ひとりのみどりごがわれわれのために生れた**」と9章6節後半-7節「**ダビデの位に座して、その国を治め**」を比べると、キリストの誕生と帰還は区別がつかないほど一つにつながっています）。このようなことは、預言の中で非常によく見られる表現であることを念頭に置いておく必要があります。

なぜ、このような（少なくとも混乱させる可能性のある）技法が使われたのか、という疑問は禁じ得ません。これに対して、新約聖書が提供する情報のおかげで、旧約聖書の預言的資料が（正しく預言を見分けられることによって）私たちの手に届くようになったことを、まず指摘しておくべきでしょう。ですから、私たちがこの終末の時代に関する預言的情報の短縮表現を扱う際は、預言者たちがキリストの初臨、再臨の預言の詳細を扱った状況と類似しています。彼らが、「**それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがた**＜私たち＞**のための奉仕**」（第一ペテロ1章12節）であって、「**つぶさに**」「**それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べた**」のです（第一ペテロ1章10-11節； ルカ10章24節とヨハネ8章6節も参

照してください)：当時はこの情報の混在がどれほど謎であったとしても、現在私たちは新約聖書の啓示(特に黙示録)の助けによって、将来の出来事の詳しい歴史を描き出すことができる立場にあるのです。

第二に、預言書に書かれているすべての情報は、書かれた当時から現在に至るまで(そして歴史が続く限り)、常に有用で重要なものでした。これらの預言が常に与えてきた恩恵の多くは、一方では、最終的に世界に対する神の支配が再び確立されることについての知識から得られる**励まし**であり、他方では、それに先立つ途方もない神の裁きをよく考えることから得られる有益な**警告**にあります。これらは、キリストの到来以前に、終末論的な出来事の時系列を完全に理解していなくても、また、現在私たちが識別できる具体的な区別がなくても、預言書を読むことによって得られる利益です。さらに、終末論をしっかり理解していなくても、すべてのキリスト教徒が今日も預言を読むことによって得られる恩恵があります。預言書に描かれている終末の出来事をざっと考えてみるだけでも、**神が**世界を**裁かれる**日が来るのだから、私たちは今どのような信仰者であるべきか(第二ペテロ 3 章 11-12 節)、考えてみる価値があるのではないでしょうか？　そして、**神が**世界を**支配する**日が来るのですから、私たちは今、神に正しく仕えるように励むべきではないでしょうか(第二ペテロ 3 章 13-14 節)。

最後に、(冒頭で示唆したとおり)このような預言には、意図的に構築された謎めいた要素もあります。神は、未来を示す聖句を、あらゆる点で容易に開かれた書物とすることを選ばれませんでした。神の言葉の真理の多くがそうであるように、それらは勤勉な研究と蓄積された神学によってのみアクセス可能なものです。このような状況は、真に神を知りたいと願う人々と、その関心が単に刹那的なものである人々とを区別するのに役立ちます(cf. マタイ 13 章 20-21 節, 13 章 34-35 節; マルコ 4 章 16-17 節, 4 章 33-34 節; ルカ 8 章 13 節)。このためイエスは、やがて十字架につけろと叫ぶ熱狂的な群衆にはたとえ話をし(マタイ 13 章 10-17 節、エゼキエル 33 章 30-32 節、ホセア 12 章 10 節参照)、イエスに従う私たちには「豚に真珠を投げる」ことがないように注意するよう助言されました(マタイ 7 章 6 節)。聖書の真理ほど高価な真珠はありません。たとえ、私たちがここで行っているように、預言の言葉に奮闘して取り組むとしても、神の真理を熱心に求めることは大いに価値があります。そうしないなら、イザヤの聴衆が彼の言うことにあまり興味を示さなかったのと同じような苦境に、私たちも立たされることになるでしょう:

> 主は言われた、「あなたは行って、この民にこう言いなさい、『あなたがたはくりかえし聞くがよい、しかし悟ってはならない。あなたがたはくりかえし見るがよい、しかしわかってはならない』と。(イザヤ6

章9節)

b.「主の日」パラダイム

旧約聖書の預言的重なりの中で最も一般的なものは、初降臨と再降臨の短縮＜表現＞法を除けば、いまだに成就されていない多くの終末論(終末に関する預言的情報)を「主の日」(あるいはそれに相当する表現、下記参照)の名のもとに一つにまとめたものです。このように、終末の時代の大部分を一つの統一された名称にまとめることは、解釈上の困難を伴いますが、非常に理にかなった根拠があります。「主の日」とは、主の栄光と勝利に満ちた御子の再臨による艱難期の終結に始まり、永遠の始まりに終わる、神ご自身が人類の歴史を直接支配することを公然と主張する期間であり、最初は裁き(艱難期の終結)、次に回復(千年間を通して)、最後に現世をはるかに優れたものに置き換える(永遠の国の始まり)というものです。艱難期の終わり(すなわち、再臨とハルマゲドンの合図とそれを取り巻く出来事)から始まって、この時代は、(今の時とは違って)歴史の出来事に対する神の明らかな働きが否定できない時代になるでしょう(神の歴史の支配は、疑いなく完結的で初めから定められていますが、信仰の目を通して見なければなりません:第二コリント 4 章 18 節, 5 章 7 節; ヘブル 11 章 1 節 を参照してください)。このような理由から、将来来たるその時は、それ以前の歴史的などの千年期のどの日よりも、さらに明確に主の

「日」と言うにふさわしい時となるのです。

前回のシリーズの最終回では、千年王国に関する聖書の教え、特に神によって全人類の歴史が、七つの個別の千年期間（詩篇 90 篇 4 節; 第二ペテロ 3 章 8 節）[26] というパターンにはめられることにたくさんの時間を費やしました。「主の日」は基本的に、人類の歴史の安息日である第七の千年期の日、つまりキリストの支配する千年間と隣合わせており、キリストの再臨とそれに伴う裁きで始まり、父の永遠の王国に直接移行する、最後の裁きの周期で終わります（第一コリント 15 章 24 節；黙示録 21 章 1 節）。「主の日」は、厳密にはハルマゲドンとそれが近づいていることを示す出来事から始まります。しかし、艱難期のすべての神の裁きは、この差し迫った「裁きの日」を警告するものであることから、この預言の言葉＜主の日＞は、しばしば艱難期に実際に起こる出来事も含んでいるのです。

> あなたがたは泣き叫べ。**主の日**が近づき、滅びが全能者から来るからだ。それゆえ、すべての手は弱り、すべての人の心は溶け去る。彼らは恐れおののき、苦しみと悩みに捕えられ、子を産まんとする女のようにもだえ苦しみ、互に驚き、顔を見あわせ、その

---

[26] 「サタンの反乱」シリーズ第 5 部「審判、回復、置き換え」の II 項 7「人類史の七日間」を参照してください。

> 顔は炎のようになる。見よ、**主の日**が来る。残忍で、憤りと激しい怒りとをもってこの地を荒し、その中から罪びとを断ち滅ぼすために来る。天の星とその星座とはその光を放たず、太陽は出ても暗く、月はその光を輝かさない。わたしはその悪のために世を罰し、その不義のために悪い者を罰し、高ぶる者の誇をとどめ、あらぶる者の高慢を低くする。わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも少なくする。それゆえ、万軍の主の憤りにより、その**激しい怒りの日**に、天は震い、地は揺り動いて、その所をはなれる。(イザヤ13章6-13節)

上記のような世界人口の減少は、艱難期を通しての傾向ですが(ゼパニヤ 1 章 2-3 節; ミカ 7 章 13 節参照)、ハルマゲドンの裁きで頂点に達します。これらの審判とメシアの栄光の再臨が「主の日」という言葉の強調点ですが、この「日」が千年王国全体に及ぶことは、次のことからわかります。

> しかし、今の天と地とは、同じ御言によって保存され、不信仰な人々がさばかれ、滅ぼさるべき日に火で焼かれる時まで、そのまま保たれているのである。愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のよう(つまり、「一日」は千年の長さに及ぶ)であ

> る。ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである。しかし、**主の日**は盗人のように襲って来る。**その日には、天は大音響をたてて消え去り**、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。このように、これらはみなくずれ落ちていくものであるから、**神の日**の到来を熱心に待ち望んでいるあなたがたは、極力、きよく信心深い行いをしていなければならない（クリスチャンはこの箇所をよく考えるべきです）。**その日**には、天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう。しかし、わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる。（第二ペテロ3章7-13節）（黙示録21章11節-22章3節参照）

「主の日」は再臨で始まり、上の聖句が示すように、「神の日の到来」、すなわち、すべての反逆者が滅ぼされ、神のすべての敵が永遠に裁かれる人類史の終結時に、永遠の国、父の王国が始まることで終わります。「主の日」とは、神の敵が服従する期間であり、そのプロセスは艱難の裁きとハルマゲドンに始まり、千年期の終わりまで続く（たとえば、ゴグマゴグの反乱の鎮

圧（黙示録 20 章 7-10 節）、最後の審判（黙示録 20 章 11-15 節）も含まれます。

> ただ、各自はそれぞれの[復活の]順序に従わねばならない。最初はキリスト(すなわち、復活の最初の人と一隊)、次に、主の来臨に際してキリストに属する者たち[すべての信者]、それから[人類史の]終末となって[千年期間の信者の復活]、その時に、キリストはすべての君たち、**すべての権威と権力とを打ち滅ぼし**て、国を父なる神に渡されるのである。なぜなら、キリストは**あらゆる敵をその足もとに置く**時までは、支配を続けることになっているからである。（第一コリント15章23-25節）（詩篇110篇1節参照）

旧約聖書におけるこの「日」の名称は、重要な出来事の一部も含めて、次のようなものがあります。

1.「主の日」:この言葉はしばしば裁きを意味し、キリストの再臨に際して神の敵に下される報復を意味します（エゼキエル 13 章 5 節, 30 章 3 節; ヨエル 1 章 15 節, 2 章 1 節, 2 章 11 節, 2 章 28-32 節, 3 章 14 節; アモス 5 章 18-20 節; オバデヤ 1 章 15 節; ゼパニヤ 1 章 7-13 節; ゼカリヤ 14 章 1-21 節; マラキ 4 章 1-5 節）:

> **主の**大いなる**日**は近い、近づいて、すみやかに来る。**主の日**の声は耳にいたい。そこに、勇士もいたく叫ぶ。その日は怒りの日、なやみと苦しみの日、荒れ、また滅びる日、暗く、薄暗い日、雲と黒雲の日、ラッパとときの声の日、堅固な町と高いやぐらを攻める日である。わたしは人々になやみを下して、盲人のように歩かせる。彼らが主に対して罪を犯したからである。彼らの血はちりのように流され、彼らの肉は糞土のように捨てられる。彼らの銀も金も、**主の怒りの日**には彼らを救うことができない。全地は主のねたみの火にのまれる。主は地に住む人々をたちまち滅ぼし尽される。(ゼパニヤ1章14-18節)

2.「報復の日」: この言葉は、上記の一般的な裁きと、抑圧された民のための神の個人的な報復を関連づけます。(イザヤ 61 章 2 節, 63 章 4 節; エレミヤ 46 章 10 節):

> 主は**あだをかえす日**をもち、シオンの訴えのために報いられる年をもたれるからである。(イザヤ34章8節)

ここで言われている「年」は、神の敵、神の民の敵に対する報復の時期であり、「主の日」と同義、共義です(イザヤ 61 章 2 節, 63 章 4 節参照)。そのため、「怒りの日」(イザヤ 13 章 13 節; エ

ゼキエル 7 章 19 節; ゼパニヤ 1 章 18 節)、「清算の日」(イザヤ 10 章 3 節)とも呼ばれています。この日の神の報復というテーマは、「日」という言葉が特に使われていない預言書にもしばしば見られることに注意すべきです(例えば、申命記 32 章 40-43 節; イザヤ 34 章 1-7 節, 35 章 4 節, 59 章 17-18 節, 63 章 5-6 節; エゼキエル 25 章 12-17 節; ヨエル 3 章 4-16 節; 第二テサロニケ 1 章 5-10 節 を参照のこと)。

3. 「その日」:「主の日」という預言的な題名はとても一般的です(執筆された当時も一般的に理解されていました)から、「その日」という単純な表現でしばしば言及されます。(イザヤ 10 章 20,21 節, 3 章 7 節, 3 章 18 節, 4 章 1-2 節, 5 章 30 節, 7 章 18 節, 10 章 20 節, 10 章 27 節, 17 章 4 節, 17 章 7 節, 17 章 9 節, 24 章 21 節, 25 章 9 節, 26 章 1 節, 27 章 1-2 節, 27 章 13 節, 31 章 7 節; エレミヤ 46 章 10 節; ハガイ 2 章 23 節) 。

> **その日**、人々は拝むためにみずから造ったしろがねの偶像と、こがねの偶像とを、もぐらもちと、こうもりに投げ与え、岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、主が立って地を脅かされるとき、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける。(イザヤ2章20-21節) (黙示録6章15-16節も参照ください)

新約聖書の用法も同様で、より完全な預言的情報の啓示を受

けたという点でのみ区別されます。新約聖書の用法は、私たちがこれまで「主の日」について述べてきたことを完全に裏付けています。新約聖書におけるこの「日」の名称には、次のようなものがあります。

1.「主の日」: パウロは裁きに焦点をあて、付け加えて(第一コリント 5 章 5 節: 使徒行伝 2 章 20 節も参照)、第一テサロニケ人への手紙で、教会の復活のタイミングを説明するためにこの言葉<「主の日」>を使い、亡くなった信者の復活の後に生きている信者の集結が、「主の日」にあることを説明します(第一テサロニケ 4 章 13 節-5 章 3 節)。第二テサロニケ人への手紙では、パウロが「主の日」を使っていることから、旧約聖書で指摘した「再臨に焦点を当てる」という意味の核心は、この用語の理解とも一致していることがはっきりとわかります。つまり、「主の日」は艱難期の前半の大背教と後半の反キリストの支配の後に来るのです(第二テサロニケ 2 章 1-4 節)。第二ペテロの 3 章 10 節でのこの用語の使用は、「主の日」の包括的な性質を最も明確に示しており、キリストの再臨から千年王国支配の終結による宇宙の滅亡まで明らかに広がっています(この第一部の冒頭に注釈をつけて解説しました)。

2.「大いなる日」: 黙示録は「主の日」を二度「大いなる日」と呼び、さらに「怒りの日」(黙示録 6 章 17 節)と「全能の神の日」(黙示録 16 章 14 節)として特徴づけています。

3. 「キリストの日」:新約聖書でメシアが私たちの主イエス・キリストであることが明確にされているので、パウロはしばしばこの将来の時代の日を「キリストの日」というタイトルで言及しています。

> 主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、**わたしたちの主イエス・キリストの日**に、責められるところのない者にして下さるであろう。(第一コリント1章8節) (第一コリント3章13節も参照)

4. その他の用語: 旧約聖書のように、このテーマが身近なものであるため、「主の日」(再臨前の裁き、キリストの再臨、千年王国支配、人類史の終わりを含む)という考え方は、特定の専門用語を使わなくても理解できることが多いのです。ここでは、「主の日」の同義語である他の用語をいくつか取り上げ、この身近なテーマについて、前述したような側面を強調することにします。

a.「主が栄光を受けるために来られる日」(第二テサロニケ 1 章 7-10 節)。

b.「その日」(第二テモテ 1 章 12 節、18 節)

c.「裁きの日」(マタイ 10 章 15 節, 11 章 24 節, 12 章 36 節; 使徒行伝 17 章 31 節; 第二ペテロ 2 章 9-10 節, 3 章 7 節; 第

一ヨハネ 4 章 17 節; ユダ 1 章 6 節)

d.「終わりの日」(ヨハネ 6 章 39-54 節, 11 章 24 節, 12 章 48 節)。

私たちがここで直面している解釈学上の問題は、主に旧約聖書で使われている「主の日」というフレーズに関するものです。「主の日」とは、(艱難期の後の)人類の歴史の終わりを意味する預言的な言葉ですが、旧約聖書の預言者たちの間では、同じ時代の(あるいはそれに近い時期の)出来事の**パラダイム**(範例)**として**<「主の日」が>頻繁に用いられています。ヘブル人への手紙の中で、パウロが神の霊感を受けて、ユダヤに住む当時のキリスト教徒が堕落したことを出エジプト世代の行動と比較したように(つまり、比較のために「出エジプト・パラダイム(範例)」を利用しました:第一コリント 10 章 1-13 節; ヘブル 3 章 7-19 節)、旧約聖書の作者も同じ霊感を受けて、しばしば前方を見ながら、起こっている(または間もなく起こる)出来事を歴史の終わりに起こる出来事と照らし合わせたりしています。このため、「その日」は、現在起こっている出来事の描写から、「終わりの時」のみに言及しなければならない出来事の劇的な議論へと急速に飛躍するように見えます(実際にそうなることもよくあります)。このように、現在と未来の出来事が目まぐるしく入れ替わることは、最初は混乱するかもしれませんが、正しく理解されれば、忠実な人々に忍耐を促し、反抗的な人々に危険な道を歩んでいることを警告する、非常に効果的な方法となるのです。

なぜなら、神が「その日」悪人を滅ぼし、正しい人を救い出すことは、このような危機の時に、神が常に悪人には恐ろしい報いを、正しい人には絶対の忠誠をもって行動することの典型、実例、パラダイムとして機能するからです。

旧約聖書の預言者らのものを読んでもしばしば気づかないでしまう重大な要因は、いったん「主の日」のパターンを理解すれば、その同じパターンが人類史において、いかに常に繰り返されてきたかを示すことができるということです。「主の日」とは、裁き、回復、置き替えという神の「サイクル」の究極的なエピソードなのです[27]。少し話を広げると、この預言者のパラダイムは、まず国家の堕落、次に国家への警告、国家への裁き、その裁きに使われた国外の者達への裁き、外国の抑圧者からの救済、救済された人々の喜び、神の祝福の回復、以前の罪深い民に代わる救済された人々の置き換えを含む場合が多いです。

このため、旧約聖書の預言者は、聖霊の霊感に導かれて、民の背教を罰するためにパレスチナに征服者が来ることを預言しましたが、歴史の終わりの入り口にあるそのような出来事の究極の場面では、常に優れた、神から与えられた類型が用意されていました(エゼキエル 33 章～39 章、ヨエル 1 章～3 章を参照のこと)。そして、もしそのような預言者が、来たる災いから

---

[27] 「サタンの反乱」シリーズ第 5 部「裁き、回復、置き替え」を参照。

の神の最終的な解放について信仰者を励ます使命を負っていたとすれば、「主の日」の始まりに、神の敵を滅ぼし、イスラエルの運命を永遠に回復するメシアの到来に勝る類似はないでしょう(参照:イザヤ 10 章-11 章)。このように旧約聖書で頻繁に使われている「主の日」は、現代の出来事(または近い将来の預言された出来事)を**神の**正しい見解から、教え、励まし、警告し、説明するための**パラダイムとして**、艱難期の出来事とそれに続く「主の日」を予測する聖句を、正しく解釈するために把握する必要があります。「主の日」のパラダイムは、神がすべての歴史を支配し、最終的に処分されてしまうことを強調し(<「主の日」が類似する例として引き合いに出される>要点は、神の支配が絶対となる「その日」にあります)、そのため、神が最終的になさるように、歴史のあらゆる局面で即座になさる(その時代の危機の正しい解決を含む)ことを知ることは、信者にとって大きな励みになります。試練や一時的な災害があっても、義人は常に解放の時を待ち望み、喜ぶことができます。一方、悪人は神の激しい裁きを待ち受けるだけです。

> ああ、多くの民はなりどよめく、海のなりどよめくように、彼らはなりどよめく。ああ、もろもろの国はなりとどろく、大水のなりとどろくように、彼らはなりとどろく。もろもろの国は多くの水のなりとどろくように、なりとどろく。しかし、神は彼らを懲しめられる。彼らは遠くのがれて、風に吹き去られる山の

上のもみがらのように、また暴風にうず巻くちりのように追いやられる。夕暮には、見よ、恐れがある。まだ夜の明けないうちに彼らはうせた。これはわれわれをかすめる者の受くべき分、われわれを奪う者の引くべきくじである。（イザヤ17章12-14節）（ダマスコに対する託宣の全体的結論）

c．裁き・回復・置き換えのサイクル

世は去り、世はきたる。しかし地は永遠に変らない。日はいで、日は没し、その出た所に急ぎ行く。風は南に吹き、また転じて、北に向かい、めぐりにめぐって、またそのめぐる所に帰る。川はみな、海に流れ入る、しかし海は満ちることがない。川はその出てきた所にまた帰って行く。すべての事は人をうみ疲れさせる、人はこれを言いつくすことができない。目は見ることに飽きることがなく、耳は聞くことに満足することがない。先にあったことは、また後にもある、先になされた事は、また後にもなされる。日の下には新しいものはない。（伝道の書1章4-9節）

最も優れた歴史家らが常に認めてきたように、人の歴史は繰

り返されます。[28] 歴史が循環しているのは、神がそのように創られたからです。それは、この地上での人生の本質について、いくつかの基本的で重要な教訓を人類に教えるためです。ちょうど、すべての人が神の被造物を観察することによって神の存在と現実を学ぶように(ローマ 1 章 18-20 節)、時間(すなわち歴史)を通して人間の状態と人間の行動を客観的に観察することによって、すべての人が虚しく労苦していることは、誰でも(つまり、人間の存在に関する明白な真実に直面しようとする誰にでも)見てすぐにわかるものです。[29] この原理は、聖書に注目すると一層明白になります。神の視点から厳密に歴史を検証すると、神が宇宙を創造して以来(そして現在の宇宙が終焉を迎えるまで)、予測可能な形で繰り返されてきた、神の裁き、回復、置き換えのサイクルがはっきり見えてきます。これは、人類誕生以前の天使の歴史から、現在私たちが知っている時間の終わりまで、また、最も無名の人間の人生から偉大な帝国の興亡まで、あらゆるレベルにおいて常に当てはまります。天使の時代も人間の時代も、歴史は被造物の反逆から始まり、裁き、回復、置き換えという神の支配が始まりました。この歴史的プロセスの神の導きのサイクルは、過ちを正すだけでなく、神の比

---

[28] 特に紀元前 5 世紀のギリシャの歴史家トゥキュディデスの『ペロポネソス戦争史』は有名です。

[29] 特に、「サタンの反乱」リーズ第 4 部「サタンの世界システム: 過去、現在、未来」の I 項の 2「人生のむなしさ」を参照してください。

類ない恵みを示し、終わりが始まりよりも良いという癒しの終結をもたらします（再生という結果は神の恵みに応えた者にのみ与えられ、それを拒否した者は有罪宣告が確証されることになります）。

有史以来、このサイクルは国家レベルだけでなく、すべての人間の生活においても繰り返されてきました。人は罪の中に生まれ、神の正義によって裁かれるのです（ローマ 3 章 23 節，5 章 8 節，7 章 14-20 節；第一コリント 15 章 22 節）。しかし、イエス・キリストの犠牲によって、人は（信仰を通して）神への回復を与えられます。神の寛大な申し出に応じるすべての人々には、比類のない新しい命、永遠の命が、現在の私たちの共通の運命である哀れなほど短くて苦しい死に取って代わるのです。イエス・キリストの高価な犠牲を拒否するすべての人々には、死の判決が確定し、死の判決の執行は歴史の終わり（すなわち、裁きの日、「大いなる白い御座」：黙示録 20 章 11-15 節）になされることになるのです。

悔い改めた者に対処される裁きと回復と置き換えのサイクル（抵抗する者には確認と有罪宣告のサイクル）は、国家の存在にも見られます。聖書で特に言及されていない事例の詳細については推測するしかありませんが、神への不敬な行為によって滅ぼされた国（神の代理人クロスによって対処されたバビロンなど）や、厳しく懲らしめられた後に悪を悔い改めて回復した国

（ヨナ書に記されてあるアッシリアなど）の例は、歴史を少し学んだ人なら簡単に挙げることができるでしょう。神が世界の国々に対してそのような対応をされることは、聖書の中で確かに教示されています。

> ある時には、わたしが民または国を抜く、破る、滅ぼすということがあるが、もしわたしの言った国がその悪を離れるならば、わたしはこれに災を下そうとしたことを思いかえす。またある時には、わたしが民または国を建てる、植えるということがあるが、
> もしその国がわたしの目に悪と見えることを行い、わたしの声に聞き従わないなら、わたしはこれに幸を与えようとしたことを思いかえす。（エレミヤ18章7-10節）

このサイクルの国家の場合の違いは、神の懲罰的な裁き（および裁きからの回復）は、当然ながら集団的なものであるという点です。つまり、神の懲らしめの時には、その国のすべての住民が「同じ舟に乗る」ことになります。ですから、エレミヤでさえ、神の最も厳しい懲らしめの下にある国と関連することで苦しみ、当然ながらあなたや私のような目立たない信者でさえも苦しむことになるのです（エゼキエル 14 章 13-20 節； エレミヤ 45 章の「バラクへのメッセージ」も照らし合わせてみてください）。逆に、悔い改めて赦された国（あるいは、そもそも神の基準に違

反しなかった国）には、神を畏れる（あるいは、少なくとも法律と道徳の基本的な基準を守る）国民と結びついて益に与る「悪人」がいることになるのは確かです。しかし、今ここで私たちが取り上げようとしていることは、裁きのプロセスや適用される基準（上に引用したエレミヤ 18 章 7-10 節はこの原則を極めて一般的な言葉で表現しています-何が耐え難い悪で何が報われる善かを決定されるのは神です）よりも、歴史的に繰り返されるサイクルそのものです。

ここで取り上げている出来事のサイクルは、艱難期とそれに続く「主の日」の出来事にその原型を見出すことができます。このため、これらの終末の出来事は、旧約聖書の預言書を通して見られる重要な類似性を提供しています。つまり、その究極の「日」と共に起こる裁き、回復、置き換えの具体的なパターンは、旧約聖書の預言者たちが絶えず言及したパターンであり、さらに、現代の出来事を扱う際の類例としてまさに使われているものです。神の裁き、回復、置き換えのサイクルの一部が差し迫っているときはいつも、預言者たちが神の霊感を受けて、自分の時代にまもなく放たれるものの描写例として、これらの究極の未来の出来事に向かっていることがほとんどなのです。私たちの目的は、ある意味では彼らと同じです。イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル、小預言者たちは、「主の日」のパラダイムをしばしば用いて、間もなく起こる出来事を説明していますが、私たちは彼らの著作の明らかに終末的な部分だけでなく、その

時代的な応用を分析し、逆に来るべき艱難期とその後の栄光に関する情報を提供することになるでしょう。つまり、ある預言者が当時の時代の出来事を「主の日」に何が起こるかという観点から説明する場合、その説明は双方向に働くと断言できます。その時代の出来事は「主の日」に起こることと類似しているので、「主の日」についての情報を与えてくれるものとなるのです。

艱難についての適切な情報を聖書から得るためには、預言的聖句のこの「多重適用」を意識する必要があることを示す有名な例として、(「サタンの反逆」シリーズの第一部にある)イザヤ書 14 章についての説明を思い出してください。その章では、バビロン捕囚の終わりに関するほぼ同時代の預言(執筆当時はまだ未来)として始まったものが、すぐにバビロンの王についての記述に変わり、その記述は広く(そして正しく)サタンを指していると考えられ、その最初の堕落から最終的な滅び(「主の日」の終わり)までの経歴をたどっています。この章の最後に書かれていることは、近い将来と最終的なサイクル(艱難期と「主の日」)の両方に当てはまることを考えると、この章の最初に書かれているイスラエルの回復に関する記述は、それが預言する近い将来の回復(すなわち、バビロン捕囚の終わり)と同様に、その最後の時代に適用できると見て間違いないでしょう。この場合、イザヤ書 14 章 1-4 節前半(バビロンの王に対する嘲りの序文)には、当時の出来事と将来の「主の日」の両方に当てはまることが、他の個々の聖句の検証によっても確認できます。

イザヤ14章1節前半: **主はヤコブをあわれみ、イスラエルを再び選んで、これをおのれの地に置かれる。**

解説: ここで預言されているユダヤ人の自分の土地への再定住は、神がイスラエルを憐れみ、選んだ(好意を回復した)具体的な結果です。この聖句はバビロン捕囚で捉えられた者達の帰還に直接適用されます(参照: エレミヤ 3 章 18 節, 16 章 15 節, 23 章 8 節)。これは遠い終末の時代と比べると、(イザヤのこの預言が成就するのは、2 世紀近く後のことですが)ほぼその当時の出来事です。[30] しかし、世界中からイスラエルが再び集められることや、艱難期を生き残ったユダヤ人が再臨後、イスラエル国に移住することが聖書に何回も予言されています(イザヤ 10 章 21-22 節, 11 章 10-16 節, 35 章 8-10 節, 43 章;

---

[30] イザヤが生きて預言したのは、ユダ王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世、すなわち紀元前 783-687 年頃です(イザヤ 1 章 1 節)。イザヤが任命された年(イザヤ 6 章 1 節)は、彼の宣教の始まり(B.C.740-42 年頃)の可能性として考えられる最終年としてほぼ確実であり、一方、セナケリブによるユダ攻撃(B.C.701 年頃)は、それまでの一つのまとまりの時期として考えられる最後の確実な年と見なすことができます(年代をより正確に特定するには、テキスト中の歴史的暗示の解釈と、この書物全体の構成に関する具体的な仮定が必要です)。捕囚されていた者達がバビロンから帰還し始めたのが紀元前 538 年で、70 年が「公式に」終わったのが紀元前 516 年です。これらの日付から、預言から最初の成就までの期間は、最大で約 227 年、最小で約 163 年となります。

49 章 8-26 節, 60 章 4 節, 66 章 20 節; エレミヤ 3 章 18 節, 30 章 10 節, 31 章 8 節, 33 章 15 節; エゼキエル 11 章 17 節; 20 章 41 節; 34 章 13 節, 37 章 21-28 節, 39 章 25-29 節; アモス 9 章 11 節; ゼパニア 3 章 20 節; ゼカリヤ 8 章 7-8 節; 10 章 10 節) 。

1節後半: **異邦人はこれに加わって、ヤコブの家に結びつらなり、**

解説: 昔から主を求める気持ちからイスラエルに身を寄せる異邦人がいました(出エジプト 12 章 19 節, 12 章 38 節; 民数記 9 章 14 節, 15 章 14 節, 35 章 15 節; 申命記 1 章 16 節, 31 章 12 節; ヨシュア 8 章 33-35 節参照)。ですから、当時の出来事として、これは共同体の一員であった非ユダヤ人の帰還を指していると思われます(エズラ 2 章 43-59 節; ネヘミヤ 7 章 46-52 節を参照)。しかし、終末論的な観点からは、信仰を持つ異邦人が、キリストの千年王国の縦糸と横糸に組み込まれることも、よく知られた預言です(イザヤ 2 章 2-3 節, 11 章 10 節, 27 章 13 節, 56 章 3-8 節, 60 章 3 節; エゼキエル 47 章 22 節; ゼカリヤ 2 章 10-12 節, 8 章 20-23 節; エステル 8 章 17 節 を参照)。

2節前半: **もろもろの民は彼らを連れてその所に導いて来る。**

解説：これは、クロス大帝がシェシュバザル（ゼルバベル）のもとで捕囚されていた人々の土地への最初の帰還と神殿再建の両方を宣言し支援したことによって、短期間内に成就しました（歴代誌下 36 章 22-23 節; エズラ 1 章 1-11 節; 次の節も参照 イザヤ 44 章 28 節, 45 章 1-7 節）。これらはダリヨスによる政策の確認（エズラ 6 章 1-12 節）、アルタクセルクセスによるネヘミヤへの支援（ネヘミヤ 2 章 1-9 節； エズラ 6 章 13 節参照）によって成し遂げられました。クロス、ダリヨス、アルタクセルクセスはすべて「国々」の大きな集合体であるペルシャ帝国の王でした（エズラ 1 章 2 節）。しかし、この箇所は再臨の後のユダヤ人の再集結で究極的に成就します。その時、国々はイスラエルの帰還を熱狂的に支援します（イザヤ 43 章 6 節, 49 章 22 節, 60 章 4 節, 60 章 8-9 節, 66 章 20 節）

2節後半: **そしてイスラエルの家は、主の地で彼らを男女の奴隷とし、さきに自分たちを捕虜にした者を捕虜にし、自分たちをしえたげた者を治める。**

解説：帰還した信仰を持つ異邦人に加えて、回復したユダヤ民族は、最終的に再び周囲の民族（サマリヤ人、エドム人など）を支配することになります。しかし、ここでは、この預言のその当時の適用を超えて、終末論的な強調が始まり、この異邦人の服従と所有が明らかに千年王国イスラエルのより顕著な側面となることがわかります（イザヤ 11 章 14 節, 25 章 3 節, 43 章 14

節, 49 章 23 節, 54 章 3 節, 60 章 10-16 節)。

3節: 主があなたの苦労と不安とを除き、またあなたが服した苦役を除いて、安息をお与えになるとき、

解説 : 前の節と同様に、ここ 3 節でも、この預言のこの側面の適用は、厳しいバビロン捕囚から回復したイスラエルには当てはまるものの(エズラ 9 章 8-9 節, 詩篇 137 篇 1-6 節参照)、その究極の「日」、「主の日」にはさらに顕著になるでしょう(イザヤ 40 章 1-2 節, 49 章 10 節, 49 章 13 節, 54 章 7-15 節; エゼキエル 39 章 25-29 節参照)。

4節前半: あなたはこのあざけりの歌をとなえ、バビロンの王をののしって言う

解説: この節は、文字通りのバビロンの王(クロス大帝に敗れた)に加えて、「謎の」バビロンの究極の王、復活したローマ帝国の長としての反キリストにも当てはまり(黙示録 17 章 1-5 節参照)、この節とそれに続く節は、究極的に当てはまります(イザヤ 14 章 14-23 節)。さらに、この預言の部分は、近い将来の出来事と遠い将来の出来事に加えて、人類の歴史が始まる前に悪魔が主に反抗した時まで遡って見通しています(エゼキエル

28 章 11-19 節参照)。[31] そして最後に、バビロンの王／反キリスト／悪魔の没落の描写が終わると、イザヤはまさに起ころうとしていた出来事(まだ 100 年以上先のバビロン捕囚よりも近い事柄)へと話を戻します。24-27 節では、間近に迫ったアッシリアの主の御手による敗北、つまりイザヤの時代にも間もなく起こる奇跡的な解放が詳述されています(イザヤ 36-39 章参照)。この出来事、すなわちアッシリア軍の超自然的破壊(特イザヤ 37 章 36-38 節参照)は、再臨の時に主イエス・キリストが反キリストの軍を破壊すること(すなわちハルマゲドンの戦い)と並行して、それを連想させるものです。現実的かつ現代的に言えば、これこそイザヤが伝えたかったメッセージであることは間違いありません。類似して起こる、将来の悲惨な出来事は、国民が悔い改めて主のもとに帰るようにという厳しい警告となります。北イスラエルが完全に破壊されたのに、ユダがアッシリアの脅威から奇跡的に解放されたのは、ユダがイザヤのメッセージに応えた(イスラエルは拒否しました)ことの明確な表れです。

以上の考察から、旧約聖書の預言は、近い将来の成就と遠い将来の成就(つまり、艱難期と「主の日」に起こる究極の成就)の両方を持つことが多いということがわかるはずです。従って、艱難期の歴史を構築する上で、このような預言を考慮しないの

---

[31] イザヤ書 14 章とエゼキエル書 28 章の釈義については、「サタンの反乱」シリーズの第 1 部「サタンの反乱と堕落」を参照のこと。

は怠慢となります。

さらに、この幾重にも重なる適用は、当時起きていた様々な出来事を終末論的な究極の出来事と比較して、その重要性を強調するための意図的な神からの啓示なのです。裁き、回復、置き換えのプロセスはトラウマ的なものです。このような預言は、終末の究極的な出来事であれ、現代の出来事であれ、このサイクルの激変性に対して、神の言葉を聞こうとする人々を準備させるのに役立ちます。つまり、神の預言者たちは、自分たちの時代に起ころうとしていることの類型として、艱難期と「主の日」という未来の出来事を引き合いに出して、宣教する相手の注意を引くように絶えず導かれていたのです。

上記のイザヤ書 14 章は、これらの預言が近い将来と遠い将来とが織り交ぜられていて、その分離が困難であることを物語っています。上記の聖句が示すように、多くの場合、近い将来の適用と遠い将来の適用の両方が存在するため、それを区別しようとするのは間違いです。多元的成就（歴史の終わりという究極的な例と比較することによって、これから起こる歴史的な出来事の重要性を現代の人々に知らせるためのもの）は、現代の私たちにとって障害や不利になるどころか、逆に艱難期とそれに続く「日」に関する詳細な情報を探す上で本当に有益なことです。なぜなら、一旦、多重成就の事実を受け入れ、旧約聖書の預言者たちがそれを用いた目的と方法を（聖霊の導きのもと

に）理解するようになれば、このような場合にイエスかノーかを選択させる間違った解釈学的厳格さから自由になれるばかりか（すなわち、このような場合、私たちは「イエスかノーか」を選択させられるのです）、自分自身を萎縮させるような解釈学的な厳格さからも自由になれるのです。また、「主の日」のパラダイムである預言的類型の立場から見ると、これまで明らかにされていなかった箇所が、艱難期とそれに続く「主の日」に関する詳細のための重要な情報源となるので、ここで研究する目的の出来事について豊富な情報が得られるのです。

これは偶然の産物ではありません。上記で分析した預言（そしてすべての聖書の預言）は神の霊感によるものであり、予測された（そして実際に起こった）出来事は、神が歴史を構築し、神の恵み深い目的のために、神の計画と神の基準に従って歴史が管理されていることに由来しているのです。したがって、このようなこと（すなわち、裁き、回復、置き換えのサイクルの継続的な繰り返し）が、預言や歴史の中に何度も現れることに驚いてはならないのです。むしろ、聖書のあらゆる資料から終末の時代についてできるだけ多くの詳細を得ようとするなら、この現象から利益を得ようとすべきです。なぜなら、「主の日」というパラダイムを、裁き、回復、置き換えのサイクルに適用し、正しく解釈することによって、すでに起こった出来事にしか適用できないと考えられていた旧約聖書の預言の多くが、解かれることになるからです。

この意図的な出来事の類似性からできるだけ多くのことを得るために、このサイクルに典型的に含まれる出来事のパターンを大まかに説明すると助けになることでしょう。イスラエルは、ユダヤ系の預言者たちによってこれらの預言がなされた信仰者たちの国であり、私たちが考えている歴史的サイクルに関して参照できる主要な国であることは明らかです。この歴史的サイクルをイスラエルに当てはめると、以下のようになります（一般的な国家に当てはまる部分も多いです）。

1. 信仰の後退：民族の精神的退廃。

2. 警告：神の言葉による警告と、国に対するより厳しい警告・裁き。

3. **裁き**：選ばれた裁きの道具（すなわち、他の国）によって、事実上その国が滅ぼされること。

4. **回復**：忠実な残りの者の神による解放と、生き残った者の悔い改め。

5. 報復： 裁きの道具として用いられた者に裁きを与える（つまり、破壊した国が順番に破壊される）。

6. **置き換え**：反逆者は浄化され、贖われた者（以前の罪深い民に取って代わる者）に喜びが回復される。

明らかに、神の警告に応答することでこのサイクルは回避されますが、応答しないことでサイクルは完全に結実する（これは、歴史的に異邦人国家の場合、残存者がいない完全な滅亡を意味します）。

歴史が上記のように繰り返されるのは、人類が変わらないからであり（この事実は洞察力のある世俗の歴史家も見逃していません）[32]、同時に（より重要なのは）**神**が永遠に同じであり（ヘブル 13 章 8 節）、その基準も同じだからです。その結果、神に属する者のための反逆に対する神の反応もまた、常に同じです。ですから、旧約聖書の預言者たちは、イスラエルをその罪から立ち直らせるために、退廃に対する神の一貫した歴史的、未来的反応を大いに利用したのです。したがって、このように激変する未来の出来事を、考慮をもってその時代の警告と励ましを行う方法が採用されたことは、よく考えてみれば驚くべきことではありません。それどころか、過去、現在、未来にわたって、主に対する適切な応答と敬意を欠いたために、裁きの恐ろしさに照らして、過去と現在の人々が主に対してもっと応答しなかったことが驚きです。

---

[32] トゥキディデスの『ペロポネソス戦争史』参照。

このように、人類は個人的にも集団的にも神から離れようとする傾向があり、裁きの重圧の中で神に立ち返る者はほとんどいないのです。しかし、イエス・キリストを通して、神のもとに戻ってきた人々に赦しを与えるという神の驚くべき恵みによって、神の豊かな恵みを受けるすべての人々のために、回復と置き換えが継続することが保証されているのです。これは要するに、神の恵みの個人的な体現者であり、その犠牲によって、恵みを受け入れようとするすべての人が利用できるようになったキリストの物語なのです。このように、メシアにおける裁きからの解放という本質的な物語が明確であるがゆえに、旧約聖書の預言者たちは、私たちが（少なくとも初めのうちは）馴染んでいないような、当時と遠い未来の言及を容易に、行ったり来たりすることができたのです。例えば、旧約聖書の預言者たちは、古代イスラエルの滅亡から再臨の際のイスラエルの究極的な解放に至るまで、これらの出来事の進行が神の視点から見て原理的に同じであるからこそ、切り替えることができたのです。神の裁きと、回復と置き換えにおける神の恵み深い解放は、常に同じ基準で、常に同じ犠牲（私たちの主イエス・キリストの犠牲）を基礎として行われるからです。変わるのは特殊性（時間、人、規模）だけです。ですから、すべての国の経験は、これらの用語（すなわち、恵みと裁きの交替）で見ることができるだけでなく、すべての世代とすべての個人の経験にも見ることができるのです。

d. 旧約聖書の預言における予型論と連続性（シーケンス）

私たちが研究している不変のサイクルの中で、詳細において互換性があることは、聖霊の導きの下で活動する旧約聖書の預言者たちが、そのような突然に「場面転換」する傾向（と能力）を説明するのに大いに役立つでしょう。この方程式に**予型論**という現象が加われば、私たちの解釈はかなり完成されたものになります。簡単に言えば、予型論とは、模範やモデル（「対型」）を表し、説明し、象徴するために、類型（「予型」）を用いることです。この現象は、預言に限らず、聖書のいたるところに見られます。例えば、ヨシュアはイエスの明確な「予型」です。彼はイスラエルを約束の地に導き、神の働きによって敵を倒します（エリコの壁の崩壊を参照）。ヨシュアという名前さえ（英語では混乱を避けるため便宜上、これらを分けて書いていますが＜日本語も同様です＞）、ヘブル語ではイエスと＜ヨシュアとは＞区別がありませんし、ギリシャ語でもそうです。[33] ヨシュアはこのようにして、私たちの主イエスキリストの再臨とその勝利を予告するものです。同じように、バビロンの王とアンチキリストは、サタンの代表的な型となることができます（イザヤ書 14 章を考察する際に、上で見たとおりです）。

---

[33] 一般的なイエス・キリストの聖書予型論については、聖書の基本: 第 1 部:「神学:神についての研究」II 項 C.2:旧約聖書に予表されたメシア 」を参照してください。

このような予型論（預言、終末論的パラダイム、繰り返される神の支配する歴史サイクル）に慣れると、旧約聖書の預言者たちの方法とやり方がよく理解できるようになります。彼らは神の神聖な導きのもと、良く知られたストーリー、その多くの時代に語り継がれた物語に取り組んでいたのです。それは、反逆に対する神の裁き、悔い改める者への恵み深い回復、そして失われたものをより良いものへと置き換えることであり、これらはすべてイエス・キリストの犠牲という神の備えに基づいています。この「物語」は私たちが「歴史」と呼ぶものの本質であり、地球上で起こっていること、常に起こっていたこと、そして最終的に起こるであろうことの**真の**物語であり、世界はキリストによって創られ、キリストにおいて存在しています（ヨハネ 1 章 3 節; 第一コリント 8 章 6 節; コロサイ 1 章 16-17 節; ヘブル 1 章 1-2 節）。この物語はイエスキリストというお方なしでは本質的に理解できないものであり、常に彼を中心に回っており、キリストが存在することによって世界は造られたのです。

歴史的に見れば、この「物語としてのサイクル」は、典型的に次のように展開されます。

1.後退: （多くの場合、元々信仰を持っていた）ある国、グループ、個人が神から離れる。

2. 警告： 手遅れになる前に、神は一連の強まる警告と懲らしめを与え、寛大に神のもとに連れ戻そうとする。

3. **裁き**： 悔い改めがない場合、神は反抗的な者を滅ぼすために圧制者を起こされる。

4. **回復**： 神の慈悲によって、神は忠実な残りの者たち（または人）を救出し、悔い改めた生存者を回復させるために、解放者を起こされる。

5. 報復： 圧制者（個人または国家）は、完全に滅ぼされる。

6. **置き換え**： 忠実な残りのたちは、反抗的な多数派に取って代わり、その終わりは（国、また個人の場合も）その始まりよりも祝福される。

エジプト人、カナン人、アマレク人、アッシリア人、バビロン人、ローマ人など、この物語で圧制者の役割を果たした国のリストは長く、またよく知られています（国家レベルではイスラエルにも適用されます＜イスラエル国家がその民を圧制＞）。この「時代の物語」の究極版、つまり私たちが今回研究しようとしている艱難期と「主の日」では、反キリストの下にある世界的な国家連合がこの役割を担い、イスラエルだけでなくすべての信徒が虐げられる側に立たされることになるのです。艱難期は裁きの段

階であり、メシアの再臨は回復の時、そして千年王国では、キリストの正しい支配の下に、その奇跡的性質と祝福の大きさにおいて人類史上前例のない「より大規模な」置き換えが行われるのです。この歴史的な「対型 antitype」（すなわち、艱難期と「主の日」の間に起こる裁き、回復、置き換えのサイクル）と個人の「対型 anti-types」＜著者は英語で複数形を使っていますー反キリストとサタンを指している＞（すなわち、抑圧者としての反キリストとサタンに、解放者としての栄光のキリストが対抗する）を預言者たちは最終的に見つめ、そこから聖霊の導きによって必然的に類似性を導き出したのです。

したがって、旧約聖書の預言は、（地図の読み方を知っている人にとってはわかるように）「地図全体に＜無作為に＞散在している」わけではありません。むしろ、これらの未来への言及は、預言者たちが直面していた当時の状況についての神が意図的に組み込まれた解き明かしなのです。このような状況は、背教のために国民に迫り来る裁きに関係していることが多いので、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書などによく見られる類似点の一つは、艱難期とその後の出来事（すなわち、「主の日」パラダイム）です。このような理由から、私たちはここで、一回では理解しきれないかもしれないこれらの事柄について、やや詳細な議論を展開しました。しかし、これらの預言は、私たちの研究の主題である終末に関する貴重な情報源であるため、これらの事柄を理解することは不可欠なことです。

2. 終末の時代に関する聖書の情報源

冒頭で述べたように、この研究では、基本的に年代順に終末を扱っている黙示録を組織的な道しるべとして活用することにします。しかし、黙示録の釈義を始める前に、聖書の最後の書物以外の終末に関する主要な資料を、ここに列挙しておくことは有益でしょう。このスケッチは、どのような資料がどこにあるのかを知るための、簡単な概要のようなものです。もちろん、以下のすべての書と章について、解説はもちろんのこと、完全なアウトラインをここに示すことは、時間とスペースの関係上できません。これらの聖句やその他の関連する聖句は、この研究の過程で、「苦難の歴史」の調査を年代順に進めながら、文脈の中で引用され、考察されることになるものです。したがって、読者は以下の「ハイライト」リストが完全なものではないことに留意してください（重要な詳細を示すより短い文句は、聖書の他の箇所にもあり、実際にあります：上記セクションIで扱った個々の箇所と照らし合わせてみてください）。

a. 旧約聖書

「聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたものであって、…有益である」（第二テモテ3章16節; ローマ4章23-24節; 第一ペテロ1章12節も参照のこと）。したがって、旧約聖書には、少なくとも終末の時代に関連する何らかの側面や原則を説

明するために、何らかの形で使用できない書は(それどころか、章さえも)存在しないのが事実です(理由の一部は、上記のセクション IV.1 で説明したとおりです)。神が歴史を支配しておられるという霊的真理は、常に変わりません。しかし、旧約聖書には、艱難期とそれに続く「主の日」に関する預言的情報が著しく集中している箇所、あるいは、来たるべき時代の出来事に非常に近いパラダイムを提供している特筆すべき部分があります。この後者の現象が偶然ではないことは、おそらく最も顕著な例である出エジプトと艱難期の比較(すなわち「出エジプトのパラダイム」)の場合に見ることができます。例えば、黙示録では、殉教者の勝利の歌は「モーセの歌」と呼ばれています(黙示録15章2-3節; 出エジプト記15章も参照のこと)。これは、パロから逃れたイスラエルの子らの経験と、反キリストによって起こされる艱難期と大迫害の信者の経験を、明確かつ意図的に結び付けています。[34]

伝統的な英語の旧約聖書の各書は(伝統的ヘブル書籍順とは異なる点もありますが)、(大まかな)ジャンルごとに整理されているため、トピックやテーマの観点からは、ここでの目的に合っています:

五書： (創世記から申命記まで)

---

[34] これらのパラダイムについては、本シリーズの第七部で扱います。

Ⅳ．艱難期の歴史に関する聖書の情報源

創世記：

3 章 15 節：プロテバンゲリウム＜メシアについての預言的解釈＞
6 章-9 章：ノアのパラダイム（艱難期の予型としての洪水）
11 章：バベルの塔とニムロデ(反キリストの一つの予型)
49 章：ヤコブの息子たちへの祝福

出エジプト記：パラダイムとしての書（反キリストの王国の予型としてのエジプト）

レビ記：16-17 章：贖罪の日（大艱難の一種）

民数記：

13 章-20 章：イスラエル人の背教（大背教の一種）
23 章-24 章：バラムの託宣

申命記：

18 章 14-22 節：預言者（キリストの予言）
28 章 15 節～30 章 20 節：裁き、回復、置き換えのサイクル
32 章：モーセの歌

33 章：モーセによる部族の祝福

歴史書：(ヨシュア記からエステル記まで)

ヨシュア記：パラダイムとしての書（帰還するメシアの予型としてのヨシュア）
士師記：背教、裁き、贖罪、回復、置き換えの歴史的事例

知恵の書：(ヨブ記からソロモンの雅歌まで)

ヨブ記：報復ではない極度の苦難のパラダイム（艱難期の信徒になぞらえる）

詩篇: 詩篇は、独特の個人的な視点に立った預言書であり、前節で述べた考えを鮮明に示しています。特に、ダビデ王によって書かれた詩篇の最初の二巻（それぞれ 1-41 篇と 42-72 篇）はそうです。[35] 他の預言者たちが、終末に関する霊的知識を

[35] 詩篇のおおよそ前半を二つの書物に構成したのは、そこに収められた詩篇の大半の作者である、神よりの賜物に恵まれた預言者ダビデ王によるものであることはほぼ間違いありません（ただし、ダビデ王は第一巻と第二巻の冒頭に、それぞれ第 1-2 篇と第 42-50 篇という、ダビデ王自身によるものではない詩篇を選んでおり、その偉大な信者の真の謙虚さの印が現れています）。ダビデの死後、ソロモンは詩篇 72 篇で第

用いて、聴衆を動機づけるため類似性を導き出したように、ダビデは直面した厳しい艱難の中で、いかに主にあって自分が動機づけられ励まされたかを、この二巻の中で自分自身の霊的体験の力強い回想を通して私たちに示しています。(サムエル上 30 章 6 節を参照してください)。この自己動機づけの多くは、メシアとその王国を待ち望むという、将来の出来事に御霊によって集中していることによります。ダビデは神の約束を信じていました。偉大な御子の王国の設立が確実であるように、神は彼を悩みから解放し、自分の王国を確立してくださるというのです。詩篇の第一巻と第二巻は、苦難の時代にあるすべての信者、特に今、終わりの時代の境目にいる私たちにとって、特に必読の書です。なぜなら、この二冊の本は、ダビデの「**嵐の中の**信仰者」の正しい視点の見解を教えてくれるからです。この二冊の本を一冊の本として読み、理解することは重要です。そうすることで、この偉大な信仰者が大きなプレッシャーにさらされる姿(初期の追放時代と、その後の困難)を垣間見ることができ、これらの問題の中でダビデと共感するだけでなく、彼のように神に力と励みを見出す方法を学ぶことができるようになるからです。艱難期を耐え忍ぶことを使命とする私たちにとって、第

二巻を閉じ、詩篇はその後、五巻にわたる 150 篇からなる現在の詩篇集へと拡大されました(このことは、詩篇 72 篇 20 節や、詩篇の後半にさらに「ダビデの詩篇」があることを説明しています。これらは、第一巻と第二巻とは異なり、ダビデの手によって収集編纂されたものではありません)

一巻と第二巻は、まさにその体験の総まとめなのです。[36] そのため、第三巻から第五巻の詩篇にも同じことが言えるかもしれませんが（例えば、詩篇 82-84 篇, 87 篇, 93 篇, 96-98 篇, 102 篇, *110 篇, 117 篇, 118 篇, 137 篇, 148 篇, 150 篇のような終末論的意義が明確なものを見てみてください）、この最初の二冊の詩篇すべてを以下にリストアップし、簡単な説明と艱難にある（そして究極的には**艱難期**における）信徒の一般的適用法を[ ]で示すこととします。これらは反復ではなく、極めて重要な視点であり、全体としてとらえ、心に留めておくことで、最悪の状況下でも私たちを支えることができるものです。

第一巻: ダビデの生涯は、主が艱難から解放されることのパラダイム＜概念＞（艱難期）。

第 1 篇：忠実な者には霊的祝福を、悪人には裁きを
[**主に従うことは価値がある**]

第 2 篇：メシアによる反抗的な国々の征服

---

[36]アンガー（M.F.Unger）が Unger's Commentary on the Old Testament v.1 (Grand Rapids 1964) 781 で指摘しているように、詩篇の多く（アンガーは特に第 25-39 篇に注目している）には 4 つの適用があります: 1)ダビデへの適用、2)あらゆる時代における敬虔な者の試練、3)艱難期におけるユダヤ人の残りの者たちの苦しみ、4)初降臨の際の主の苦しみです。

[主は私たちを敵から守ってくださる]

第 3 篇:ダビデがアブサロムから逃げる
[主は私たちを危険から守り、裏切りから解放してくださる]

第 4 篇:神を恐れぬ敵からの救済の訴え
[神とその解放を信頼し、喜ぼう]

第 5 篇: 謙虚でありながら自信に満ちた、助けを求める祈り
[主は私たちの祈りに答え、悪人を滅ぼします]

第 6 篇:赦しと助けを求める祈り
[主は私たちの罪を赦し、私たちの敵を打ち負かします]

第 7 篇:偽って告発する者からの救いを求める義の祈り
[主は邪悪な敵を裁かれる。6-8 節にある主の日のパラダイム]

第 8 篇:最後のアダムの将来の支配
[私たちは将来キリストの地上の支配を共有することになります]

第 9 篇:神を信じない国々に対する神の裁き
[神は歴史を支配し、私たちの大義を正当化されます]

第 10 篇：人は抑圧するが、神は救済される
[人間の期待とは裏腹に、神は無力な者を正当化されます]。

第 11 篇: 信心深い人々を萎縮させようとする人々への叱責
[主は私たちのために悪人を滅ぼされます]

第 12 篇：邪悪な舌の勝利は一時的なものである。
[神は私たちを誹謗中傷の舌から守ってくださいます]

第 13 篇：極度のプレッシャーの中で助けを嘆願する
[困難があっても、主を信じ、感謝します]

第 14 篇：神を恐れぬ敵対者
[アンチキリストに従う者は愚か者です-メシアが私たちをあがないます]

第 15 篇：神との交わりを得るための条件
[正しい生活は決して無駄ではありません]

第 16 篇：神に焦点を当て続ける
[彼は私たちの嗣業であり希望であり、現世を超越した私たちの良き方です]

Ⅳ. 艱難期の歴史に関する聖書の情報源

第 17 篇:敵からの解放を求める確信に満ちた祈り
[神が答えてくれると確信できます]

第 18 篇:メシアへの勝利の讃歌
[主にあって、私たちの究極の解放と勝利は確実です]。

第 19 篇: 被造物は神の言葉の真理を証言している
[私たちは神の言葉に集中し続けなければなりません]

第 20 篇: 他の信者の勝利のための祈り
[私たちはお互いの確信ある信仰によって励まされます]

第 21 篇:勝利を収めた王が感謝を捧げる
[私たちは主イエス・キリストの最終的な勝利を分かち合うことになります]

第 22 篇: 苦しむしもべと勝者のメシヤ
[キリストは私たちの忍耐と勝利の模範です]

第 23 篇: 私たちの羊飼いであるキリスト
[主は艱難の中を、究極の勝利へと導いてくださる]

第 24 篇: 栄光の王の来臨
[アンチキリストを拒否する者は、キリストと共に支配します]

第 25 篇:導きと慈悲を求める祈り
[神は私たちの真理、赦し、解放の源です]。

第 26 篇:悪人との区別のための祈り
[神は邪悪な者と共に私たちを滅ぼされません]

第 27 篇: 主に対する絶対的な信頼
[私たちは主の解放を完全に信頼することができ、またそうすべきです]

第 28 篇:解放の祈りが答えられる
[主は 困難の中でも私たちの声を聞き、答えてくださいます]

第 29 篇: 神の威厳を讃える
[その声は世界を震撼させ、主は私たちを守ることができます]

第 30 篇: 神の慈悲と赦しを求めて悔い改めの賛美を捧げる
[すべては主の恩恵によります]

第 31 篇: 神への完全な依存を認めること
[私たちは完全に彼を必要としています]

第 32 篇: 罪を告白した後の神の赦しへの賛美
[主はご自分のもとに戻る者を赦されます]

第 33 篇: 主の御性格と御力への賛美
[神の計画は人間の目論見にもかかわらず堅く立ちます]

第 34 篇: 主に信頼する無力な者たちへの主の善意を讃える
[主は私たちをも養ってくださいます]

第 35 篇:戦いを神の御手に委ねる
[もし私たちが主に信頼しさえすれば、主は私たちのために戦ってくださいます]

第 36 篇:神を信じない者は神の不思議に気づかない
[主は正しい者を祝福し 悪い者を拒まれます]

第 37 篇:神は正しい者を祝福し、悪しき者を滅ぼされる
[神を信じなさい -外見で判断してはいけません]

第 38 篇:慈悲と敵からの解放を求める訴え
[主は告白する者を赦し、助けを求める者を救い出されます]

第 39 篇:人生の虚しさを体験する
[この人生では、神と正しく付き合うことだけが重要です]

第 40 篇：神は忍耐強く謙遜な僕に報い、解放される。
[キリストの自己犠牲、謙遜、究極の解放は、艱難における私たちの模範です]

第 41 篇：偽りの友の裏切りから主が救い出される
[主は義人を最悪の状況からさえも救い出してくださいます]

第二巻 ダビデの生涯は、艱難期（数々の艱難）からの神の解放のパラダイム

第 42 篇：主が艱難から解放してくださることへの確信 その 1
[艱難において、主に励ましを見出すことは重要です]

第 43 篇: 主が艱難から解放してくださることへの確信 その2
[艱難において、主に励ましを見出すことは重要です]

第 44 篇: 迫害からの国家的救済の訴え
[神は私たちの勝利の源であり、私たちのすべての悩みを知っておられます：神に信頼しなさい]。

第 45 篇：メシアの栄光と花嫁との婚礼
[私たちは主の勝利を分かち合い、永遠に主と共にいます]

第 46 篇：メシアの国に対する勝利
[主が私たちの戦いを戦ってくださるので 恐れることはありません]

第 47 篇: メシアの千年王国での戴冠式
[主の勝利は確実で、私たちの解放は保証されています]

第 48 篇: メシアの千年王国の首都
[私たちは永遠に、私たちのガイドである神と共にあって安全で安心です]

第 49 篇: 艱難の最中の成熟した信仰者の確信
[悪人の見かけの祝福は塵となって消え去ります]

第 50 篇: 千年王国時代の粛清
[主は悪人と正しい人を分けられます。では、私たちはどのような人になるべきでしょうか]

第 51 篇: 罪を告白し、赦しを請う祈り
[神は外見的な悔恨の念よりも、悔悛の心を求められます]

第 52 篇：アンチキリストの予型としての抑圧者エドム人ドエグ
[神は正しい者を栄えさせ、破壊者を完全に滅ぼされます]

第 53 篇:アンチキリストであり抑圧する者の予型として神を否定する愚か者
[冷酷な者はメシアの再臨に際して神を恐れることを知るようになります]

第 54 篇: 一般的な裏切りからの解放のための祈り
[人が利益のために私たちを裏切るとしても、神は私たちを救い、彼らを滅ぼされます]

第 55 篇: 友の手による裏切りからの解放の祈り
[愛を示した者が裏切っても、神は欺く者を裁き、私たちを救ってくださいます]

第 56 篇:へつらう者たちからの解放のための祈り
[神は私たちを取り囲み、裏切るような不信心者から私たちを解放してくださいます]

第 57 篇:「滅ぼさないでください」;追い詰められたときの救いを求める祈り
[主は私たちの窮状を見て、敵の策略を逆手に取られます]

第 58 篇:「滅ぼさないでください」;反キリストのような悪い支配者からの解放を訴え、求める。

[邪悪な支配者は速やかに滅ぼされ、正しい者はあがなわれます]

第 59 篇:「滅ぼさないでください」;アンチキリストのような強大な敵からの救出を祈る言葉;
[神は破壊者に対する私たちの要塞であり避難所であり、敵に報いてくださいます]

第 60 篇:主の軍勢への訴え
[神と共にあってのみ勝利を得ることができます]

第 61 篇:神の国を待ち望む
[主が私たちを解放し、安息を与えてくださるという信仰を私たちは持つ必要があります]

第 62 篇:私たちの力の源とすべての善を思い出すこと
[神にだけ、安らぎと希望を見出す必要があります]

第 63 篇: 迫害の中での神との交わり:通らなければならない荒野としての艱難期
[窮乏と迫害は、神が私たちの真の嗣業であるという事実を浮き彫りにします]

第 64 篇:陰謀からの解放のための祈り

[私たちの強力な敵の最も巧妙な計画でさえ、私たちの避難所であられる神の前に崩れ去ります]

第 65 篇:メシアの再臨を待ち望む賛美歌
[神の備えを思い出し、神の究極の解放を確信します]。

第 66 篇:メシアの勝利と究極の解放への賛美
[主は私たちを艱難期の火と水の中をくぐらせるでしょう。そして私たちは主を讃えるでしょう]

第 67 篇: メシアの千年王国時代の支配
[主は天でそうであられるように地上のすべてを義と祝福で解決されます]

第 68 篇:予期される再臨とその説明
[「主の日」には、神とその民は高められ、悪人は滅ぼされます]。

第 69 篇:メシアの謙遜とシオンの究極の解放
[キリストは、艱難を耐え忍び、勝利に至る私たちの模範です]

第 70 篇:個人の解放と仲間の強化のための祈り
[主にあって、私たちは自分たちも他人も励ます必要があり

ます]。

第 71 篇: 殉教に直面しても、主の救いを確信する祈り
[たとえこの杯を飲むことが神の御意志であっても、神を確信する必要があります]

第 72 篇:メシアの正しい支配
[すばらしい勝利の王国が、私たちに保証されていることを忘れませんように]

ソロモンの歌:キリストとその花嫁である教会のたとえ

預言者たちの書:（イザヤ書からマラキ書）:

イザヤ書: イザヤの預言は、おそらく、終わりの時集中した資料を最も多く提供しています。イザヤは「主の日」というパラダイムをうまく使って、北イスラエル王国に主の差し迫る、滅びの裁き、そして南ユダ王国への警告的な裁きの深刻さを当時の人々に印象付けました(「主の鞭」であるアッシリアが彼の生存中に預言を成就させました)。イザヤ書の後半(40-66 章)は、バビロンに焦点を当てた「裁き-回復-置き換え」のテーマに集中しています(ただし、このアプローチはイザヤ書の前半の重要な部分にも見られます)。バビロン捕囚は、前述したように、執筆当時はまだ何年も先のことであったので、この後半部分は、

イザヤの同時代の人々に、差し迫った（比較的近い）将来の裁きと、背教に対する裁き、信仰者の救出、敵の滅亡、メシアの最後の勝利と支配という究極のパノラマを提供するものとなっています。

この点で、この書の後半（40-66 章）にバビロンがそんなにもたくさん登場しても、-紀元前 586 年頃にユダに対する神の裁きの道具としてバビロンが用いられたことについて-上述の解説を読んだ人なら、全く不思議には思わないはずです。ユダが裁かれた 70 年後に国を回復し、偶像崇拝の住民を謙虚で神を敬う残りの者たちに置き換えて、その後祝福したことは、この世界の歴史の終わりにほとんどそっくりの出来事が起こり、その最終成就となります（この現象は、上記の原則に従って預言の中で何度も繰り返されています）。しかし、イザヤが死んだとき、バビロン捕囚はまだ 100 年以上先のことであったため、この出来事を個人的に経験した「第二イザヤ」を想定する人も多くいます。しかし、イザヤ書の後半は、私たちがこれまで研究してきた預言の体系と教えに完全に合致しているものです。つまり神は意図的に預言者たちに未来の出来事を明らかにし、それによって神の民に、重要で、繰り返し起こり得る予測可能な神の歴史管理のパターンを認識させ、神が出来事を司っておられることについて、彼ら（そして私たち）を正しい結論に至らせ、差し迫った災害についての警告を謙遜に受け止めるようにされたのです。このシリーズの目的にとって、この書全体が重要であるため、

Ⅳ. 艱難期の歴史に関する聖書の情報源

以下にすべての章を掲載し、簡単な考察を述べることにします。イザヤは、未来の出来事と現代の出来事の間を難なく行き来し、それぞれの出来事を他の出来事によって説明し、照らし出していることが、以下から容易に観察できると思います。

[警告と裁き]
第 1 章: イスラエルの経験(裁きと解放)の鍵となる、イスラエルの主との関係
第 2 章: 警告の物語としての終末の逆像＜出来事が逆順に述べられている＞:千年王国の「山」;「主の日」…
第 3 章: …艱難期
第 4 章: …艱難期の続き、メシアの千年王国の支配
第 5 章:ぶどう園のたとえ。イスラエルと主との関係　その 2:背教と裁き
第 6 章: イザヤの使命:残された者たち以外は拒否される運命にあるという警告のメッセージ。

[イスラエルとアッシリア:　初降臨と再臨のパラダイム]
第 7 章: インマヌエルが拒否され、その結果、…に象徴される国家に裁きが下される。
第 8 章: アッシリアは獣の王国の予型であり、大多数は助けを求めて主に立ち返ることをしない。
第 9 章: メシアとその国民の解放:国民の背教にもかかわらず…

第 10 章: …続き;圧制者の最終的な滅びと残された者たちの回復
第 11 章: メシアとその千年王国の支配、国への帰還
第 12 章: 復元された者の喜び(勝利の歌)

[バビロンの現在と未来]
第 13 章-第 14 章:最初部分:獣の王国の予型としての当時のバビロン(反キリストとサタンとしての王子)

[国々への裁き:究極の再臨の際の処罰の予型としての来るべき征服]
第 14 章:中間部分:アッシリア(獣の王国の予型、ハルマゲドンにてイスラエルでその軍勢が粉砕される)
第 14 章:最後の部分:ペリシテ人(イスラエルの敵対的な隣国の予型、完全に破壊される)。
第 15 章:モアブ(反キリストの征服で苦しむ中立的なイスラエルの隣人の予型)
第 16 章:…続き。
第 17 章:シリア(反キリストの地域的同盟者の予型、イスラエルを迫害するが最終的に滅ぼされる)
第 18 章:クシュ<=エチオピア>(獣の手によって敗れる南方同盟の予型)
第 19 章:エジプト(南方同盟の指導者が反キリストに敗れ、その後神に立ち返る予型)

第 20 章:エジプトとクシュ＜＝エチオピア＞(南方同盟の全体像の予型、敗れる)
第 21 章:最初部分: バビロン(獣の王国の予型、再臨前と再臨時の裁き、黙示録 17 章参照)
第 21 章:中間部分:エドム(イスラエルに敵対するすべての国(ヤギ)の典型;エサウ対ヤコブ参照)
第 21 章:最後部分:アラビア(すべての同情的な国[羊]の典型)

[ユダ、ツロ、アッシリア:イスラエル、「バビロン」、反キリストの王国の予型と対型]。
第 22 章:エルサレム包囲は反キリストの攻撃の予型、その前と後の執事たち(統治職)
第 23 章: 反キリストのバビロンとしてのツロとその破壊
第 24 章: アッシリアの侵略のパラダイムとしての艱難期と再臨の際の裁き
第 25 章: 神がアッシリアから解放されたパラダイムとしての王国の賛美と祝典
第 26 章: 艱難期の励みとなる将来の賛美と復活の展望(20-21 節)。
第 27 章: その後のハルマゲドンとメシアの統治は、アッシリアからの救出のパラダイム。

[予型と対型;当時と終末の期間における国の侵略]
第 28 章: 北イスラエル王国の迫り来る裁きは、艱難期の裁きの

対型
第 29 章: アリエル＜「神の祭壇」の意＞:「神の祭壇」であるシオンの上で、獣の軍勢（類型的にはアッシリア）が滅ぼされる
第 30 章: イスラエルは、(主の代わりに頼った)エジプトによって失望させられたが、将来は「バビロン」によって失望させられる
第 31 章: 当時のエジプトと将来の「バビロン」に依存した悲惨な結果
第 32 章:王とその王国:不忠実さとそれに伴う災難にもかかわらず、なお神の救いがある。
第33章:滅ぼす者（当時のアッシリアとバビロン、将来の獣のバビロン）。
第 34 章: ハルマゲドンにおけるイスラエルの迫害者に対する神の報復（アッシリアに適用される）
第 35 章: 千年王国（アッシリアの敗北に続く祝福の対型）

[イザヤの終末論的大要の歴史的一覧]
第 36-39 章: アッシリアとバビロン – 北王国の滅亡と主によって奇跡的にアッシリア軍が滅ぼされた例にもかかわらず、ユダの後の世代は同じ背教の道を歩む。しかし、彼らの王ヒゼキヤに見られるように、当時の世代は神の呼びかけに応じたので、滅びは免れた。

[イザヤの終末論的大要:バビロン捕囚は執筆時において未来の出来事であり、艱難期と再臨の出来事と類似している]

第 40 章:来たるべきメシアの励まし:大患難にあって元気を出しなさい、神が歴史を支配しておられる
第 41 章: 国々を制圧するメシアの予型としてのクロス
第 42 章:メシアの初臨と栄光ある再臨
第 43 章:イスラエルが(不忠実であるにもかかわらず)バビロンからメシアによって慈悲深くも救出される
第 44 章: イスラエルの敵の偶像崇拝の愚かさ、イスラエルの再繁栄[近・遠将来]
第 45 章: クロスはキリストの予型、神の御手でイスラエルの敵が征服される
第 46 章:主は、イスラエルの頑なさもかかわらず、バビロンを(近・遠将来)打ち破られる
第 47 章:近い将来と遠い将来のバビロンの滅亡
第 48 章: イスラエルの頑なさもかかわらず、神はバビロン[複数]から解放するためにメシアを任命
第 49 章: メシアの二度の到来:謙虚な者には光、反逆者には剣、そしてイスラエルを回復される。
第 50 章: 自己犠牲的なメシアという方に、神はイスラエルの救いを用意された
第 51 章:忠実な人々への励まし:神は大艱難から解放される;人ではなく、主を恐れよ
第 52 章: メシアが国民のためにご自身を犠牲にされたことに[基づく]、勝利の兆しの良い知らせ
第 53 章: 主によって報われたメシアの苦難

第 54 章: メシアの支配下にあるイスラエルの回復と栄光
第 55 章: 御国と救いの祝福がすべての人に与えられる
第 56 章: 祝福と救いの国々への拡大、再臨前にイスラエルの支配者たちだった者たちの罪が問われる
第 57 章: 正しい人と悪い人の対照的な未来と、悔い改める人に対する神の憐れみ
第 58 章: 真の悔い改めとその恩恵
第 59 章: 罪人、悔い改めた者、そして主の罪からの贖い[初降臨]と抑圧[再臨]について
第 60 章: [悔い改めと解放の後の]御国の栄光: メシアにあって、神は私たちと共におられる
第 61 章: 来たるべき王国とその栄光の良い知らせに(大艱難にあって)励まされる
第 62 章: (大艱難における)贖罪、回復、報酬の約束の励まし
第 63 章: (大艱難における)来たるべき裁きにあっての励まし; モーセとイスラエルの型
第 64 章: これらの[近い将来と遠い将来]の裁きと回復をもたらすための神への悔い改めの祈り
第 65 章: 傲慢な者と悔い改めた者が選ぶ未来、来たるべき王国の現実
第 66 章: これらの差し迫った出来事の現実 [近い将来と遠い将来]; すべての者は、勝利の主を拝する

エレミヤ: エレミヤ書は、ユダに対する差し迫った神の裁きという

当時の状況に焦点が当てられていますが、この差し迫ったバビロンによる侵略は、（イザヤの時代のアッシリアを使ってのユダに対する裁きの警告に対応する）国の罪深さと、終末における反キリストによる侵略という酷似した神の裁きと重なっていることを示しています。特に 1-20 章では、罪深いユダに対する差し迫った裁きが語られていますが、それは将来、主の預言者とその警告を拒否する形で再現されるであろうことが記されています。特に終末に関連する箇所は以下の通りです：

第 3 章: 悔い改めへの励ましとなる輝かしい千年王国時代の約束
第 4 章：北からの破壊（獣の王国としてのバビロン）と「主の日」
第 6 章: エルサレムから逃げるようにとの命令（中盤における忠実な者たちの逃亡と類似している）
第 8 章：ダンからのトラブル（反キリストの侵攻を意味する）
第 12 章：悔い改めた国々への（近い将来、遠い将来の）対処
第 14 章: 干ばつ（艱難期と同様の窮乏を想起させる）
第 15 章: 二人の証人（大艱難の前のモーセとエリヤの働きを想起させる）
第 16 章: イスラエルの復興と諸国の改宗の預言
第 23 章：枝であるメシアと民族の復興は、自分たちが再び戻ってくることの対型
第 25 章: （獣の世界王国の象徴的な）バビロンと国々に対する神の裁き

第 30 章: 大艱難と千年王国への復帰を当時の出来事に当てはめる
第 31 章: 新約の下でのイスラエルの最終的な回復による励まし
第 33 章: 枝(メシア)のもとでのイスラエルの究極の回復による励まし
第 45 章: バルクへのメッセージ:艱難期による解放の原理
第 46-49 章:諸国民に対する預言:近い将来と遠い将来の適用[イザヤ書 14-21 章参照]
第 50-51 章:バビロンの滅亡とイスラエルの復興[近い将来の予型と将来の対型]。

エゼキエル書: エゼキエルの任務は、使徒ヨハネの黙示録の執筆の任務と多くの類似点を含んでいます。エゼキエルの亡命者としての立場、幻の背景と圧倒的な特質、主の出現、ケルビム、御座と海、巻物を食べること、選ばれた者の印など、黙示録に見られるような明白な類似点がいくつかあります。エゼキエル書前半のテーマであるイスラエル民族に対する将来の裁きは、艱難期の将来の裁きにも広く適用できますが、エゼキエル書後半では、ほとんど将来の出来事だけに焦点が当てられており、預言者が直面する当時の近い将来の状況と意図的かつ密接に類似していることが繰り返し見て取れます。

第 25 章: 諸国に対する預言:近い将来と遠い将来への適用(イ

ザヤ書 14-21 章参照)
第 26-28 章: 獣のバビロンとしてのツロ、ツロの王子はサタンと反キリスト(イザヤ第 13-14 章参照)。
第 29-32 章: エジプト(バビロン)への依存は、近い将来(そして遠い将来)のむなしい希望
第 33 章:警告のラッパの原理。神の慈愛に満ちた最後の審判の予告
第 34 章: 真の羊飼いの回復と羊と山羊の間の裁き
第 35 章: エドムへの裁きは、「諸国民」に下される裁きの典型
第 36 章: イスラエルの物理的・霊的な回復[近・遠将来]。
第 37 章: 近い将来の解放のためのパラダイムとしてのメシアの復活と治世
第 38-39 章:獣の侵攻とハルマゲドンでの敗北という預言による励まし
第 40-48 章:千年王国時代の神殿と体制は、バビロン捕囚後の出来事と並行している。

ダニエル: ダニエル書は、よく知られているように、艱難期の出来事の経過について詳細な情報を含んでいます。特に 11 章は、この研究の第 4 部で詳細に扱われます。しかし、ここでは、概観として、次のような考察がなされています。

第 2 章: 像: 復活したローマとローマで頂点に達する世界史の預言

第 7 章:四頭の獣:ローマと復活したローマで頂点に達する世界史の預言
第 8 章: 雄羊と山羊: 反キリストの予型であるアンティオコスを頂点とするヘレニズムの歴史
第 9 章: 70「週」:艱難期で頂点に達するイスラエルの未来についての預言
第 11 章: アンチキリストの予型であるアンティオコスを頂点とするアレクサンダーの後継者たちの預言
第 12 章: 大艱難期と復活

ホセア:
第 14 章:将来の千年王国時代の回復と祝福の約束による励まし

ヨエル:
第 1-2 章:終末の侵略の象徴であるイナゴ
第 3 章:「主の日」、ハルマゲドンとそれに続く千年王国時代の祝福

アモス:
第 1-2 章:国々に対する預言:近い将来と遠い将来への適用(イザヤ 14-21 章参照)
第 5 章:現実に目を開くための「主の日」。神は正義の裁きを行われる

Ⅳ. 艱難期の歴史に関する聖書の情報源

第 9 章:メシアの励ましと将来の千年王国時代の祝福

オバデヤ:
第 1 章:「諸国」の典型としてのエドム、「主の日」と来たるべき王国

ミカ:
第 1-3 章:終末の日を象徴する裁きが下る寸前の国の特徴
第 4 章: メシアの千年王国とハルマゲドンは、神の救済の対型
第 5 章:メシアの初臨と再臨、獣の連合国としてのアッシリア
第 6 章: 裁きの前の国民への咎め
第 7 章:艱難期に続く、将来の栄光とイスラエルの回復

ハバクク:
第 1-3 章:獣の終末の侵略の象徴であるバビロン侵攻

ゼパニヤ:
第 1 章:未来の「主の日」を当時の警告として採用。
第 2 章: 国々に対する預言:近い将来と遠い将来への適用(イザヤ書 14-21 章参照]
第 3 章:[近い将来と遠い将来の]艱難[期]と残りの者達の回復

ハガイ:
第 1-2 章:未来の出来事の例による神殿再建の促し

ゼカリヤ:
第 1 章: 四人の職人:イスラエルを滅ぼした 4 人の破壊者 [#4＝ローマ-新ローマ]
第 2 章: 千年王国エルサレムの測量、バビロン脱出の命令、再臨
第 3 章: 祭司ヨシュアは再臨まで生き残る残る者たちの象徴
第 4 章:モーセとエリヤの警告の働きとメシヤ[黄金の燭台]
第 5 章前半:巻物:メシア王国で根絶やしにされる無法状態
第 5 章後半:壺:抑制されていた不法状態が終末のバビロンにおいて解かれ、見られるようになる
第 6 章: 来たる祭司王の象徴であるヨシュアの王位、神の裁きを表す 4 台の戦車
第 7 章: 終末に見られる人々の振舞いに類似した当時の状況についての警告
第 8 章:千年王国時代の将来のエルサレムへの祝福による当時への励まし
第 9 章:将来の国々への裁きとメシアの再臨による当時への励まし
第 10 章: イスラエルの反キリストとの戦いを主が支えるという当時への励まし
第 11 章:当時の背教に対して、将来の「偽予言者」についての類似例を使っての警告
第 12 章:ハルマゲドンにおける主の指揮による当時への励まし

第 13 章: イスラエルの将来の悔い改めと浄化による当時への励まし
第 14 章: メシアの再臨とその支配による当時への励まし

マラキ:
第 3 章:証人(＜バプテスマの＞ヨハネ[初臨]-モーセとエリヤ[再臨])、最後の清め
第 4 章:「主の日」、証し人(エリヤ[ヨハネ]); イスラエルの悔い改め

b. 新約聖書の書（黙示録以外）

新約聖書における終末論的意義のある箇所は、旧約聖書の預言書に比べて、多くのクリスチャンにとって身近であると同時に、やや広範囲に分散しており、しばしば個々の節という形で現れています。終末に関する内容が特に集中している章は以下の通りです(ただし、必ずしもこれに限定されるものではありません)。

マタイ 17 章(マルコ 9 章; ルカ 9 章):変容:再臨の予言

マタイ 24-25 章(マコ 13 章、ルカ 21 章):
時代の終わり (マタイ 24 章 1-35 節): 信者のための艱

IV. 艱難期の歴史に関する聖書の情報源

難期の概要
未知の日、未知の時(マタイ 24 章 36-51 節):不信仰に陥らないようにという警告
おとめのたとえ(マタイ 25 章 1-13 節):大背教の期間中に堕落する者たち
タラントのたとえ(マタイ 25 章 14-30 節):言葉ではなく、行いに基づく最後の審判
羊と山羊(マタイ 25 章 31-46 節):言葉ではなく、行いに基づく最後の審判。

第一コリント 15 章: 復活

第二コリント 5 章: 復活

第一テサロニケ 4-5 章:再臨、復活、「主の日」

第二テサロニケ 1 章:ハルマゲドン

第二テサロニケ 2 章:大背教と反キリスト

第一テモテ 4 章:大背教、来るべき反キリスト教の宗教の本質的な教え

第二テモテ 3 章:大背教、獣の宗教指導者の特徴

第二ペテロ 2 章：大背教、偽教師とその最終的な裁き

第二ペテロ 3 章：「主の日」

ユダ：大背教、偽教師とその方法

（七部構成のこのシリーズの研究の骨組みとなっている黙示録は除く）上記の調査の目的は、これらの＜黙示録で取り上げられることになっている＞重要な出来事の前に、主が私たちのために親切に説明してくださっておられることを概観することでした：

> わたしは終りの事を初めから告げ、まだなされない事を昔から告げて言う、『わたしの計りごとは必ず成り、わが目的をことごとくなし遂げる』と。（イザヤ46章10節）

3. **黙示録**

『黙示録』は聖書の最後の書物であるばかりでなく、明らかに神の霊感を受けて、紀元 64～68 年頃に使徒ヨハネによって書

かれた最後の書でもあります[37]。

さらに、私たちの研究にとって非常に重要なことは、旧約聖書の預言書において研究してきた解釈を当てはめてみるなら、黙示録は艱難期とそれに続く出来事を、明らかに時系列順に説明してくれています。このように、黙示録で未来の出来事が順を追って説明されていることは、艱難期の歴史を理解し、説明するのに非常に有効です。また、これは父なる神から御子と御子の教会への贈り物であり、最も切実に必要としている時に彼らを助けるため意図されたものなのです。さらに、黙示録がなければ、聖書の他の部分にあるさまざまな預言をまとめて、首尾一貫した理解しやすいものにするのは、ただ骨折りに終わってしまいます。黙示録が聖書の中で最も難解な書物のひとつとされて＜敬遠されている＞のは、皮肉なことです。なぜなら、黙示録の目的の一つは、聖書の預言が関連する将来の歴史の流れを理解するための基礎となることだからです。この重要な書物を「説明する」（あるいは「脇に押しやられてきた」）ために長年にわたって提唱されてきた多くの誤った理論、例えば、（この書物を象徴的意味だけに還元してしまう）無千年王国説＜*amillennialism*＞や（この書物を過去の出来事の歴史的解

---

[37] ヨハネの黙示録が書かれたのは、一般に受け入れられている見解に反して、ネロ帝の治世の終わり頃です。ネロは、ヨハネが書いた時点（黙示録 17 章 10 節）で〝今いる〟第六の王であり、ユリオ＝クラウディア朝の最後の皇帝であり、遠い将来には「第七の王」（反キリスト）が継承することになります。

説書としてのみ扱う）歴史主義＜*historicism*＞などについて述べている時間的余裕はありません（本質的価値もないでしょう）。このような説は、霊感の教義を低く見ることから必然的に生じています。というのは、黙示録の中にあるのは、正典の他のすべての霊感による書物と同様に、正確かつ完全な神の言葉であるという事実を理解し、受け入れることができていないのです。つまり、黙示録は、聖書の中で最も完全で、最も濃縮された艱難期の描写がなされているもので、しかも、ほとんど単純で時系列的に述べられているということです。

Ｖ. イエス・キリストの黙示 黙示録１章 1-20 節

黙示録１章 1～2 節:

> イエス・キリストの黙示。この黙示は、神が、すぐにも起るべきことをその（すなわち、キリストの）僕たちに示すためキリストに与え、そして、キリストが、御使をつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである。ヨハネは、[この]神の言とイエス・キリストのあかしと、すなわち、自分（すなわち、ヨハネ）が見たすべてのことをあかしした。

イエス・キリストの啓示： 黙示録の最初の文（すなわち 1-2 節）は、この本の重要性、範囲、目的を集中的かつ劇的な形で要約しています。それは、キリストのため、父から、ヨハネを通して、信者に、将来の出来事に関する重要な情報をキリストの教会に与えるためです。何よりもまず、この本はメシアご自身、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストを明らかにするものです。「黙示」という言葉は、（パートⅠ.2.c で見たように、その言葉の意味は「覆いを取り除く」で）ギリシャ語の「アポカリプシス」（ἀπ ο κάλ υ φ ι ς）のラテン語版で、英語の「アポカリプス」の語源となっています。その見える形での「覆いが取り除けられる」ことは、全世界の王として崇められ、栄光を受けたメシアに関する出来事で、メシアの再臨まで完全には実現しません

が、「黙示録」には（および聖書の他の箇所にも関連する箇所に）＜再臨前の＞先ぶれとなる出来事によって、予告されることが記されています。したがって、黙示録そのものが「黙示（先ぶれの顕れ）」であり、単に神からの直接の真理（これはすべての聖書に当てはまります）であるだけではなく、特に主の再臨に先立つ出来事とそれに伴う出来事について、主に忠実に従う私たちに、来たるべき歴史の重要な予告を与えているのです。この最初の言葉が示すのは、終末の時代について議論する際に、いくら強調してもし過ぎることのない事実です。イエス・キリストは人類史における神の計画の始まりであり、終わりであり、罪の問題の解決者であり、神のすべての敵をその足下に置く支配者であり、その最後に始末されるものは死の災いそのものです。

神の僕たちに示すために： この言葉は、キリストの教会に決定的に重要な情報を提供するという、この本の目的を表しています。すべての信者、特に「世の終わりに臨んでいる」（第一コリント 10 章 11 節）世代にとって、神ご自身が私たちのために明確に概説しておられる将来の出来事の知識は、「知っていてよかった」だけではなく、絶対「知る必要のある」情報です。艱難期は、忠実な人々の信仰が猛烈に試される期間となり、多くの人がつまずき、多くの人が倒れるほどになります（すなわち、このシリーズの第 3 部 A で取り上げる恐ろしい出来事である「大背教」です）。また、人類の歴史が目撃したことのない、最も激

しく広範囲な信者への迫害の時代となるでしょう（すなわち、このシリーズの第 4 部で取り上げる「大迫害」）。このような困難な時代の詳細を、主が前もって私たちと共有することを選ばれたのは、私たちの主の計り知れない憐れみと恵みの大きさによるものです。さらに、そうされた主の目的のかなりの部分は、私たちが来たるべきものに対して、物質的な準備ではなく、霊的な準備によって、地下室に物資をため込むのではなく、心の中に主の真実を蓄積し、主にますます近づくことによって、準備することであることは確かです（詩篇 118 篇 6-14 節,121 篇 1-2 節; イザヤ 40 章 29-31 節;マタイ 6 章 25-34 節; ローマ 8 章 31 節; ヘブル 13 章 5-6 節）。

すぐにも起こるべきこと： 終わりの時の出来事、すなわち、来たる終末の歴史は、人類の歴史を終わらせる神の計画の本質的な部分を構成し、すべてのものをイエス・キリストに帰せしめるものです(エペソ 1 章 10 節)。これまでのシリーズ（「サタンの反乱」、特にその第5部）および上記（セクション II）で見てきたように、艱難期は人類史の最初の六千年の期間に対する最終の裁きであり、復活と千年王国を体現する回復と置き換えが行われる前に「必ず行われる」裁きです。このように、艱難期は、キリストの再臨による復活の新しい命と、キリストの千年王国時代の地球の再生に先立つ、痛みを伴う不可欠な「産みの苦しみ」（マタイ 24 章 8 節参照）の期間なのです。主はまず、人にも天使にも、人の心が全く罪深いこと、そして今の世界を支配し

ている悪魔の心にある全く意図的な悪を、全世界の人々に明らかにされるからです。現在、世界はかなり神の支配と抑制の下にありますが、来たる艱難期には、前例のない「自由」を体験することになり、悪魔と悪魔に味方するすべての者（人間または天使）の恐ろしい行動の結末の世界は、神の抑制の手から大きく解かれた故であることを疑う余地はなくなることでしょう。この傾向の重要な部分は、主のために、主に忠実であり続ける選択をした人々に対する前例のない迫害です。この出来事を私たちは「大迫害」と呼んでいますが、その結果、主の子供たちのために主からの大規模な神の裁きの報復がなされ、ハルマゲドンの戦いで頂点に達するでしょう（黙示録 6 章 10 節，16 章 5-6 節を参照）。最後に、この「起こるべき」恐ろしい出来事は、その後に続く千年王国（私たちの主イエス・キリスト、すなわち神の御子御自身の支配下にある完全な霊的・物質的平和の世界）の素晴らしさとは全く対照的なものとなるのです。

この「すぐにも起こる」と訳された言葉（ギリシャ語：en tachei, ἐν τάχει）は、しばしば考えられているように、終末が差し迫っていることに言及しているのではありません（この原則は他の箇所でも説かれています：3 節を参照）。むしろ、この副詞的表現は艱難期の決定的な重要な特徴に注意を促しています。それは、すべての信者が注意を払うべきことですが、艱難期の恐ろしい、全く信じられないような激変は、その規模の大きさだけでなく、それらが立て続けに起こるために真の信者の信仰

を厳しく試すことになります。現代においても、またこれまでの人類の歴史においても、個人的・集団的な悲劇はしばしば起こってきました。第二次世界大戦という前代未聞の出来事を見るだけでも、私たちの世界が、人間の苦しみという途方もなく困難な時期を経験してきたことが理解できるでしょう。しかし、大艱難期では、人類は悲劇に悲劇を、裁きに裁きを、迫害に迫害を次々と経験することになり、過去に起きたどんな出来事も適切な比較対象にはならないほど、迅速かつ絶え間なく続くことになります。その結果、この人類史上最も困難な時期を耐え忍ぶよう求められた信者は、（普通の生活の中でしばしば与えられるような）一息つく間を期待することはできません。なぜなら、艱難期は、これから起こる比類のない出来事の連続的な打撃が次々と起こり、その強さも次第に増していくからです。

災いに災いを重ねることほど耐え難いことはないというのは、聖書で検証された有名な原則です（ヨブの経験を参照; ピリピ 2 章 27 節も参照）。艱難期は、出来事の恐ろしさだけでなく、その急速さと激しさは、十分な準備がない限り、強い信者でさえ「気絶」させるに十分で、その期間の特徴であるプレッシャーに満ちた出来事が連続するので、精神的ショックから正常に回復する可能性はなくなるでしょう。要するに、これから起こる大艱難には「息抜き」がなく、一つの出来事に対処するのではなく、その性質と強さにおいて前例のない恐ろしい出来事の連続に直面することになるのです。しかし、私たちの神は、この最も困

難な時代にあっても、私たちのすべての必要を満たすのにこの上なく十分な方です（詩篇 46 篇）。しかし、このような特殊な状況下では、その大きな試練の時に対する適切な霊的準備が、信仰が成長し、保たれるために絶対不可欠であることは、はじめから明らかなことです。艱難期は、圧力や災害に対処するための通常の世俗的な対応策が全く有効でないことが分かる時代だからです。この前例のない襲撃に耐えられるのは、主に対する堅固で深く根差した信仰だけです。この事実は、その困難な時期を特徴づける大背教、すなわち主から（したがって救いから）離れるという現象を少なからず説明するものでもあります。これは、来たる艱難期の本質を垣間見させてくれる最初の機会であり、その中で苦しむよう求められた人々が、事前のいかなる霊的備えも無駄にはならなかったことがわかる最初の徴（しるし）ともなるのです。

＜「伝えられた」 口語訳**＞その上に御自分の権威の印が押された：** ギリシャ語の「*semaino* セマイノ」とは、文字通り「印やマークを押された」という意味で、艱難期に主をあからさまに拒絶する者が受ける獣の刻印（黙示録 13 章 16-18 節）とは対照的に、神のしもべに与えられる神の印（黙示録 7 章 3-4 節）を予示しているのです。この権威の印は、主の個人的な天使の代理人（すなわち「主の天使」、おそらくガブリエル; ダニエル 8 章 16 節, 9 章 21 節; ルカ 1 章 11 節, 1 章 19 節, 1 章 26 節, 2 章 9 節）を介してヨハネに書が伝達されることによってもた

らされます。この箇所で明らかにされている命令系統は重要なことです。御子がこの書物を受け取ります。それは単なる情報ではなく、父なる神の命令によって（十字架での御子の勝利を認めて）行われる出来事を概説した権威ある**命令書**です。御子はそのメッセージと命令を、天使の最高の補佐官を通して、生き残った唯一の使徒であるヨハネに送ります。そしてヨハネは、自分が書いた言葉が本当に与えられた報告／ビジョンであることを「証し」します。このように、この聖句では、権威の順位が明確に示されており、『黙示録』が新約聖書の他のどの本よりも正確かつ明確に神の言葉であると示されていることがよくわかります。実際、これほどまでに神の権威が強調されているものはないでしょう。この記述から、『黙示録』に含まれる情報は、**神によって**重要かつ不可欠なものとして受け取られるべきことを意味していると結論づけるしかありません。この書の後半で明らかになるように、私たちはここで「封印」の考えを大文字の「S」＜Seal＝封印の頭文字「S」を指すと同時に、神の御霊 Spirit=The Holy Spirit の頭文字「S」に掛けています＞で理解するように意図されています（黙示録 1 章 4 節, 1 章 10 節, 2 章 7 節, 2 章 11 節, 3 章 1 節, 6 章 1 節～, 7 章 3-4 節; 第二コリント 1 章 22 節; エペソ 1 章 13 節, 4 章 30 節 参照）。神の究極的な封印は聖霊であり、三位一体の一位格で霊感の働きを力づける責任があるからです（第二ペテロ 1 章 20-21 節; 第二サムエル 23 章 2 節; 使徒行伝 1 章 16 節; 第一テモテ 3 章 16 節; 第一ペテロ 1 章 11 節を参照）。黙示録の終わりには、このメッセージの改

変を禁じる厳しい警告がなされています(黙示録 22 章 18-19 節)。この本を神ご自身の権威で飾り、普遍教会全体、特に「世の終わりに臨んでいる」(第一コリント 10 章 11 節; ローマ 13 章 11-14 節参照)私たちの世代にとって、このメッセージの重要性を強調するには、序文として他に何を求めることができたでしょう？

神の言とイエス・キリストのあかし：使徒ヨハネの謙遜さはこの記述に表れており、全く適切です。なぜなら、これらの言葉は彼自身のスタイルで書き留められたものですが、メッセージそのものと彼の言葉が含む内容は、神から直接来たもので、神の霊が霊感を受けた預言者に指示を与えたので、その結果は主が伝えたかった正確なメッセージとなりました。つまり、私たちの主が伝えたかったメッセージです(すなわち、主の「証言」あるいは「厳粛に証しされた真理のメッセージ」)。これこそ真の聖書の「霊感」の本質であり、人間の意志によるものではなく、神の意志によるものであり、神の要素を含んだ、混乱した、あるいはやや不完全な人間のメッセージではなく、使徒ペテロが自身の書簡の一つではっきりと述べているように、人間に理解できる形に設定された完全な神のメッセージです。[38]

---

[38] この問題についての詳細は、「聖書を読もう: カルトからの保護」をご覧ください: カルトからの保護

わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。（マタイ17章1-8節参照）こうして、（私が自分自身の目で目撃した以上に）預言の言葉(すなわち聖書)は、わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、(キリストが再臨して)あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに（詩篇119篇105節参照）輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。**聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである。**（第二ペテロ1章16-21節）

最後に、黙示録の制作におけるヨハネの預言者的役割が、新約聖書の他のどの本よりも明確にされていることも見逃すことはできません。このことは、ヨハネの体験と旧約聖書の著名な預言者、特にエゼキエルの体験との間に多くの顕著な類似点

があることからも明らかです。重要な類似点としては、ヨハネが見た、ケルブ、海、御座と共にある主ご自身の姿（黙示録 4 章とエゼキエル 1-2 章）、主が預言者に直接、個人的に語りかけ、委託したこと（黙示録 1 章 17-20 節とエゼキエル 2 章 1 節）、御霊が預言者を直接支配されたこと（黙示録 1 章 10 節,4 章 2 節と、エゼキエル 2 章 2 節）、巻物を食べる様子（黙示録 10 章 9-10 節とエゼキエル 2 章 8 節～）、神のしもべの封印（黙示録 7 章 3-4 節とエゼキエル 9 章 4 節）、警告のテーマ（黙示録 1 章 3 節，22 章 1-20 節と エゼキエル 2 章 3 節～）など、注目すべき類似点が数多くあります。ヨハネとエゼキエルの見たものや体験が似ているのは、ヨハネがエゼキエルから借用したのではなく、二人が同じ天の現実を見て、同じ御霊によってそれを書くように指示されたからです。ヨハネに与えられた個人的な預言的体験の詳細は、私たちがこの黙示録とそこに含まれる本質的な情報をどれほど真剣に受け止めるべきかを示すものです。私たちの主が、全教会が大艱難期の出来事の描写を、直接神からのものであると知るということが重要だと判断されたのは明らかです。ですから、私たちはこれらの警告を無視したり、軽視したりすると、大変なことになるのです（次の聖句が十分に明らかにしているとおりです）。

ヨハネの黙示録 1 章 3 節

この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、

> その中に書かれていることを守る者[自分達の心に留める者]たちとは、さいわいである。[なぜならこれらの事柄が起こる]時が近づいているからである。（黙示録 1章3節）

朗読する者： 真の幸福は、（私たちの人生に対する神の計画における霊的成長と進歩のための唯一の確実な基礎である）神の言葉を読み、耳を傾けることから得られます。[39] これはすべての聖典に言えることで、この節が断言しているように、特に黙示録に当てはまります（したがって、他の聖典よりも重要性が低いと判断するのは確実に誤りです）。使徒ヨハネがこの言葉を書いた当時（一世紀半ば）、「書物」（実際にはパピルスの巻物で、一つ一つ丹念に複製しなければなりませんでした）は非常に高価で、一般人には到底手の届かない話であったでしょう。しかし、現代に生きる私たちは、聖典の翻訳を手に入れるという、この上なく恵まれた財産を、当たり前のこととして受け止めてしまっています。聖書の複製には膨大な費用と困難が伴うため、何世紀もの間、完全な聖書を所有できるのは大規模な会衆に限られていました。そのため、ヨハネの時代以降の教会の礼拝では、聖書の朗読に多くの時間が割かれたのです（それが一般のキリスト教徒が聖書を聞くことができる唯一の方法だったため）。そのため、朗読された内容を「思いにとどめておく/保持す

---

[39] 特集「聖書を読もう: カルトからの保護」を参照

る」ことが重要であり、上記の聖句では、黙示録の朗読を聞く人たちに、これらのことを心に留めるように勧めていることから、この書物とその内容がいかに重要であるかが分かります。

この預言の言葉： 黙示録は、公式には「預言書」と呼ばれ、聖書として知られる神の聖典の一部として疑いもなく検証されています。さらに、預言という言葉のギリシャ語の語源プロフェテイヤ（π ρ ο φ η τ ε ί α）から、預言は正しく神ご自身からの予告と予言の両方です（上に引用した第二ペテロ１章 16-21 節を参照）。この預言は「イエス・キリストの黙示」であり、文字通りイエス・キリストと来たるべき王としての彼の将来の姿を「顕わにする」ものであることを思い出すのは重要なことです。したがって、私たちは、黙示録に書かれている未来の出来事に関する情報を、今ここで理解することを保証するために、多大な努力が払われてきたと断言することができます。なぜなら、それは両方の意味で「預言」であり、つまり、予言であり、予告であるからです。このことは、将来の出来事に対処するためのガイドであると同時に、適切な霊的準備をするための個人的な動機付けの源となるものです。先に述べたように（セクション Ｉ の １ 項）、たとえ私たちが個人的に大艱難に耐えるように召されていなくても、この書物に触発されて行う霊的準備は、すべての信者が遅かれ早かれ直面しなければならない個人的艱難に対しても貴重なものとなります。そして、万一、私たちが大艱難の中に身を置くことになれば、この聖書の最後の書物に書かれている内

容を熟知していることが絶対条件となります。最後に、この「読む」ことは、通常、聖句の「説明」とも関連していたことに注意すべきです（現代のキリスト教では、教会礼拝に参加する本来の意義は、残念ながら大きく失われています：ルカ 4 章 16-30 節のユダヤ人の習慣を参照）。したがって、上記 3 節の祝福は、聖書の未来の歴史、終わりの時代の出来事の青写真として黙示録を翻訳、解釈している私たちがまさに目指しているものなのです。

時が近づいているからである：黙示録はその最も本質的なレベルにおいて、イエス・キリストの「黙示」について書かれているので、ここで言われている時の近さとは、何よりもまず、私たちの主の再臨が差し迫っていることなのです。この世界を変える出来事の前に、七年間の艱難の出来事があるので、この聖句に書かれている「近づいている」は、必然的にこれらの出来事にも適用されます（これは、私たちの現在の多くの研究の焦点です）。[40] この「間近」の原則、すなわち艱難はいつでも始まり得るという原則は、黙示録のすべての記述に細心の注意を払う理由として、ここで特に与えられています。黙示録の至る所で、この原則が繰り返し言及されているので（例えば、黙示録 1 章 3

[40] 実際、預言された艱難の出来事がまだ終わっていないにもかかわらず、再臨が「近い」と主張するのは、主ご自身が予言された、来るべき「反キリスト」の特徴的な教義です（ルカ 21 章 8 節）。

節, 3 章 11 節, 22 章 7 節, 22 章 12 節, 22 章 20 節;以下も参照してください:マタイ 3 章 2 節, 4 章 17 節; ローマ 13 章 11-12 節, 第一コリント 7 章 29 節; ピリピ 4 章 5 節; ヘブル 10 章 25 節; ヤコブ 5 章 8 節; 第一ペテロ 4 章 7 節;第一ヨハネ 2 章 18 節)、私たちが終末をこのように理解すること、つまり歴史の最終サイクルがいつでも始まり得ると理解するように意図されていることは疑いようもありません。このように、再臨(とそれに先立つ艱難期)が差し迫っているという原則は、霊的準備を促すものです。黙示録を何気なく読んでいる人でも、十分な霊的備えをしないで艱難期がもたらす絶え間ない破滅に直面することになるのは危険であることに気付くでしょう。

この点は、過去に多くの人がつまずいた点です。なぜなら、使徒ヨハネが神からの霊感を受けてこの言葉を書いてから、何世紀も経っているからです。それなのに、どうして当時、これらの出来事が「近い」と考えられたのでしょうか。実は、私たちはすでに、神の目には千年の月日も一日のように見えるという原則を詳しく説明しました(詩篇 90 篇 4 節, 第二ペテロ 3 章 3-10 節、『サタンの反乱』第 5 部、II.7 節を参照)。この原則を抜きにしても、ここに矛盾はありません。終わりの時が差し迫っているということは、むしろ、神は(主が十字架で勝利されたので)これらの出来事をいつでも起こす権利があり、それゆえ、私たち神の子どもはこれらの出来事にいつでも備えていなければならない、ということです。もし神がその比類なき恵みによって、艱難期の

到来を遅らせ、その間に無数の信者を救いに導いたのであれば、それは疑う理由にはならなく、喜ぶべきことです。全世界のために捧げられた主の有効な犠牲は、来るべき栄光の未来への扉を開きました。ですから、父なる神は、いつでも（紀元 33 年以来そうであったように）歴史の最終章を始める、あるいは、イエス・キリストへの信仰によって定められたすべての人々が救われるまで終わりの時の開始を遅らせるという神の権利を完全に有しておられるのです。私たちがその詳細を知ることができない以上、（熱心な霊的準備への献身とともに）差し迫った原則を受け入れ、準備することが、ここでも、また黙示録の他の箇所でも表現されている時の「近さ」に対する適切な対応であり、これまでもそうでした。私たちは、最終的にそうなるかどうかにかかわらず、艱難期を経験することを予期すべきです。それが霊的に安全であるための唯一の方法です。

しかも、何世紀にもわたってこの言葉を読んだ多くの読者は、実際に深刻で激しい艱難を経験しました（例えば、ローマ帝国、宗教改革期のヨーロッパ、共産主義諸国での信者の殉教など、特に厳しい迫害の例を三つ挙げることができます）。そして、私たちがしばしば述べてきたように、真にイエス・キリストに従おうとする者は、この世で「個人的な苦難」に遭うことになります [41]。したがって、この節に具現化されている霊的備えの要請は、そ

---

[41] この脚注 1 を参照

れを心から聞き入れた者にとって決して無駄なものではなかったのです。私たちはまた、人類の歴史に対する神の御計画が＜七つの＞千年の期間が続く連続した日として進行していることを見ました（サタンの反乱シリーズ第５部）。

この図式は、艱難の出来事の開始を、現在の私たちから見てごく近い将来に位置づけるものです。歴史の創造者であり監督者である神が、この図式を自由に変更することは、神の特権内にあります（時間を長くすることも短くすることもできます：エゼキエル 12 章 26-28 節）。しかし、神の子である私たちは、「主の日が近づいているのを見て」（ヘブル 10 章 25 節）、今まで以上に何が起こってもいいように霊的に準備するように努力することが求められています。

> 愛と善行とを励むように互に努め、ある人たちがいつもしているように、（ある人たちが習慣として行っているように）集会をやめることはしないで互に励まし、かの日（主の日）が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか。（ヘブル 10章24-25節）

黙示録 1:4-6:

> ヨハネから[小]アジヤにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、やがてきたるべきかた(すなわち、父)から、また、その御座の前にある七つの霊（すなわ

ち、聖霊）から、また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者、地上の諸王の支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、わたしたちを、その父なる神のために、御国の民とし、祭司として下さったかたに、世々限りなく栄光と権力とがあるように、アァメン。

ヨハネ：ヨハネは挨拶を、自分自身を特定することから始めています。彼は使徒ヨハネであり、「イエスが愛され」（ヨハネ 20 章 2 節，21 章 7 節，21 章 20 節）、十字架上で母マリアの世話を任され（ヨハネ 19 章 27 節）、最後の使徒（ヨハネ 21 章 22-24 節参照）、聖書の最後のメッセージを伝えるためにここに呼ばれた人で、それは実に大変な名誉です。

七つの教会： これは、エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアの七つの教会のことで、すべて小アジア（現在のトルコ）にあり、ヨハネの巡回伝道地域の一部であったようです。キリストの使徒として、ヨハネの教会建設の権限は必要な範囲に及んでいましたが、この時点では、ヨハネ個人の教えはこの七つの教会に集中していたようです（巡回伝道：ヨハネはこれらを巡回して訪問したことでしょう：第一サムエル記 7 章 16-17 節参照）。しかし、ヨハネは執筆当時、後述するように、ネロによって引き起こされた最初の帝

国全体に及ぶ迫害において、彼はパトモス島でローマ当局に拘束されていたようで（9 節）、使徒パウロは命を奪われ（第二テモテ 4 章 6-8 節）、おそらくペテロも同様です。

七つの教会そのものは、執筆当時（紀元 64～68 年頃）歴史的に実際に存在していた信徒の集まりです。また、この後の章では、教会時代の二千年のうち、年代的に連続する七つの期間を象徴的に表しています（詳しくは第二部で説明します）。黙示録が来たるべき教会時代全体（「七つの教会」という形）を対象としていることは、この点でも私たちにとってユニークな書物です。新約聖書の中で唯一、現代の私たち、つまり今の時代が終わる前の七番目の、そして最後の「教会」に向けて書かれたメッセージなのです。

恵みと平安とが、あなたがたにあるように：この祝福は、ヨハネの（今までの学びからすると、あなたや私を含む）聴衆のための心からの願いです[42]。それは、神の恵み（すなわち、神の完全な恩恵）と神の平安（すなわち、神の完全な慰め）の両方を私たちが持つようにとの願いです。この二つの要素は、父、子、聖霊である神との密接で、永続的で、成長する関係の結果

[42] 第一ペテロ 1 章 2 節と第二ペテロ 1 章 2 節を見るなら、祈願を表す助動詞があり、その完全な構文がわかります：「恵みと平和があなたがたに豊かにありますように」。

を語っています。恵みは、この望ましい関係を、すべてを与えてくださる神（特に霊的祝福を視野に入れて）の立場から捉え、平安は、あらゆる状況において私たちを守ってくださる神によって（最も重要なのは心において）安全に保たれている信者の立場から捉えているのです。神の恵みと神の平安は当然のものではなく、信仰者が神に近づくこと、キリスト者の霊的成長に比例して増えたり減ったりするので、「祝福」は願いという形で表現されています。ヨハネはここで、現在と未来の彼の監督下にあるすべての者のために、神の恩恵と神の保護を切に願っていますが、この願いが成就することは自分の手によるものではないことを（これが願いであることからも）認識しているのです。私たち一人ひとりのクリスチャンは、この願いが最大限の可能性を発揮するために、神との関係、すなわち霊的成長を人生の最優先事項とすることを決意しなければなりません。この祝福は「魔法」ではありません。私たちが受け取りうるすべての恵みと平安を受け取れるかどうかは、ヨハネや他の誰にも依存しませんし、私たちを祝福する神の能力と願いは、何ら制限されていないことを私たちは知っています。いや、もし制限されるとすれば、それは私たち自身、つまり神と神のことばを最優先して生きてこなかった私たち自身によるのです。

ヨハネはまた、この二重の祝福の源は三位一体の神であることを明確に示し、これから起こる出来事は、私たちの神が完全に支配していることを強調する形で述べています。恵みと平和、

私たちのものとなりうる恩恵と慰めは三位一体全体から来るものであり、悪魔の世界を御父が所有されることが差し迫っていること、悪魔の世界の御霊による抑制（黙示録 5 章 6 節；イザヤ 11 章 2 節参照）、そして悪魔の世界に対する御子の勝利と征服を強調するものなのです。このことは、私たちがよく考えるべき非常に重要な視点です。艱難期の恐ろしい出来事も、神への信仰さえあれば、神からすべての信者に直接与えられる豊かな恵みと平和を揺るがすことはできないからです。

最後に、この定型的な祈りの中で、ヨハネはしばしば同様の序文の祝福に含まれる一つの要素、すなわちあわれみを省略していることを指摘しておきます（第二ヨハネ 3 節; 第一テモテ 1 章 2 節; 第二テモテ 1 章 2 節 も参照）。あわれみは完全に聖であり義なる神と、罪深い人間が（キリストの血によって）和解することを可能にする神の賜物である点で、＜挨拶を兼ねた祈りからあわれみが省かれていることは＞重大なことです。黙示録は、（イエス・キリストとの関係を通して、神と和解をした）信者に宛てられたもので、歴史上かつてないほど悪魔の手中にある背教した世界に対する神の裁きを主に取り上げています。悪魔、反キリスト、偽預言者、そして神を傲慢に拒絶するすべての人々にとって、艱難期は、敵から徹底的に拒絶された神の寛容な慈悲がもはや論点ではなく、むしろ神の聖性と正義が論点となり、義の怒りが神の民を迫害する者に向けられる時代となるのです。

今いまし、昔いまし、やがてきたるべきかた：御父。このお方は「今おり、かつておられた」ということで、永遠性を語っています；御父は永遠に神です。神が「きたる」ということは、神のこの永遠が決して終わらないことを確証するだけではありません。それはまた、御父の到来を直接的に示す最初の記述でもあります。御父もまた時の終わりには、再び地に住まわれることになります。そうすれば、私たち御父の子供たちは、天ではなく、新しい地と新しいエルサレムで、御子と御霊と共に、悪魔の最初の反乱によって取り換えられていたすべてのものが置き換えられ、終わりは始まりに勝るようにさえなるのです（黙示録 21 章 22 節，22 章 3 節参照）。

七つの霊： 父の御座の前にいる七つの霊は、後の黙示録の例からも、聖書の他の箇所からも明らかなように、聖霊である神を指しています。（箴言 9 章 1 節；イザヤ 11 章 2 節；ゼカリヤ 3 章 9 節，4 章 2 節，4 章 10 節；ゼカリヤ 4 章 6 節；黙示録 3 章 1 節，4 章 5 節，5 章 6 節）。[43] 聖霊はもちろん分割されているわけではなく、ここでの七という数字は、おそらく完全と完成の意味を示唆しているものです。つまり、教会時代の七つの期間を通して、霊的成長を促進し、悪者を抑制する聖霊の完全な

---

[43] NIV 訳は、この箇所と他の黙示録の「七つの霊」の箇所を「七重の神の霊」と読み替えているが、これも同様の解釈を示唆しています。

働きが継続されるということです。聖霊がここではっきりと言い表されていないのは、父なる神の御計画における聖霊の役割と一致しています。ギリシャ語とヘブル語の「霊」または「風」という名前は、目に見えなくとも強力なものを示し、それが聖霊の働きの特徴です[44]。

イエス・キリストから： この書の黙示の対象である方として、私たちの主イエス・キリストは、この挨拶で言及された三位一体の最後のメンバー（位格）であると同時に、詳細かつ三重に記述されており、それぞれの記述は、神の御計画におけるこの神人独自の役割の理解を助けてくれます（それぞれは挨拶と同じ順序で三位のメンバーに相応している）。

1．忠実な証人： 父の代表として（例えば、メシアは、御父によって「油を注がれた者」という意味です；ヨハネ 4 章 34 節, 7 章 16 節, 8 章 26 節等を参照）、イエス・キリストは最初の到来において神の真理の完全な証人となり、他の全てよりも真実への忠実さを優先するという遺産を私たちに残してくださいました。

2.死者の中から最初に生まれた者：神−人はまた、聖霊に完全に応答してその生涯を送られた唯一の人間であり、聖霊の力

---

[44] 聖霊の働きについては、『聖書の基礎知識：聖霊神学』のパート 5 を参照。

によって朽ちない形に復活した最初の人です(ローマ 1 章 4 節: 第一ペテロ 3 章 18 章; ローマ 8 章 11 節を参照)。私たちの主はこのように、私たちの力ではなく神の力で活動するという模範を私たちに残し(ゼカリヤ 4 章 6 節; ローマ 8 章 14 節)、私たちの希望の確かさ、私たちが熱心に待ち望む将来の復活の現実を示してくださいました(ローマ 8 章 23-24 節, ヘブル 2 章 9 節, 第一ヨハネ 3 章 1-3 節)。

3.地上の王たちの諸王の支配者:この称号は、十字架での自己犠牲の勝利によって、世界の完全な支配権を勝ち取った人の子御自身の働きに注意を促しています(ルカ 10 章 18 節; ヨハネ 16 章 33 節, 19 章 30 節; コロサイ 2 章 15 節; 黙示録 5 章 5 節)。私たちの主イエス・キリストは、来世で彼と共に統治するという確かな望みのために、現世で謙遜に仕えることの模範を私たちに示されました(マタイ 20 章 25-28 節; ヨハネ 13 章 1-7 節; 第二コリント 8 章 9 節; ピリピ 2 章 5-8 節)。再臨はこの原則の成就を見ることであり、主のために生きることを選んだ私たちは、主の王国の支配権を共有することになります(ローマ 8 章 17 節; 第二テモテ 2 章 12 節; 黙示録 1 章 6 節, 2 章 26-27 節, 3 章 21 節)。

この黙示録の言葉を考えるとき、私たちの主であり救い主の啓示であることを思い出し、主が(御自分の名声や意見や経験ではなく)私たちのために示してくださった、父なる神の真理を

第一に考え、言動すべてにおいて忠実な証人となることの模範（御自身の評判や意見、経験にこだわらなかったこと）をよく思い出しましょう。また、主は（肉的な力や状況にこだわらず）、御自分が考え、話し、行うことすべてにおいて、聖霊の神の力と供給に完全に頼り、神の栄光のために謙虚に父なる神に仕えるという模範を示されたのです。主によく仕えるためには、これらの点において主のようにならなければなりません。つまり、主が神のために忠実に証し、神の力に（無私の心で）頼り、神に謙虚に仕えるという模範を真似ることを意味します。

> キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは[確かに]思わず、かえって、[イエスが持っておられた同等の神の地位を捨てて]おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、[彼の]死に至るまで、しかも[私たち全ての者のために]十字架の死に至るまで従順であられた。（ピリピ2章5-8節）

> あなたがたは、実に、そうするように[キリストの苦しみに与るように]と召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み

従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。(第一ペテロ2章21-23節)

わたしたちひとりびとりは、[真に]隣り人の徳を高めるために(すなわち、その人の霊的成長のために)その益を図って彼らを喜ばすべきである。キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかった。むしろ「あなたをそしる者のそしりが、わたしに降りかかった」と書いてあるとおりであった。(ローマ15章2-3節)

わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。(ヨハネ13章15節)

それからイエスは弟子たちに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、[まず]自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。(マタイ16章24節)

わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から

解放し…てくださった方：この句は、6 節で結ばれている神への賛美の始まりです。ヨハネは私たちのために、主イエス・キリストがご自分の血によって私たちを罪から解放し、十字架上で死を通して表されている私たちへの愛に応えて、私たちが主イエス・キリストに捧げたいと願うすべての賞賛を表現しているのです。賛美の対象（キリスト）と賛美そのもの（「栄光と力が永遠に」）の間に挟まれているのは、私たちの注意を引くべき親密な発言です：勝利を通して、私たちの主は、私たちを御父の「王国、すなわち祭司にしてくださいました」。[45]この本がイエス・キリストを信じる人のためのものであることをこれ以上明確に証明できないでしょう。なぜなら、それは彼（の来たるすべての栄光）の現れであり、私たちはその現れを共有し、彼の王権の不可欠な部分である、彼の祭司職を共有することになるからです。黙示録に描かれているように、これから起こる艱難を考えるとき、それが「誕生」、すなわち、私たちが完全で祝福されたパートナーとなる千年王国の栄光を伴う主の再臨に先行しなければならない産みの苦しみに過ぎないという事実を見失わないようにしなければならないのです。神に栄光がありますように！私たちが召された神の王国の栄光を分かち合うために、どんなことがあっても栄光の王にしっかりとしがみついていることがで

---

[45] これは出エジプト記 19:6 からの引用であり、ヨハネが御霊の導きの下、イスラエルに限定せず、教会全体に適用したものである。異邦人がキリストの花嫁としてイスラエルに組み入れられることについては、悪魔の反逆シリーズ第 5 部「裁き、回復、取り替え」の II.8 節を参照。

きますように(ローマ 8 章 17 節; 第二テモテ 2 章 12 節; 黙示録 1 章 6 節, 2 章 26-27 節, 3 章 21 節)。

ヨハネの黙示録 1 章 7 節

> 見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかり、アーメン。(黙示録1章7節　新改訳Ⅳ)

その方は雲とともに来られる： この聖句は、黙示録に記されている最後の艱難期の歴史的な働きの最終結果を予見させ、イエス・キリストの再臨(千年王国統治のため)の「黙示」の概要を示しています。ここで言及されている「雲」は黙示録 19 章 14 節の「**天の軍勢**」であり、主の誕生を告げたり主の再臨に同行する天使たち(ルカ 2 章 13 節:以下の節も参照:ダニエル 7 章 13 節; マタイ 24 章 30 節, 26 章 64 節; マルコ 13 章 26 節; 14 章 62 節; ルカ 21 章 27 節)だけでなく、主の花嫁、教会も(参照:黙示録 17 章 14 節: 黙示録 19 章 7-8 節と黙示録 19 章 14 節も参照)、一緒に「天の軍勢」となるのです。イエス・キリストの教会の全「**軍**」は「**その日**」に復活して招集され、栄光のうちにキリストと共に戻り、キリストの千年王国を共に治めるからです(第一テサロニケ 4 章 13-18 節;第一コリント 15 章 51-52 節を参照)。

すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも：私たちの主の劇的な再臨は、地上のすべての人が見ることができます。ゼカリヤが十字架の出来事を指して預言した、「**彼を突き刺した者たち**」という言葉を使って、主の民族であるイスラエルが特別に言及されています（ヨハネ 19 章 34-37 節とゼカリヤ 12 章 10 節を参照；詩編 22 篇 16 節も参照）。これは使徒パウロが説明したように、再臨の時に生き残っているユダヤ人が、そのメシアの再臨を目撃した時、瞬時に悔い改め、改心することを描写しています（ローマ 9 章-11 章）：初臨以来、アブラハムの子孫の大多数を特徴づけてきた「頑なさ」は、メシアの再臨によって瞬時に解消されるのです。艱難期において多くのユダヤ人が立ち返ること、十四万四千人の働き、キリストの再臨に伴う清めは、今後このシリーズで詳しく説明する必要がありますが、（黙示録の本文でも、私たちの学びも）ここでは省略します。このことに触れた目的は、前述のように、メシアの最終的勝利と、イスラエルの心が再び主に立ち帰るときの回復の過程が完了されることについて強調するためです（使徒行伝 3 章 21 節参照；エゼキエル 36 章 27 節，39 章 25-26 節；マラキ 4 章 6 節；マタイ 17 章 11 節；マルコ 9 章 12 節；使徒行伝 1 章 6 節 参照）[46]。

---

[46] キリストの教会におけるイスラエルと異邦人の結合については、サタンの反乱シリーズ第 5 部「裁き、回復、置き換え」の II.8 節の考察を参照してください。神のご計画における「回復」の具体的な問題については、同じ研究の IV 節を参照してください。

兄弟たちよ。あなたがたが（自分のことを買いかぶって）知者だと自負することのないために、この奥義を知らないでいてもらいたくない。一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が[神の家族に加わって]全部救われるに至る時までのことであって、こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のように書いてある、

「救う者がシオンからきて、ヤコブから不信心を追い払うであろう。そして、これが、彼らの罪を除き去る時に、彼らに対して立てるわたしの契約である」。

（ローマ 11章25-27節）

地のすべての部族は…悲しむ：ここで示された悲しみは、大部分が自分に向けたものです。（生きている信者の復活がこの出来事に先行するので）、栄光を受けたキリストが世界の生き残りの住民（すべて未信者）に見えるようになるとき(第一コリント 15 章 51-52 節; 第一テサロニケ 4 章 13-17 節)、 神に立ち返らなかった彼らの愚かさが痛いほど明らかになり、世界全体に激しい悲しみと後悔を引き起こします（ゼカリヤ 12 章 10-14 節）。この預言された＜人々の＞反応は、現在と未来の信者にとっ

て大きな励みとなるはずです。なぜなら、私たちの生活の基盤となっている信仰の真理を否定する人々（そして、そのために艱難期には全世界で私たちを迫害するようになる人々）が、**現世で**彼らの生き方の恐ろしい誤りを理解し、この点での私たちの正当性は最後の審判を待つことなく、明らかにされるからです。

また、再臨に対するこの反応は、主の驚くべき死とそれに先立つ超自然的な暗闇と地震を受けて「胸を打った」（ルカ 23 章 48 節）、十字架の場にいた人々の初臨に対する反応をそのまま引き継いでいることに注目すべきです。起こったこととその結果起こるかもしれないことに対する自己中心的な苦痛を超えて、世界全体はその「悲しみ」にもかかわらず、主に立ち返ることはなく、将来もまた、神の力がもっと劇的で超自然的に示されるにもかかわらず、艱難期にも主のもとに来ることを選ばず、栄光の帰還に際して不安な時期を過ごすことを繰り返す運命にあるのです。

黙示録１章８節

> 今いまし、昔いまし、やがてきたるべき者、全能者にして主なる神が仰せになる、「わたしはアルパであり、オメガである」。

この節は、御父がご自分の声で語っておられ、7 節で預言されたキリストの来臨の支配の正当性を立証する役目を果たしています。このように御父が御自身の声で語られることは、前例はありますが、稀で、他に御子が完全に御自分の権威によって行動していることを示そうとされる箇所において見られます。（例えば、詩編 110 篇）[47]。この声明によって、御父は他のあらゆる救いの方法を効果的に排除しています（ヨハネ 14 章 6 節参照）。8 節はいわば、それまでのすべての歴史が、御父の目から見て、信仰の対象として唯一受け入れられる御子という人物の中に集約されているという結論に、御父の印を押しているのです。黙示録は「キリストの啓示」であり、この御父の証言は、この書が、そこに記述されている御子の高貴な役割とともに、御父自身の権威を持っていることを保証するため、御父がその指輪の印章をもって封蝋に押印することと同じことを意味するのです。

8 節はまた、『黙示録』の内容である終末の時代についての議論にふさわしい形で、『黙示録』の序文と挨拶文の終わりを

---

[47] 旧約聖書における明白な例のほとんどは、実際には御子が御父を代弁しているのである。聖書の基礎知識第 1 部「神学：神の研究　第二項　三位一体」を参照；　キリストの初降臨の際にも、父なる神がキリストのミニストリーの正当性をあからさまに立証しています：　a)キリストのバプテスマ（マタイ 3 章 17 節；マルコ 1 章 11 節；ルカ 3 章 22 節）、b)変貌山（マタイ 17 章 5 節；マルコ 9 章 7 節；ルカ 9 章 35 節）、c)十字架につけられる前のキリストの祈り（ヨハネ 12 章 28 節）。

告げています。「来たるべきお方」という御父の称号をもって（黙示録 1 章 4 節; 4 章 8 節; 黙示録 21 章 22-23 節参照）、キリストの千年王国が終わり、新しく再生された地上に父なる神が降臨され、新しいエルサレムが到来して、人類の歴史が終わり、神が永遠に「すべてにおいてすべてとなられる（新改訳Ⅳ）」（第一コリント 15 章 28 節）永遠の国の始まりまで、私たちの視野を進めているのです。ですから、7 節と 8 節を共に読むと、メシアの再臨から永遠の始まりまでの歴史の最終章全体を包含し、艱難、また艱難期にもかかわらず、来たるものはすべて神の栄光と完全な方法で解決されることを思い起こさせます（これは、この祝福された結末の前に起こる七年間の抑圧と災害について考える際に保持すべき視点です）。

黙示録 1 章 9-11 節

> あなたがたの兄弟であり、共にイエスの苦難と御国と忍耐とにあずかっている、わたしヨハネは、神の言とイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。ところが、わたしは、主の日に御霊に感じた。そして、わたしのうしろの方で、ラッパのような大きな声がするのを聞いた。その声はこう言った、「あなたが見ていることを書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤにある七つの教会に送りなさい」。

（黙示録 1章9-11節）

共に...苦難にあずかっている兄弟：この偉大な人、キリストの使徒の謙遜さは、この自己記述の中に再び明確に表れています。彼は自分を偉大な者としてではなく、私たちの兄弟として、私たちの共通の試練（艱難）、共通の願い（キリストの王国での復活と栄光）、共通の必要（悪魔の世界で主イエス・キリストを信じる者として直面する運命であるどんなことにも、辛抱強く耐えること）を共にしている者として表しているのです。

パトモスという島： 先に述べたように、この幻とそれに続く記述は、ネロ皇帝のもとで帝国全体がキリスト教を迫害していた紀元 64 年から 68 年ごろになされた可能性が高いです。ヨハネはこの時、使徒パウロやペテロのようには処刑されず、伝承にもあるように、またこの記述にもあるように、（「苦難」と説明されていることから、「神の言葉とイエスのあかしのために」、つまりイエスについて教え、宣べ伝えたゆえに迫害され）、エーゲ海の小島パトモス島に流されました（この出来事は紀元 68 年のネロの死のずっと後であるということではなかったでしょう）。

御霊に感じた： 神はヨハネを、後に続く神の啓示を受けるために恍惚状態に置かれました。ここで使われている「御霊に感じ」という表現は、すべての信者に与えられた「御霊のうちに歩め」（ガラテヤ 5 章 16 節; 次の聖句も参照 ローマ 8 章 4 節; ガ

ラテヤ 5 章 25 節; エペソ 5 章 18 節）という命令とは慎重に区別されるべきです。[48]「わたしは御霊に感じ ″I came to be [in the Spirit]″ 」はギリシャ語で「起こる」または「～になる」という動詞の訳語です（γίγνομαι: gignomai）。しかし、「わたしは御霊に感じ」では、この出来事の受動的、進行的な性質、つまり、ヨハネが自分の意志とは全く関係なく、特別な霊的状態に入ったことがここで述べていることが全く伝わらないのです＜日本語新改訳では「**御霊に捕らえられ**」となっています＞。つまり、ヨハネは自分の意志とは無関係に、他の霊感された聖書の筆者たちの場合とよく似た、神によってもたらされた予言的な恍惚状態に陥ったことを描写しているのです。（民数記 12 章 6 節;

---

[48]「御霊に満たされて」という表現は、この恍惚とした預言者の状態や、同様の奇跡的な御霊の力づけに対しても用いられます（参照：ルカ 1 章 15 節, 1 章 41 節, 1 章 67 節; 使徒 2 章 4 節, 4 章 8 節, 4 章 31 節, 9 章 17 節, 13 章 9 節）。しかし、「御霊に満たされる」という表現は、しばしば誤訳されるエペソ 5 章 18 節のパウロの命令とは注意深く区別されるべきです。より適切な表現は、「御霊によって満たされ続けなさい」（すなわち、御霊の働きによってキリストにあって成長し続けなさい。）エペソ人への手紙の動詞は、上で言及したルカ・使徒行伝の箇所とは異なっており（pleroo 対 pimplemi）、ルカ・使徒行伝の箇所では主格（満ち足りること）が用いられているのに対し、エペソ人への手紙 5 章 18 節では前置詞 en が主格と共に用いられています。このような恍惚状態（一般的には預言者や教会創始の特異な時代にのみ許される）に入ることは、異言を語ることと同様に、今日も命じられてはいません。ペテロ・シリーズ#13 の議論を参照。聖霊が信者に与える導きについては、ペテロ・シリーズの#7, #14, #16, #18 参照。『聖書の基本』のパート 5 と 6A（それぞれ聖霊学と周辺神学）では、このトピックをさらに詳しく扱います。

エゼキエル 1 章 1 節, 1 章 3 節, 2 章 1 節, 8 章 3 節, 40 章 2 節; ダニエル 10 章 1-7 節; ミカ 1 章 1 節; ゼカリヤ 1 章 8 節, 4 章 1 節; 使徒行伝 10 章 10 節, 11 章 5 節, 22 章 17 節; 第二コリント 12 章 1-4 節; 第二ペテロ 1 章 20-21 節; 黙示録 4 章 2 節, 17 章 3 節, 21 章 10 節; 以下も参照イザヤ 6 章 1 節～; エレミヤ 1 章 5-19 節; ホセア 1 章 1-2 節; アモス 8 章 1 節, 9 章 1 節)。

七つの教会： 上記のように、小アジアの七つの教会は、伝統的にヨハネがパトモスに追放される前に定期的に行っていた、巡回伝道の主要な場所であると考えられています（おそらくそうだったでしょう）。しかし、イエス・キリストの使徒としてのヨハネの権威は、この七つの教会にとどまらず、当時の教会全体に及んでいたのです。さらに、私たちの主イエス・キリストとその栄光の再臨に関わる出来事についての黙示の賜物として、黙示録は（ここに挙げた七つの教会だけではなく）何世紀にもわたる教会全体の共通の遺産なのです。黙示録を受け取る者としてこのように特定されている上記の七つの教会は、その象徴的な機能を強く示しています。彼らは教会全体、つまり執筆当時に生きていた信者だけでなく、歴史を通してのキリストの体全体（この研究の第二部で詳細に取り上げます）を意味しているのです。

黙示録 1 章 12-16 節

そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声[の主(ぬし)]を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった。(黙示録1章12-16節)

見ようとしてふりむいた：ヨハネは、この恍惚とした預言する状態の中にあっても、人格と正常な視点を保っています。この点で、彼の体験は他の預言者、例えばイザヤやエゼキエルと同じです(特にイザヤ 6 章; エゼキエル 1-2 章も参照)。実際、ヨハネの体験と彼らの体験の類似性だけでなく、彼が示された内容の特殊性は、旧約聖書の預言者たちが記録するように与えられたものと最もよく似ています。これは、彼らが同じ現実、つまり私たちには見えない神の栄光を見たからであり、(聖書の真理を否定する多くの人々が言うように)決して「文学的表現の借用」によるものではないことに注意する必要があります。エゼキエルとヨハネの体験の類似性は特に顕著です。二人とも

亡命中（エゼキエル 1 章 1 節）、主の栄光（エゼキエル 1 章 26-28 節）、ケルビム（エゼキエル 1 章 5-21 節）、王座と海（エゼキエル 10 章 1 節; 1 章 22 節も参照）、与えられた「巻物を食べる」ように命じられる（エゼキエル 2 章 1 節）、その巻物を食べる（エゼキエル 2 章 8 節-3 章 3 節）、神の裁きを免れるために選民に印をつけること（エゼキエル 9 章 3-4 節）、神の裁きの道具として神の祭壇から火のついた炭を取り、まき散らせたこと（エゼキエル 10 章 1-6 節）などが描かれています。両書を知る人にとって、これは他の多くの類似点の一部であることがわかります。これは、上で見たように、驚くべきことではありません。エゼキエル書の大部分は、ヨハネが黙示録で直接預言するように与えられた出来事そのものを（時には予告としてであっても）描写することで占められています。

七つの金の燭台： 20 節で主ご自身がヨハネに語られたように、これらの燭台は七つの教会を表しています。古代世界では、リキニア *lychnia*（燭台）は私たちが「フロアランプ（床に立てて置く電気スタンド）」と呼んでいるものと同じで、油を燃やす「ともし火」（私たちの例えでは「電球」）を置いて、ともし火の光をより広く照らすための高い台でした（参照：マタイ 5 章 14-16 節）。この燭台には、今も燃えて光を放っているともし火が含まれていると理解することは、黙示録 4 章 5 節から明らかです。そして、これらの七つの教会が、個人的にも集団的にも教会の目的である光を放っていることに注意してください（マルコ 4 章 21 節;

ルカ 8 章 16 節，11 章 33 節；そしてヨハネ 8 章 12 節参照)。[49] (49)

> あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。(マタイ5章14-16節)

上記の箇所と燭台の文脈から、教会、そして個々の教会やクリスチャンの本来の仕事は、この暗い世界で神の光を放つことだと容易に推論できます。つまり、真理、世の光である私たちの主イエス・キリストの証人として行動し(ヨハネ 14 章 6 節参照；ヨハネ 1 章 4-9 節，8 章 12 節，9 章 5 節，12 章 46 節も参照)、すべての人の心を照らす福音の真理の光のために、利用できる場所と手段を提供するのに必要なすべてを行うこと(第二コリント 4 章 4-6 節参照)です。救われていない人々の救いのため(ヨハネ 12 章 46 節)、そしてキリストの体、すなわち全世界の教

---

[49] 善の象徴としての光については、サタンの反乱シリーズ第 2 部「創世記のギャップ」の II.2.b 節を参照のこと。

会を構成する私たちの仲間の信徒たちの教化のために、必要なすべての場所と手段を提供することです（第二ペテロ１章 19 節）。ですから、七つの数（聖書では七日と七つの霊が示す完全性と完成の数）の教会のグループが、このように強い象徴性を持って教会全体の目的を表すということは、私たちが上で示唆したことのもう一つの証拠です。すなわち、この七つの教会がイエス・キリストの二千年間の定められた歴史における、教会全体を表しているということです。なぜなら、私たちキリスト者は、まさにこのようにして、つまり、周りの暗い世界に神の光を輝かせることによって、個人的にも集団的にも、世の真の光（ヨハネ 8 章 12 節）の足跡に従うことを常に課せられ、その結果、私たちがますます熱心に、正確に、そして有効的に神の真実を反映しながら、より神に近くなるようにと求められているからです。

> わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出し（すなわち、汚れのないクリスチャンの証をし）ながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に（すなわち、よりキリストらしく）造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。（新共同訳第二コリント3章18節）

> [あなたのする]すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行いなさい。
> それは、あなたがたが、非難されるところのない

> 純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代のただ中にあって傷のない神の子どもとなり、
> 　いのちのことば（キリストとその福音）をしっかり握り[あなたの証]、彼らの間で世の**光として輝く**ためです。（新改訳Ⅳ　ピリピ2章14-16節前半）

人： この「人」とは、人の子、私たちの主イエス・キリストのことであり、この書物で与えられている啓示の主役です。[50] ヨハネは、この詳細を加える必要があると考えました。なぜなら、ここでの主の姿があまりにも圧倒的な印象を与えているので、この栄光ある方は、本物の人間であるにはあまりにも素晴らしいと容易に推測されそうだからです。しかし、イエスは神であるばかりでなく、人間でもあります。真の人間性を身につけなければ、私たちの代わりに死んで、私たちを罪から解放することはできなかったのです。ヨハネにとって驚くべきことは、このイエスの姿が、復活の前後に何度も見た、まだ栄光を帯びていないときの姿とあまりにも違っていることです（ヨハネ 20 章 20 節など）。彼が変

---

[50] ギリシャ語では「人の子 」であり、ヨハネが見たのは間違いなく本物の人間であった（天使や神の御告げ[人間の姿をした神の出現]とは違う）という事実を、ここでは（定冠詞なしで）言及しています。ですから、イエスが確かに人の子（すなわち、原型的で完全な真正の人間：マルコ 8 章 31 節）であることは事実ですが、ここで言われているのは、イエスは、その素晴らしい栄光を受けた状態でさえも、人間であることを私たちに確信させるためです（これは復活と栄光の日を待ち望む私たち自身にとって、非常に励みになります：ローマ 8 章 30 節）。

貌の山で見た栄光のキリストは、短い間（マタイ 17 章 2 節，マルコ 9 章 2-3 節，ルカ 9 章 29 節）だけでしたが、父の右に座しておられる栄光の救い主に対して畏敬の念を起こさせるための準備の場面だったのでしょう（詩編 110 篇 1 節，ローマ 8 章 34 節，エペソ 1 章 20-22 節，ピリピ 2 章 9 節，ヘブル 1 章 3 節，12 章 2 節，第一ペテロ 3 章 22 節）。この黙示録が書かれるまでは、主が天に昇られ、父の右に座られた後（ヨハネ 7 章 39 節，12 章 16 節参照）、栄光の全貌が明らかにされた状態での描写は、やや限られていました（変貌の山、ダマスカスへの道でのパウロの幻は顕著な例外です：マタイ 17 章 1-13 節，マルコ 9 章 2-13 節，ルカ 9 章 28-36 節，使徒行伝 9 章 3-9 節，22 章 6-11 節，26 章 13-18 節）。ここで、ヨハネは救い主の真の姿を見る（そして教会全体のために記録する）特権を得ています。救い主の地上での最初の使命は完全に成功裏に達成されたので、私たちの目からさらに栄光を隠す必要はありません（ピリピ 2 章 5-11 節，イザヤ 53 章 2 節 とヨハネ 7 章 39 節を参照してください）。

この主の姿は実に輝かしいものです-華麗な衣装をまとい、雪のように白い髪で威厳を保ち、目、顔、声などすべての身体的特徴を備え、人間性においてさえも主の神性を物語っているのです。そして、この箇所から明らかな、メシアの真に圧倒的なご性質は、（栄光を隠す隠れ蓑をまとわれて、初めて肉体をもって地上に来られた時でさえも：ピリピ 2 章 7-8 節）常に真実で

あったことを忘れてはなりません。メシアの栄光のすばらしさは（今はまだ世に見えていませんが：第一ペテロ 1 章 8 節）、今ここにある現実なのです。再臨のとき、神の出現が歴史的現実となったとき、地上の救われていない人々の共通の反応は、畏敬の念と神への信仰の欠如に対する深い後悔であることはすでに見てきたとおりです。そうであるのなら、主に従う者として、私たちは、（この聖書の贈り物と聖霊の教えの助けを受けて）ここに描かれている主の本当の姿を、素晴らしい現実として心に描き、心に刻むべきでしょう。

なぜなら、ここには七つの燭台の真ん中に、すべての栄光をまとった私たちのメシア、すなわち、全体で七とする完全さで表されている教会の中心かつ焦点となるお方として私たちの主が立っておられるからです。右手にある七つの星は、キリストに召された教会の七つの歴史的期間を監督する天使たちです（20 節参照）。主の口から出ていた剣というのは、神の言葉（ヘブル 4 章 12 節）の象徴、主の真理そのものであり、聖典の最終章であるこの書物が与えられたことによって完成しました。この絵像の中で、キリストの花嫁の完成とその栄光における三位一体のお互いの働きの協力がはっきりと見られます。私たちの主ご自身が教会（七つの燭台）の真ん中に立ち、（父から委任されて：ヘブル 2 章 13 節後半参照）その発展を命じ指揮する管理権限（天使の監督者たち）を手に持ち、聖霊の領域と働きである御言葉の剣を通してこの輝かしいプロセスを力づける（エペソ 6 章

17 節)のです。ですから、16 節の描写の最後にキリストの御顔が私たちを照らしているように、キリストの栄光を直接自分の肉の目で見る日まで、私たちはペテロの言葉を思い出し、またキリストについて語られている他のすべての聖句(第一コリント 13 章 12 節; 第一ヨハネ 3 章 2 節; 参照:ヨブ 19 章 26-27 節も参照)の言葉の中に、今ここで主を信仰によって見ることができるようにしてくれる真の力があること、それにより主の栄光のために生きる事ができるようになることを忘れず、大切に心に留めておきましょう。

> こうして、預言の言葉は、わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも、[主の日の]夜が明け、明星がのぼって(すなわち世の光であるキリストが栄光のうちに戻られて)、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしび(詩篇119篇105節参照)として、それに目をとめているがよい。聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ[た時に受け取られたもので]、神によって語ったものだからである。(第二ペテロ 1 章19-21節)

黙示録 1:17-20

わたしは彼を見たとき、その足もとに倒れて死人のようになった。すると、彼は右手をわたしの上において言った、「恐れるな。わたしは初めであり、終りであり、また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉とのかぎを持っている。そこで、あなたの見たこと、現在のこと、今後起ろうとすること（すなわち、艱難期とそれに続く出来事）を、書きとめなさい。あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台との奥義は、こうである。すなわち、七つの星は七つの教会の御使であり、七つの燭台は七つの教会である。

死人のように： 目に見える神の存在、ここでは復活したキリストに対するヨハネの反応は、適切で、完全に理解できます（出エジプト 33 章 20 節; 申命記 5 章 26 節; 士師記 13 章 22 節; イザヤ 6 章 5 節; エゼキエル 1 章 28 節を参照）。肉（しかも堕落した肉）である私たちにとって、聖なる完全な神との交わりは不可能であり、考えられないことです（その経験は復活を待たねばなりません）。さらに、この世で最も偉大な信者の一人である使徒ヨハネでさえ、栄光のイエスを肉眼で見る準備ができていなかったことを考慮すべきです。もし私たちが神をありのままに見ることができれば、私たちの地上での恐怖がまったく根拠

のないことだとすぐに気づき、神に対する個人の奉仕に欠けていることをすぐに恥じないでしょうか？この箇所は、聖書の助けを借りて、信仰の目を通して主をありのままに見ること、そして、心を尽くして主を信頼し、力を尽くして主に従うことを決意する、貴重な機会を私たちに与えてくれているのです。私達はこれを行うべき程、行っておらず、またこれにおいて成功を収めることはできないかもしれませんが、最終的に主と対面するとき、私たちは、主への一つの祈り、主に近づくための一つの試み、主の教会のための一つの宣教行為も後悔することはないでしょう。結局のところ、私たちの神とそのキリストに対する熱心さや熱意の欠如は、このシリーズの次の箇所で見るように、艱難期前の教会の招集の最終段階でのマイナスな性質です。ですから、私たちが命よりも愛していると主張している神の現実を強化するために、また、私たちがそれぞれ負うべき各々の十字架を喜び勇んで引き受けるために、あらゆる機会を最大限に利用するのがよいでしょう。

恐れるな：　イエスのこの言葉は、ヨハネに神への健全な恐れを捨てろと命じているのではありません。それは、すべての信仰者の生活に不可欠な要素であり、それ（畏怖、尊敬、敬意を含む）なしには真の神への愛は不可能です（参照：申命記 10 章 12 節, 10 章 20 節; 詩篇 19 篇 9 節; 箴言 1 章 7 節; 伝道の書 12 章 13 節; イザヤ 6 章 5 節, 11 章 3 節, 33 章 6 節, 57 章 11 節; マタイ 10 章 28 節; 第二コリント 5 章 11 節; エペソ 5 章

21 節, 6 章 5 節)。とはいえ、神を恐れることと、神を理不尽に恐れることの違いを理解することも、信者にとっては重要なことです。この点で、私たちの状況を、子供とその尊敬すべき愛情深い両親の関係に例えることができます(実際には、神は私たちをイエス・キリストにおいてご自分の子として養子にされたので、この例えはそれ以上のものです。ヨハネ 1 章 12 節; ローマ 8 章 14-19 節; ガラテヤ 4 章 5 節; エペソ 1 章 5 節; ヘブル 12 章 7 節)。正常で健全な家庭では、子供は常に親を恐れて生きているわけではありません。しかし、すべての子どもは、幼いときに、親の権威は侮れないこと、そして(特に、正当な基準がしかれているような場合)、親の目から見て容認できない行動を考えたり実行したりするときに、不安を覚えることは本当に正当な感情であることを学ぶ必要があります。同じように、私たち信者は、私たちのために捧げられた御子の犠牲に基づいて父なる神の家族として採用されたので、私たちに対する神の愛を確信することができますが(第一ヨハネ 4 章 18 節参照)、同じ意味で、私たちの地上の両親がそうする以上に、天の父が私たちの容認できない行為を許容してくれると想像して自分をごまかすことは愚かなことです(ヘブル 12 章 4-13 節)。ですから、私たちのために御子を死にわたされるほど私たちを愛してくださった父を病的に恐れることは、私たちの神の完全で憐れみ深い御性質を完全に誤解していることになります(ヨハネ 3 章 16 節; ローマ 5 章 8 節; 第二コリント 5 章 14 節)。しかし、神が私たちをこれほどまでに愛し、キリストにおいて私たちを赦してくださるという

事実が、私たちに神を軽んじる気持ちを生み出させ、神の子として召された者にふさわしくない行いをするようにさせるのでしょうか。とんでもないことです。なぜなら、神への健全な畏れは、私たちをまっすぐな道へと導き（出エジプト 20 章 20 節; 箴言 3 章 7 節）、この世の多くの落とし穴から遠ざけてくれるからです（詩篇 19 篇 9 節; 箴言 9 章 10-12 節; 伝道の書 12 章 13-14 節）。このような神への適切な恐れを持ち、神が定められた方法で従う者（イエス・キリストに従うことを通して）には、現世でも来世でも、本当に何も恐れるものはありません（ローマ 8 章 12-17 節参照）。

> また、からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。（マタイ10章28節）

死とハデス（黄泉）の鍵： 「死と黄泉」とは、現代の言葉で一般に「地獄」と呼ばれるものを指します（黙示録 6 章 8 節，20 章 13-14 節でも同じ意味で使われています。マタイ 16 章 19 節も参照）。つまり、この世の生活の中でキリストを拒否した死者の場所です。私たちが「地獄」と呼んでいる概念は、いくつもの点で間違っており、主がここで使われた複合語＜「死と黄泉」は、はるかに正確で具体的です。現在の「地獄」であるハデスには、

次の三つの分離した区画があります。[51]

1) 苦悩（私たちが「地獄」と思っている場所で、不信者が死後一時的に収容される場所。マタイ 5 章 29-30 節, 23 章 33 節; ルカ 12 章 5 節, 16 章 23 節; 黙示録 20 章 13-15 節）。

2) アブラハムのふところ（主が、当時第三の天に昇られる前に、他界した信者が一時的に収容された場所。今の信者は死ぬと、第三の天で主と共になります。ルカ 16 章 19-31 節; 黙示録 7 章 9-10 節も参照）。

3) 深淵（反抗的な天使の一部、特に創世記 6 章の人類への攻撃に関与した天使が一時的に幽閉されている場所です。ルカ 8 章 31 節; 第二ペテロ 2 章 4 節; ユダ 1 章 6 節; 黙示録 9 章 1-11 節, 20 章 1-3 節）。

すべての信者の（歴史の終わりにおける：黙示録 21-22 章）最終的な住まいは新地なので、黄泉の国での滞在はすべて一時的なものです。不信仰な人類と反逆の天使の最終的な住まいは火の池（最後の審判の後：マタイ 25 章 14-46 節; 黙示録

---

[51] 黄泉についてのより詳しい情報は、悪魔の反乱シリーズの第 1 部、第 II.6.d 節、第 2 部、第 II.3.b 節、第 5 部、注#28（マタイ 16 章 18-19 節におけるペテロの役割が論じられている）を参照のこと。

20 章 11-15 節)です。「死とハデス」という表現はこの文脈でも重要です。なぜなら、ここで言及されている死者は未信者であって、主にあって死んだ信者ではないことが明らかだからです(主にあって死んだ信者は現在天国にいます:第二コリント 5 章 6-10 節; 黙示録 7 章 9-10 節を参照)。

私たちの主イエス・キリストが持っている「鍵」は、彼によってのみ、死と罰という人間共通の運命から逃れることができるという事実を指しています(ヨハネ 14 章 6 節)。神は不思議な憐れみで私たちのために御子を与え、イエスは私たちのために死なれたので、その運命は誰にでも変えることができるのです-人はただ彼に立ち返ることによって、罪と死の力からの贖いを受ける必要があるのです(ローマ 8 章 1-4 節; ガラテヤ 3 章 13 節, 4 章 5 節; エペソ 1 章 7 節; コロサイ 1 章 14 節, 1 章 20 節; ヘブル 1 章 3 節; 第一ペテロ 1 章 18-19 節; 黙示録 1 章 5 節)。そして、罪と死に代えて永遠の命が与えられます(第一ヨハネ 5 章 11-13 節)。ここで使われている複数形の「鍵」も重要です。キリスト・イエスが**鍵**ですが、私たちは彼を受け入れ、彼に従わなければなりません(つまり、彼に信仰を置くことによって、恵み深く提供された鍵を受け取り、利用しなければならないのです)。主はすでに私たち皆のために「鍵を開けて」牢屋の扉を開けてくださいました(参照:イザヤ 42 章 7 節; 61 章 1 節)が、私たちはまだ主に従って出ていかなければなりません(参照:使徒行伝 12 章 9 節)。すべての功績、すべてのわざは彼によるもので

すが（エペソ 2 章 8-9 節）、私たちが解放されるためには、主のなされた業に応答しなければなりません（ヨハネ 1 章 11-13 節; ローマ 10 章 8-11 節）。私たちの主がヨハネ 3 章 5 節で、私たちが新しく生まれたとき「水と御霊によって」救われると語ったように（すなわち、一方では御言葉の水である福音のメッセージを信じてそれに応え、他方では御霊の力によってイエスにおける神の救いがあるのです（エペソ5章26節、黙示録22章17節）。神は御子を犠牲にされることで私たちのために最大のことをしてくださいました（ローマ 5 章 6-8 節; 第二コリント 9 章 15 節; エペソ 2 章 8 節）しかし、私たちの自由意志を無視し、私たちの意志に反して神を信じるように強制することはありません（第一テモテ 2 章 4 節; 第二ペテロ 3 章 9 節; 黙示録 2 章 21 節も参照 ）。

七つの教会の天使たち： ここで言及されている「アンゲロイ」（ἄγ ε λ ο ι）は聖書の中でいつもそうであるように、（ある訳では人間の「メッセンジャー」や「牧師」となっていますが、そうではなく）天使です。また、この箇所でもそうですが、天使は聖書の中でしばしば星として象徴されています（ヨブ 38 章 7 節; イザヤ14章12−13節 40 章 26 節）。[52] この節で述べられているような監督と保護が天使に任されることは珍しいことではありま

[52] この七人が七大天使である可能性は非常に高いです。「来たる患難期」パート 3A、セクション I.1、「七つのトランペットと七大天使」を参照。

せん。これに関連するものとして、個々の信者の保護（創世 32 章 1 節; 列王下 6 章 16-17 節; 詩篇 91 章 11-12 節; ダニエル 6 章 22 節; マタイ 4 章 11 節; マタイ 18 章 10 節; ルカ 16 章 22 節; 使徒 12 章 15 節; ヘブル 1 章 14 節）、特定の国への働き（ダニエル 10 章 13 節; 10 章 20-21 節; 11 章 1 節）と新しいエルサレムの門（黙示録 21 章 12 節）の保護が類似例として挙げられます。この最後の保護監督の例でも、黙示録 1 章 20 節に記述されているのと同じように、イスラエルの各部族の各門に一人の天使が割り当てられていますが、この事実は、黙示録 21-22 章に記述されていることが、イエス・キリストに信仰を置くすべての人を含み、最終的にイスラエルの枠組みに編成されていることを考慮すると、さらに重みを増します。[53] このように、教会の各世代の「天使の連係」は、聖書の他の箇所に見られる個人、国家、キリストの体の最終的な各部門のための連係と近く類似しています。さらに、2-3 章にある七つの教会は個々の地域教会でもあるので、キリストのすべての真の教会に特別に割り当てられた天使の奉仕者の原則も、これらの箇所から理解されるべきです。このような天使の奉仕者の目的は、これまでの研究で明らかになったとおりです。神はご自分の力でなさる不思議なことに加えて、被造物（人であれ天使であれ）を通して働

[53]教会時代の信者は最終的にこれらの部族に属することになるのでなおさらのことです。サタンの反乱」シリーズの第 5 部「裁き、回復、置き替え」の「4 つのギャップとその 12 日のグループ分けの象徴」をご覧ください。

かれます。このように、私たちが属しているイエス・キリストの教会に対する神の支配と監督は、高度に組織化されたものであり、私たちの成長と啓発の細部にわたって、実際、時の初めから綿密に計画されています（ローマ 8 章 28-32 節; エペソ 1 章 11 節, 2 章 10 節, 5 章 25-27 節）。この視点は艱難期の間際に立つ私達が持ち続けるべき重要なものです。

VI. 結論：私たちの希望の真の焦点

艱難期前の人類の歴史が終わりつつあるこの時期に、多くの信者にとっては、複雑であり、かつ快適という、二つの潜在的に危険な要素が絡み合っている生活となっています。なぜなら、人が生活に必要なものを豊富に持ち、贅沢をするほど（歴史的に見れば、これは常に少数の人の領域ですが）、キリスト教に望みを託すという最も強力で自然に鼓舞してくれるものが取り除かれてしまうからです。そして、豊かに供給してくれる現代のライフスタイルに（このライフスタイルの一部である娯楽や喜びを考慮に入れるなら、なおさら）、執拗に厳しく支配されてしまうことになります。特に周りにいる私たちの友人や隣人のほとんどがこのはかない世界の誤った希望に焦点を当てている環境では、必死な日々と多忙な週の終わりには、主への熱心な奉仕などというような事を考慮するための時間もエネルギーも殆ど残されていないでしょう。この課題−マモンの支配している領域で神に仕えること−は簡単なことではありませんし、この教会の最後の日々にこれに対する答えがあまり知られていないことは、実は不思議なことではありません。ラオデキヤの信徒たちが物質的な繁栄にもかかわらず霊的に貧しかったように、教会の最後の世代であり、ラオデキヤの疑わしい遺産を受け継ぐ私たちも、本当に大切なもの、永遠のものに希望を集中し、本当に大切ではないもの、むしろ塵となる運命のものを排除するという課

題に真剣に取り組む必要があるのです。私たちの前にある希望の明確なビジョンがなければ、（私たちを取り巻く相対的な繁栄と普遍的な無関心に直面して）主において、適切かつ有益なレベルの主への熱意を持つように動機づける可能性はほとんどないからです。霊的に安全であるために、そしてさらに重要なことは、これからの困難な時代に効果的に備えるために、今、私たちは、このような厳しい物質的生活の中で蔓延するこの世の快適さの毒ガスを打破し、代わりに私たちの真の宝物は、天国で忙しく蓄えるべきものであることを心にはっきりと認識しなければならないのです。

> あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。（マタイ 6章19-21節）

イエスこそが私たちの宝物であり、この地上の生活は、たとえ私たちの夢と期待を超えるようなものであっても、与えることができないものです。私たちはイエスのためにここにいるのであり、イエスのおかげで、そしてイエスが私たちのためにしてくださったことのおかげで、墓を通り越して長く生きることに望みをかけ

ているのです。私たちは主を忘れていないでしょうか？私たちは、物質的な繁栄や欲望や恐怖という欺瞞を通して、悪魔が必死になって作り出したこのもろくて満足を与えることのないニセ幸福のベールに覆われてしまっている真実、善、永遠の現実を見ることができるでしょうか。もし今、私たちが主をかすかにしか見ることができないとしたら、来たる嵐が私たちを襲うとき、私たちはどうなってしまうでしょうか。ですから、私たちは世間やこの世のものに目を奪われてはならないのです。私たちは毎日、あらゆる機会を利用して、神に近づき、救い主のようになり、まだ光があるうちに、神が私たち一人ひとりのために選んでくださった方法と務めで神に仕えなければならないのです。

> そこでイエスは彼らに言われた、「もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここにある。光がある間に歩いて、やみに追いつかれないようにしなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない。(ヨハネ12章35節)

艱難の日々の先には、主が約束された永遠の栄光、すなわち私たちへの報い、復活、新しいエルサレム、そして主との永遠の繋がりがあります。私たちがほんの小さな信仰を持つだけで、主は、私たちが来たる「火と水」(詩篇 66 篇 12 節; イザヤ 43 章 2 節)を通り、越えなければならない涙の荒野(詩篇 84 篇 5-7 節; イザヤ 58 章 11 節)を通り、どんな個々の試練にも、死

ぬまで（詩篇 48 篇 14 節）安全に連れて行って下さる誠実な方であられます。そしてその日、聖なる山で復活と栄光のうちに主と共に立つとき、私たちは喜びの永遠の賛美と感謝と崇拝の始め、主が私たちに約束されたすべてに忠実であったことを確かに知ることになるでしょう。

> その日、人は言う、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しもう」と。（イザヤ25章9節）

私たちイエス・キリストを信じる者は、「世の終りに臨んでいる」（第一コリント10章11節）者たちであり、王の王、主の主の文字通りの栄光の再臨（黙示録19章16節 ）を待っているのです。大艱難期の広大な暗闇と耐え難い試練の反対側には、主の栄光の出現、世界に対する主の「黙示＜出現＞」があり、復活と栄光のうちに主と共に永遠に続く、終わりのない喜びがあります（第一テサロニケ4章16-17節）。私たちの主人である彼とのこの最終的で言葉に表せないほど素晴らしい結合が私たちの希望の真の焦点です。そして、艱難の最も暗い日々でさえ、一日ごとにこの祝福された現実に近づいていくのです。

> **祝福に満ちた望み**、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。（テトス2章13節）

その栄光の日まで、私たちは自分の歩き方に気をつけましょう。私たちはむしろ、私たちの前に置かれたこの競争をよく走り（第一コリント 9 章 24-27 節）、時間を無駄にせず（エペソ 5 章 16 節; コロサイ 4 章 5 節）、待ち受けている戦いのために自分を訓練し（第二テモテ 2 章 3-5 節, 4 章 7-8 節 ）、決して希望であられる方を見失わず、永遠の命における死に対する勝利という死の中でも大きな揺るがない確信となる方を見失なわないようにしましょう。

> 神は彼ら[信者]に、異邦人の受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、**栄光の望み**である。（コロサイ1章27節）

> マラナ・タ（アラム語＝「私たちの主よ、お戻りください!）（第一コリント 16 章 22 節）

どんなに試練があっても、艱難期がやってきても、どんなに辛く暗くても、たとえ死や殉教が待っていても、主の再臨の驚きと

栄光、そしてその後永遠に主と一体となる時に経験する歓喜は、その前にあったどんな悲しみや苦しみも、愛する方と共の永遠の命という眩しい光で消し去ってくれます（黙示録 7 章 16-17 節）。

> わたしは思う。今のこの時の苦しみは、[再臨の際に]やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。なぜなら、被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、[アダムの罪の結果として]服従させたかたによるのであり、かつ、[再臨の際に]被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望み(すなわち、わたしたちの復活)が残されているからである。実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれること（すなわち、復活）を待ち望んでいる。**わたしたちは、この望みによって救われているのである。**（ローマ8章18-24節前半）

VI. 結論：私たちの希望の真の焦点

[「来たる艱難期　2A：黙示録の七つの教会」に続く]